
ETERNAL RING
エターナルリング
竹内 誠
電撃文庫

郵便はがき

おそれいりますが
切手を貼って
お出しください

1018305

東京都千代田区
神田駿河台1－8
東京ＹＷＣＡ会館
株式会社メディアワークス
「電撃ゲーム文庫」係行

〒	ー	ここには何も書かないでください→	
住所	都道府県		
		TEL　　　（　　　）	
氏名	ふりがな	男・女	年齢　　歳
職業	※以下の中で当てはまる番号を○で囲んで下さい ①小学校3年生以下　②小4～6年　③中1　④中2　⑤中3　⑥高1　⑦高2　⑧高3 ⑨短大・専門学校生　⑩大学生・大学院生　⑪会社員　⑫公務員　⑬自営業　⑭自由業 ⑮主婦　⑯予備校生　⑰フリーアルバイター　⑱無職　⑲その他（　　　）		
お買い上げ書店名	市・区・町　　店		

電撃ゲーム文庫　愛読者カード

皆さんのご意見をより良い作品づくりの参考とさせていただきたいと思います。
ぜひ以下のアンケートにご協力ください。（※あてはまる箇所に／を入れてください）

エターナルリング

（1）本書をどこでお知りになりましたか？（複数回答可）
□書店　□電撃のないしょ話　□電撃の缶詰　□テレビのCM
□インターネット　□人にすすめられて
□テレビ・ラジオ（番組名　）
□雑誌・新聞の記事（雑誌／新聞名　）
□その他（　）

（2）本書の内容について。
□とても面白かった　□面白かった　□普通　□つまらなかった

（3）本書の魅力はどの部分ですか？
□ストーリー　□キャラクター　□設定
□その他（　）

（4）本書のカバーについて。
□とても良い　□良い　□普通　□良くない

（5）本書の原作のゲームをプレイしましたか？
□読む前に遊んだ　□読んでから遊んだ　□これから遊ぶ
□プレイする予定はない

（6）本書の原作のゲームの魅力はどの部分ですか？
□ストーリー　□キャラクター　□設定　□グラフィック

（7）所有しているゲーム機をすべて教えてください。
□プレイステーション2　□プレイステーション　□NINTEDO64
□ドリームキャスト　□サターン　□スーパーファミコン　□ゲームボーイ
□ゲームボーイカラー　□ワンダースワン　□ポケットステーション
□ネオジオポケット　□パソコン　□ビジュアルメモリー

（8）1年間に何本くらいゲームソフトを買いますか。
□１０本以上　□５～１０本　□２～３本　□買わない

（9）小説で読みたいゲームソフトを教えてください。
（ソフト名　）

（10）これまでにプレイしたゲームで好きな作品は？
（①　②　③　）

（11）本書に対するご意見、ご感想をお書きください。

プレゼント応募券を貼ってください

●ご協力ありがとうございました

エターナルリング

竹内　誠

電撃文庫0460

ETERNAL RING

エターナルリング

竹内 誠

◆

Illustration/RURU

ETERNAL RING
エターナルリング

Contents

ETERNAL RING

エターナルリング

竹内誠

イラスト／RURU

デザイン／荻窪裕司

プロローグ

ヘインガリアは、西大陸最北端に位置する王国である。数十年で武力により周囲の小国を併合し、大陸随一の領地を持つようになった。
数年前に前王が崩御し、今は若干十八歳のイアン・マーティンが国王となっている。
四人の長老たちは年若い国王を押さえ込み、国の実権を我がものとしていた。

夕焼けのなかで王城グレイト・ロードは茜に染まっていた。
「こんな時間に何の用だろう？」
親衛隊の新米隊員であるカインは、夕暮れになってから隊長の執務室へ呼ばれたことを不思議に思っていた。今日の任務で、叱責を受けるようなへまはしていない。だがあるいは、自分が気づいていないうちに失態を演じていたのだろうか？
だがカインは思い悩んでも仕方ないと考え、足早に執務室へと急いだ。
「親衛隊カイン・モーガン、出頭しました」

カインは執務室の扉の前で、ノックをすると大声で名乗った。
「入れ！」
いつもと変わらないグリアムの声を聞いて、カインは扉を開けると執務室のなかに入った。
見るとグリアム隊長は机の横に立っており、いつも隊長が座っている椅子に別の人物が座っている。
「あっ！」
カインは、隊長の席に座っている人物の顔を見て驚愕した。ヘインガリア王、イアン・マーティンそのひとではないか。
慌ててカインは跪き畏まった。
「国王陛下から直々のお言葉である。心して聞くように」
グリアムは威厳のこもった声で、カインにそう言った。
「カイン。かまわぬ、立つがいい」
イアン王は、静かな声でカインに立ち上がるように告げた。
「これから話すことは他言無用である。よいな？」
カインはイアン王の問いに、無言で頷いた。
「知っているように、我が国は長老派による過激な外交政策により、急速に国土を広げて大陸屈指の大国となった。余は、これからは過激な政策は控え、隣国との調和ある発展をすべきと

考えている。だが長老たちは、現状に満足していないようだ。頻繁に行われる長老会議、軍隊の再整備、さらに不可解な調査の数々。いずれも長老たちの独断と言っていい。残念なことに今の余に、長老たちを止める力はない」

イアン王はそこまで話すとしばしの間、天井を見つめた。おそらくは実権のない自分の現状を憂いていたのだろう。

「だがこのまま、それを看過する気はない。長老派の昨今の動きを見ると、特に不審と思われるのが『不帰の島』と呼ばれる孤島に送った調査部隊だ。長老たちは遺跡の調査と説明しているが、それだけであるはずがない。そこで親衛隊所属カイン・モーガンに命じる。直ちに『不帰の島』に渡り、調査部隊の動向を探れ」

「御意」

カインは考えることもなく、イアン王の命令に即答した。危険があるとか、難しいとかは考えてもいない。王自ら、自分を指名してくれた任務で命を落とすなら本望である。

「書状を用意した。これを調査部隊に渡せば、お前を部隊に編入するだろう。このことは長老派には内密にしなければならない。故に『不帰の島』に着くまでは、軍や国の力はほとんど使えん。その代わり資金はいくら使ってもかまわん」

国の実権を握っている長老派に内密となれば、当然のことだろう。だが今の世の中、金があれば大抵のことはできる。資金が豊富なら、困難な任務もどうにかなるものだ。

そこまでイアン王が語った時、城の人員交代を告げる鐘が鳴り響いた。

「もう、こんな時刻か。あまり姿を消していると、怪しまれるな」

王であるイアンの居所は、城のなかの誰もが気にしている。時には中庭や庭園でひとりになれる時もあるが、あまり所在不明でいると誰かが捜しにくる。もし親衛隊の執務室にいるところを見られたら、きっと長老派の誰かに知られてしまう。

「そろそろ戻らねばならん。詳しいことはグリアムに聞くがいい」

そう言うとイアン王は立ち上がった。

カインはすばやく扉の横に動くと、それを開けて王を待つ。

「頼んだぞ」

イアン王は扉を出るときにもう一度、カインの目を見てそう言った。その言葉を聞いて、カインは王が自分に大きな期待を寄せていることを確信した。その期待を裏切らないように、カインは全力を尽くすことを心に誓っていた。

数時間後、カインは王の書状と身の回りの物を持って不帰の島を目指して旅立っていった。

第一章　不帰の島



1

王の勅命により、不帰の島に来てから一週間が過ぎようとしていた。
長老派の派遣した調査部隊の、本当の目的を探るためにやってきたのだが、どうにも奇妙な状態に陥っている。
なぜならカインが到着してみると肝心の調査部隊が、まったく活動していなかったのだ。
ヘインガリアの騎士団長であり、調査部隊の隊長であるダレル・ストーンは小屋に引きこもったまま任務を果たそうとしていない。
他の隊員は半数が魔物との戦いで死亡、現在はグラハムが副隊長となって、かろうじて隊をまとめている。
当然のことながら探索は、まったく行われていない。
そのためカインが第一目標であった遺跡に、自ら入って探索を続けているのだ。
今日はようやく第一の遺跡、水の神殿の最深部まで到達したため、調査部隊の待つ集落に戻るところであった。

「うっ……」

カインはあまりの眩しさに顔をしかめた。薄暗い廃墟のなかに長くいたため、異常に太陽が眩しく感じられる。

（キャンプに帰ったら、少し寝るか……）

調査部隊は、無人の集落を利用してキャンプ地にしている。ボロボロの小屋しかないが、野宿やテントを張っての野営よりは快適だ。

考えてみれば二日以上、神殿の廃墟のなかをうろついていたことになる。疲れれば安全そうな場所で仮眠をし、起きられるようになったら廃墟のなかをさまよい歩いた。

水の神殿と名付けられた遺跡は、奇妙な場所だった。かなり高度な文明が築いた建物に違いないのだが、地下にある部分のほとんどが水没したままだった。

カインは独自に調査を行い、その水没した部分に侵入することに成功していた。

もっとも奇妙なのは遺跡だけではない。

この不帰の島自体が、奇妙な場所なのだ。

この海域周辺の漁師や船乗りは一切、この島に近づこうとしない。

いや近づくだけではない、島の影を見ることすら嫌がる。

「怪しい魔物の住む島へ行きたがる奴はいねえよ」

ヘインガリアの港で漁師や船乗りたちから、何度も聞いた言葉だ。

大金を払うと言っても、なかなか不帰の島までカインを運ぶという船乗りはいなかった。ようやく借金で苦しんでいる漁師を説得して、この島まで送らせたのだ。

ヘインガリア軍の船が使えれば楽に来れるのだが、今回は使うわけにはいかなかった。なぜならカインが不帰の島に行くことは、ヘインガリアの長老たちには秘密にされていたからだ。

ヘインガリアのイアン国王は、長老たちが画策した今回の調査について疑念を抱いていた。長老たちは国王に、今回の目的は遺跡の調査であると報告していた。だが遺跡の調査を行うのに、騎士団長であるダレルを派遣する必要などないはずである。

イアンは前国王の急逝により、十五歳にして王位についた。争いを嫌う彼は、今までのような領土拡張のための紛争を避けようとしていた。だが以前からヘインガリアの実質的な権力を握っていた長老派は、新国王イアンを飾りとしか見ておらず方針を変更する気配はない。

それが証拠に長老たちは王に対する礼儀は見せるものの、実際の議会では裏ですでに結果の決まっている討議をしらじらしく行い、最後にイアンに承認を求めるだけだ。イアンは討議の結果を覆したいと思い、結果に意義を唱えたこともある。

しかし長老たちは慇懃無礼にさまざまな理由を述べて、結果を変えようとはしない。国の重要組織を掌握している自信が、長老たちにそうした態度を取らせるのだ。王になったばかりのイアンの権威だけでは、長老たちの思惑を変えさせることはできない。

だがイアンは焦らずに、少しずつ真の王としての力を身につけ、長老たちの支配を弱めよう

としている。カインも、その父であるグリアムも、自ら努力を怠らないイアンのなかに名君の資質を見いだし心から忠誠を誓っている。

今回、イアンは長老たちの動きを不審に思い、もっとも信頼のおけるカインに不帰の島で行われていることを探ってくるよう命じたのである。

だが不帰の島にやってきたカインは、この島の尋常でない状態に驚いていた。

まず島のあちらこちらに出現する魔物である。

子供のおとぎ話に出てくるような魚人、巨大な蟹や昆虫など、大陸では見たこともない魔物がうろうろしていた。

(長老たちは、この魔物を戦いに使うつもりなのだろうか?)

確かにこの島にいる魔物を飼い馴らして、戦争に使うことができれば強力な戦力となる。だが武力による問題解決を嫌うイアン王が、そのような魔物を使うことを許すはずがない。ならば長老たちが極秘に探索を行っているのも頷ける。

(だが、それにしては変だ……)

調査部隊は魔物を捕らえるどころか、調査すらしていない。むしろ無防備に探索をしたために、すでに数人の犠牲者を出しているくらいだ。

「何だ?」

考え事をしながら歩いていたカインは、調査部隊の集落から流れてくる異臭に気づいて立ち

止まった。
「この臭い……。あの煙は！」
カインは、曲がりくねった谷間の向こうに立ちのぼる煙を見て走り始めた。
集落への門は開いていた。
その向こうに倒れている男が見える。
確か門番をしていたアーネストだ。
「おい、大丈夫か？」
カインは声をかけながらアーネストを抱き起こした。
だがアーネストは力なく頭を垂れて、動くことはなかった。
「これは……」
カインが周囲を見渡すと、目に入るかぎりの建物はすべて燃えている。そのなかで納屋の壁に寄りかかるようにして、腹を押さえている人物が目に入った。
「おい大丈夫か！」
壁に寄りかかっていたのは、傭兵のレオだ。長老のひとりハーラン自らが雇い、調査部隊に同行させた人物だ。
「しっかりしろ、何があった！」
「くそっ、油断した……」

レオは苦痛に顔を歪めながら、カインを見た。
「誰がこんなことを！」
「隊長の……ダレルだ」
「隊長が？　この火事も？」
「みんな……やられた」
カインの問いかけには答えず、レオは一方的に喋っていた。
「奴は……エターナルリングを……早く追わないと……ぐうっ！」
レオは、それだけ言うと痛みのために意識を失った。
カインはレオの腹の傷を見て、今は止血しておけば大丈夫だと判断した。大きな血管が破れている様子はないので、カインは剣の手入れのために持っていた布を使って、レオの傷口を圧迫して止血を施した。
あとでちゃんとした治療をしなければならないが、今は応急処置しかしている暇がない。まだ燃えている小屋のなかに、生きている者がいるかもしれないのだ。
「くっ！」
カインは納屋の扉を押し開けた。
炎の色に染まった納屋のなかを見回すと、倒れている人影が目に入った。
倒れていたのは物資の管理を行っていたウォレスだ。

「大丈夫か？」

近づいて声をかけた瞬間、カインはウォレスが絶命していると判断した。彼の首は、曲がるはずのない方向に曲がっていたのだ。

ウォレスの目を閉じてやりながら、カインは遺体のかたわらに自分のショートソードが落ちているのを発見した。鞘にはいった七十センチほどの長さの剣は、間違いなく自分が持ってきたものだ。

これは副隊長のグラハムに、隊で管理するからと没収されたものだ。そのためカインは、水の神殿のなかで出合った魔物とダガーで戦わねばならなかった。

カインはショートソードを拾い上げると、次の生存者を捜すために納屋を出た。

まだ姿を見ていない調査部隊のメンバーは、グラハム副隊長と医療担当のマリーだけだ。グラハムは高台の小屋、マリーは川向こうの水車小屋にいるはずだ。

バキバキバキ！

その時、凄まじい音をたてて高台の小屋の屋根が焼け落ちるのが見えた。あの状態ではグラハムが小屋のなかにいたとしても、ひとりで助け出すことは不可能だ。カインはすでにグラハムが逃げ出していることを祈って、手すりが燃えている橋を渡る。

調査部隊の病院がわりとして使われている水車小屋も、他の小屋と同じように燃えていた。

「マリー、生きているか！」

カインは扉を開けるとマリーの名を呼んだ。

だが炎と煙の充満する小屋のなかから答えはない。

広間の向こうにある台所にいつも彼女がいたことを思い出し、カインは息を止めると小屋のなかに飛び込んだ。

(四分程度なら、呼吸しなくてもなんとかなる)

以前に見た小屋の内部のイメージを脳裏に浮かべて、煙で傷めないように目を閉じたまま広間を横切る。炎がカインの顔を熱くするが、気にしている暇はない。

(三、四、五)

距離を自分の歩幅で測り、イメージと合致する場所でカインは両手を広げた。さほどの誤差もなく彼の手は、台所と広間を区切る壁を感じとる。

カインは再び脳裏に、台所のイメージを思い浮かべる。流しと竈、整理棚。あとは水瓶があったはず。

それらのない空間に、カインはゆっくりと摺り足で進む。

(これか!)

彼の爪先に、あきらかに人物のような感触が伝わってくる。

しゃがみこんで触れると、それはひとの足だった。

手さぐりで倒れている人物を抱き上げると、カインは急いで小屋を出た。

「はあっ！」

小屋から飛び出すと、カインは大きく深呼吸をした。さすがに呼吸を止めたまま、ひとを抱えて走るのはきつい。抱えていたマリーを地面に下ろすと、カインは彼女の頸動脈に手を当てた。

「駄目か……」

すでに脈拍はなく、呼吸もしていない。

「怪我人がいたはずだが……」

あまり話もしなかったので覚えが薄かったが、確か高台の小屋で寝ていたはずだ。だがすでに、高台に立っていたふたつの小屋は屋根が焼け落ちている。なかにいたのなら絶望的だ。

「あとは隊長の小屋か」

ダレル隊長の小屋は、集落から外れた場所にあった。あるいはそこにグラハム副隊長と怪我人が逃げているかもしれない。

「とにかく確かめるか」

レオはダレル隊長に襲われたと言っていた。隊員たちがダレルに殺害されたのか、それとも別の原因があるのか、どちらにしても詳しく調べなければならない。

カインはマリーの遺体を炎の届かない場所に安置すると、隊長の小屋に続く小道へと走っていった。

立ちのぼる煙を見ると、どうやら隊長の小屋も燃えているらしい。
その小屋が見えてくるとカインは絶句した。
燃えていたのは小屋だけではない。周囲の樹木まで燃えているのだ。
それを見てカインは、これが普通の火の回り方でないことを悟った。
軍では火を使った作戦を行うこともあり、戦略を学んだカインも実地で幾度かそうした作戦を指揮したことがあった。
小屋しか燃えていない時は、油などをまいて火を放ったのかと思った。だが樹木は上から燃えているのだ。
通常、樹木などに火を放つのには根元に燃えやすい物を置いて火を放つ。幹に油を塗り付けることもある。だが少なくともそうした方法で火を放たれた生きている樹木は幹から燃えていく。
しかしカインの目の前の樹木は、梢から燃えている。
これは普通のことではない。
まるで空中から炎を振りまいたような燃え方なのだ。
そういえば集落の小屋も、屋根から燃えていた。
つまり何者かが、空から集落に炎を降らせたのだ。
だが、それは誰の仕業なのか？

ダレルが行ったとすれば、ひと知れず膨大な作業をひとりでこなしたことになる。
そしてダレルの仕業ではないとすれば、調査部隊を邪魔だと思う何者かがこの島にいることになる。
「いったい誰が、何の目的で?」
調査部隊を全滅させようとしたのか、それとも他の目的があったのか。とにかくカインの想像も及ばない相手が、集落を襲ったのは間違いなさそうだ。
ズドォオオオッ!
衝撃的な光景に心を奪われていると、すぐ真後ろで燃えていた樹木の上の部分が折れて落ちてきた。
「うっ!」
舞い上がる火の粉を避けて、カインは自然と広場へと進み出る。
「しばらくは動けないな」
広場の中心は、燃え盛る樹木と小屋から十分な距離があり、炎の熱は届かない。カインは数時間、ここでじっとしていれば火は消えると判断していた。
ドドォオオッ!
どこかで再び、燃えている樹木が倒れる音がした。
しかしカインは、その音の不自然さに気づいた。

前触れのない音。
普通、すべての音には前触れがある。
特に火災により、支えている物が重さに耐えかねて落ちたり折れたりする場合には、前触れの音がするものだ。
だが今した音は、突然すぎる。
重さに耐えかねて折れたというより、折られたという音だ。
「何かいる……」
カインはショートソードを抜くと、音のした方向を見た。
ドガッ！
折れて倒れた樹木が、何者かに持ち上げられて折れた。
「グォオオオッ！」
続いてひとの声ではない叫びが響きわたる。
その影は火災の煙のなかから、ゆっくりとカインのほうへと近づいてきた。
近づいてくる者はひとではなかった。いや、ひとに見えないことはないが、剛毛に全身を覆われ、長く鋭い爪のついた両手、獣とひとの中間のような顔は魔物と呼ぶにふさわしい風貌である。
だがカインには、その半分獣と化した顔に見覚えがあった。

「お前は、デニスじゃないのか！」

調査部隊のなかで、魔物との戦いで負傷してベッドに寝ていた男。カインが到着した日も、ベッドのなかで傷の痛みにうなされていた。

傷自体は浅いのだが治癒する速度が異常に遅く、なかなか傷口が塞がらないためだとマリーが言っていたことを思い出す。

そのデニスが、変わり果てた姿で目の前に立っているのだ。

「グアアアアッ！」

デニスは耳近くまで裂けた口を大きく開け、涎を垂らしながら吠えた。目には狂気の光が宿り、殺気を全身から発している。

「デニス、何があったんだ！　正気に戻れ！」

ショートソードを構えながら、カインはデニスに呼びかけた。しかしデニスはカインの言葉にまったく反応しない。ただ獲物を狙う獣の目で、カインを睨みつけるだけだ。

「グアッ！」

大きな叫び声をあげるとデニスは、カインへと襲いかかる。

カインは相手の動きを予測して半歩、身体をずらして攻撃をよける。だが予想に反して、デニスの爪はカインの顔を狙って迫ってくる。

「クッ！」

手にしていた剣でデニスの爪を受け止めたカインは、相手が完全にひとではなくなっていることを悟った。この速さはひとの速さではない。

爪を受け止められたデニスは攻撃を受けないように、瞬時にカインから数メートル後方に飛びすさった。

カインは相手が後ろへ下がった瞬間、間合いを詰めようとした。しかし一瞬にして数メートルも飛びすさるのを見て追うのをためらった。

あの調子で何度も跳躍することができるのなら、下手に深追いするとこちらが危ない。

戦うのなら、相手の接近してくる間合いを計るしかない。

デニスの動きに自分の動きがついていかないと考えたカインは、相手の動きを読んでカウンターで攻撃する以外、戦う手段がないと悟った。

これはひととひとの戦いではない。

（あれはもうデニスじゃない。異形の魔物との戦いと思わなければ、命はない）

いくつもの戦線をくぐり抜けてきたカインの戦士としての勘が、手加減などできないと告げている。

デニスはカインの周囲をグルグル回りながら、隙を窺っている。

背後から襲いかかろうとしているのだろう。

おそらくは狼などの獣と同じように、獲物の背後から飛びかかり脊髄を打ち砕こうとしてい

るのだろう。確かに獲物を仕留めるには、一番確実な方法だ。

だがカインもデニスの動きに注意しながら、背後を取られないように身体を回転させて敵を常に正面に捕らえるようにしている。

「ガグォッ！」

ついに業を煮やしたのか、デニスは正面からカインへ飛びかかってきた。

カインは冷静に、向かってくるデニスにショートソードを突き出した。間合いは完璧、デニスの胸をカインの剣が確実に捕らえているはずだった。

しかしショートソードが触れる一瞬前、デニスは跳躍した。

「なにっ！」

カインの頭上、ゆうに三メートルはあろうという高さをデニスは越えていったのだ。

カインは空振りした瞬間、身体を前に倒して前転した。

普通の者なら、背後に消えたデニスの姿を求めて振り返ったろう。そしてデニスの爪に、胸を貫かれていたはずだ。

デニスの動きが次の攻撃のためと判断したカインは、間髪を容れずに動いたのである。

結果、デニスの爪は空を切った。

攻撃したデニスも、カインが転がって逃げるとは思っていなかったのだ。

カインは立ち上がって身構えながら、自分が戦っている相手の力に驚愕していた。

「なんて奴だ……」
これほど手強い相手とは、まだ戦ったことはない。剣の間合いから一瞬で逃れ、さらに三メートルもの高さを飛び越える跳躍力。
「どうやって戦う？」
このままショートソードで戦っていては、防戦するのが精一杯だろう。
チクン。
目の前の魔物とどう戦うかを考えた瞬間、右手の中指にかすかな痛みが生じる。
そこには水の神殿で見つけた不思議な指輪がはまっていた。
これは奥まった石室のなかに隠されていた。
別に貴重な宝石がはまっているわけではない。金属の指輪に、燃えるような赤い文様が絡みついている。装飾品の店で同じものが売られていたとしても、さほど高値ではあるまい。
だがこの指輪は、値段が付けられないほどの価値を持っていた。
魔法の指輪。
これは、そうと呼ぶしかないものなのだ。
神殿のなかでこれを発見した時、カインは奇妙な感覚を覚えた。それは互いに引き寄せ合うような感覚だった。
まるで指輪とカインが互いを求めているような感覚。

今まで一度も、こんな感覚を覚えたことはなかった。

なんのためらいもなくカインは、その指輪を自分の指にはめていた。

それ以降、カインは自分が精神を集中すれば指輪から炎を発することができるようになった。

さほど大きな炎ではないが、薄い板程度なら打ち砕く力がある。

もちろん無限に使えるわけではない。この指輪は自分のなかから何かの力を引き出し、それを糧にして炎を発するらしい。今のカインの状態でなら指輪から五回ほど炎を出せば、もう使えなくなるだろう。

（これを使えば勝てるかもしれない）

炎で相手の動きを封じて、剣で攻撃する。このコンビネーションがうまくいけば、デニスを倒すことができるだろう。

（すべてはタイミングだ！）

再び自分の周囲を回り始めたデニスを見て、カインは魔法の指輪を使うため精神を集中させた。何度か使ってコツはつかんでいる。

「グガァッ！」

再びデニスはカインに向かって突進してきた。

デニスが跳躍する地点は、さっきの動きで見切っている。カインはデニスが跳躍する一歩前で、指輪から炎の弾を放った。

「ギヒィン！」
炎の弾の直撃を受けたデニスは悲鳴をあげながら態勢を崩す。
カインはその瞬間を逃さず左に回り込み、剣を両手で振り上げて間合いを詰める。
「グォォォォォッ！」
身体にまとわりついた炎を振り払ったデニスは、怒りの雄叫びをあげながらカインの姿を探した。しかしすでにデニスへ接近していたカインは、剣をデニスの左脇腹に突き刺した。
「ギエエエエッ！」
痛みに我を失ったデニスは、鋭い爪を振り回す。カインは突き刺した剣を手放して爪から逃れると、再び精神を集中させて指輪から炎を放った。
一発、二発、三発。
「ウキャア」
三度目の炎の弾が命中すると、デニスは崩れ落ちるように倒れた。
すると倒れたデニスは信じられないことに、そのまま地面に溶けるように消えていってしまったのだ。
「こんな馬鹿な……」
これと同じ情景を、カインは何度も見ていた。神殿のなかで倒した魔物も、同じように地面に溶けるように消えていってしまった。

デニスが倒れていた場所には、カインが突き刺したはずの剣と奇妙な輝きを宿した水色の石がひとつ残っていた。
この石にも見覚えがある。
ウォレスが大陸に持ち帰れば金になると言っていた小粒の水晶のような石だ。
もちろんカインが知るかぎり、このような宝石はない。どれほどの価値があるのかもわからない。だが魔物の死体が消えた場所に、この石が残ることが多い。
「この石は何なんだ？　そして消えてしまう魔物は？　この島にはどんな秘密があるというのだ！」
カインは混乱したまま、デニスが消えてしまった場所を見つめ続けていた。
カインがいる広場から二百メートルほど離れた丘の上で、その様子を窺っている人物がふたりいた。
「あのひと、魔法が使えるのね」
紫の服を着た若い女性が驚いた声で、顔をターバンで隠した男に語りかけていた。
「そのようだな」
「では、あのひとは私たち一族の……」
「まだわからん。とにかくお前はしばらくあの男と会ってはならん」

「どうして?」
「一族と関係があるとしても、味方とはかぎらん。まずそれを確かめねば」
「それはそうだけど……」
「あの男と会う前に、お前の父を止めろ。このまま島中で炎を吐かれてはたまらん」
「わかったわ。でもあとで、あのひとと会っていい時が来たなら教えてよ」
「もちろんだ」
それを聞くと紫の服の女性は、木立のなかに消えていった。
「あの面差し、間違いない。信じられんことだが生きていたか」
ターバンの男は、カインの姿を見つめながら両手を握りしめた。
「だとすれば運命は、まだ私を見放してはいないのかもしれん」
細いターバンの隙間から覗く目は、怪しげな光を宿していた。それは憎しみと希望の入り交じった複雑な光である。
「この姿も、あるいは……」
そう言って男はターバンの上から自分の顔に触れると、踵を返して木立のなかに消えていった。

カインは墓を立てていた。

結局、調査部隊はレオを残して全滅していた。
魔物と化したデニスを倒したあと、レオがいた場所に戻ると姿は消えていた。痕跡からすると、自分で手当てをして、どこかに行ったらしい。あの深傷では身体も満足に動かないだろうが、ベテランの傭兵なら自分の身体を癒す薬のひとつも持っているだろう。
レオに尋ねたいことは山ほどあったのだが、姿が見えないのでは仕方ない。行方は気になったが、カインにはまだやることが残っていた。
死んでしまった連中の墓を作らなければならない。
同じ国の人間として遺体をこのまま放置する気にはならなかった。
グラハム、マリー、アーネスト、ウォレス、そして遺体はないがデニスの墓も作った。
本当なら故国に遺体を持ち帰って葬りたいのだが、カインひとりでは不可能だ。それに今回の任務は終わっていない。まだ逃げ去ったダレル隊長を追わねばならないのだ。
「すまないが、これで我慢してくれ」
近くにあった岩を運んできただけの墓石に、カインはひとつひとつダガーで名前を彫り込んでいた。あまり良い出来とは言えないが、今はこれ以上のことはできない。
手向ける花ひとつなく、それでも膝をついて、短い祈りを捧げるとカインは立ち上がり墓をあとにした。
行くべきところはわかっている。

隊長のいた小屋の近くにある奇妙な青い文様の描かれた扉。

その扉を開けられるだろう鍵を、カインは神殿の奥で発見していた。同じ文様の扉を神殿のなかですでに開けている。

この鍵を手に入れた経緯も信じられないものだった。

カインは数日前、神殿の奥で竜と出合っていた。

その竜と出合ったのは神殿の廃墟の最深部、地底湖に面した小さな祭壇の前だった。

カインは、その祭壇の上にある青い鍵を吸い寄せられるように手にしたのだ。罠があるとは思わなかった。まるで鍵自身が、カインを呼び寄せたようだった。

その鍵を手にした瞬間、地底湖の水中から大量の水を押しのけて竜がゆっくりと出現した。透きとおるような青色の竜、細長い身体に大きな透きとおる翼。頭には細い二本の角があり、細い顔の大きな口には鋭い牙が生えていた。

しかし身体の大部分は水中にあり、カインが見ることができたのは上半身だけだった。竜が出てきた瞬間、カインは戦えるとは思わなかったがダガーを抜いて身構えた。

（もはや、ここまでか！）

自分の何倍も大きな竜相手に、手にしている一本のダガーで立ち向かおうとしている姿は、我ながら滑稽なものだった。



チャンスがあれば逃げ出そうと考えながら、カインは竜と対峙していた。
それは、どれほどの時間だったろう。
カイン自身は一時間ほどにも感じたが、実際は数分だったに違いない。
グウッ、ウッツ、アッ……
竜の唸り声を聞きながら、カインはどうやら竜が自分を襲うつもりがないことを理解していた。
グルゥウ……
竜はじっとカインを見つめたまま、低い唸り声を発しているだけだった。
ソナ……タ…ナ…ニモノ……ダ
唸り声はやがて、聞き取りにくいがひとの言葉のように聞こえてきた。
カギ……マ…リョクヲ……ヒメ…タモノ
最初は気のせいかと思っていたが、この言葉を聞いた時にカインは竜が自分に話しかけていると確信した。だが唸り声の合間に混ざる言葉は聞き取りにくい。カインは意識を耳に集中させ、竜の言葉を聞き逃すまいとした。
ソ…ルシア
（ソルシア!?）
そう聞こえた言葉に、カインは衝撃を受けた。それは滅んだ国の名前であった。戦乱により

壊滅したソルシアの廃墟で、幼いカインは養父に拾われたのだ。

それ以前に自分がどんな名前で呼ばれていたかは知らない。カインにとって、養父とともに過ごした時間がすべてであり、グリアムだけが父であった。

カインは、自分の過去はソルシアとともに消えたと思い続けていた。

だがその故国の名が、竜の口から発せられるとは……。

ソナタ…モ…エイエン……ヲモトメテ……グォォオオォッ！

そこまで喋ると、青い竜は苦しそうに身悶えた。

モハ…ヤ……シャベ……ルコトモ……カナ…ワ……グゥウゥ！

まるでひとの言葉を紡ぐのが命を削ることのように、青い竜は苦しみ悶えていた。

ライラ……ヲ…サガスガ……ヨイ……ワ……ガ……ハラカ……ラヨ

青い竜はそれだけ言い残すと、再び水のなかに消えていった。

その青い竜の姿は、今でも目を閉じれば鮮明に思い描くことができる。

我が同胞。

それは同じ母から生まれた兄弟姉妹や、同じ国に住み暮らした者に言う言葉だ。

だがカインは竜を兄弟に持っていた覚えもないし、ソルシアは竜と共存していた国ではない。

そんな力があれば、滅びることもなかったろう。

ソルシアは隣国のアルダインに攻め込まれ、成す術もなく滅ぼされた。運良く生き残った難民たちは、不帰の島へと逃れていった。

だがアルダインはソルシアの民を許さず、アルダインの王自らが率いる討伐隊が不帰の島へと渡っていった。

そして誰も戻ってこなかった。

それがカインが幼い頃、二十年前に起きた戦乱の記録だ。

永遠を求めて？

ソルシアの難民やアルダインの討伐隊も、永遠を求めて不帰の島へとやってきたのか？

だとすれば長老たちが求めているのも永遠なのか？

そういえば傭兵のレオは、エターナルリングと言っていた。

エターナルリング。

永遠の輪？

それはいったい何を意味しているのか？

ライラ。

竜が語った人物の名前。

それは何者なのか？

謎ばかりが増えていく。

青い文様の描かれた扉を前にして、カインは先に進むべきかどうか悩んでいた。
この島の異変を考えれば、過去に起きた事件は想像を絶するものだろう。もし自分の過去がそれに関係していたとすれば、あるいは知らないほうが幸せかもしれない。
しかし逃げるわけにはいかない。
忠誠を誓うイアン王のためにも、長老たちの思惑を暴かなければならないのだ。
そのためなら自分の過去など些細な問題でしかない。
たとえ手にした鍵が、見たくもない過去を封じた扉を開けるとしても。
カインは意を決して、青い鍵を使って封じられていた扉を開いた。

2

青い扉は、巨大な沼地へ繋がっていた。

その沼地には、破壊されてしまった何かの遺跡があった。それはおそらく沼地全体を空中回廊で結んでいた施設だったのだろう。

だが今は破壊されてしまい、もとの姿がどのようなものであったかは知る由もない。

その沼地の空中回廊の通れる部分だけを渡って、カインはここまでやってきたのだ。

おそらく昔は、あの沼地から島の各所に向かう道が通じていたのだろう。

唯一、辿れる道を進んでいくとカインは大きな谷に行きついた。

「ずいぶん深い谷だな……」

谷の周囲には霧が立ち込めていて視界は良くない。霧の間からたまに覗く風景からして、谷の幅は四十メートル以上、底は暗くて見えないほど深い。だが少なくとも、落ちて助かる見込みがないことはわかる。

崖を伝って下りることも考えたが、垂直に近い切り立った崖は十分な装備なしに下りること

はできないだろう。
もし谷を渡る手段がないとすれば、カインの探索もここまでということになる。
谷に沿って歩いていると、やがて前方に吊り橋が見えてきた。
「あの橋が渡れればいいが……」
カインはあまり期待していない声で、そう呟いた。沼地の遺跡があれだけ破壊されていた以上、吊り橋が無事とも思えない。だが近づくにつれて、吊り橋は破壊されていないことがわかった。
「向こうは森のようだな……」
谷の向こうは深い森になっている。カインがその吊り橋を渡ろうとした時、反対側からひとが渡ってくるのが目に入った。
ギシッ、ギシッ。
軽く軋む音をたてながら、男はゆっくりとカインのいるほうに吊り橋を渡ってくる。
カインは用心のため、吊り橋から数歩下がって男を待ち受けた。
近づいてくる男は古びた衣装を身につけ、赤いターバンを頭の上から顔全体まで巻いて、その隙間から目と口がわずかに出ている。
ターバンを巻いた男は吊り橋を渡り終えると、黙ったままカインを見つめた。
カインもまたターバンを巻いた男を見つめる。

「見つけた指輪は使えたようだな」

最初に口を開いたのはターバンを巻いた男だった。

「もしやと思っていたが、やはりそうだったか」

「何のことだ？」

カインはターバンを巻いた男の言葉の意味がわからずに尋ねた。

「こちらのことだ」

「それで俺に何の用だ？」

「いいものをやろう。ここに、もうひとつ指輪がある。私には無用のものだ。持っていけ」

ターバンの男は衣服のポケットから、小さな指輪を取り出してカインへ向けて放り投げる。

カインは空中で指輪を受け取る。

「毒を封じるプロテクトの力を持つ指輪だ」

「なぜ、これを？」

「その指輪があれば、この先の洞窟から谷に下りることができる」

ターバンの男は右を指さした。

「谷のなかは毒の霧が漂っているが、この指輪があれば越えられるはずだ」

「吊り橋を渡れば、もっと簡単に谷の向こう側に行けるだろう？」

「無理だ」

男はあざけるような口調で、そう言うと首を横に振った。
「今のお前では、あの森を抜けることはできない。その護身用のショートソードでは、森の魔物と戦うことはできない。もう少しまともな剣を手にしてからにしろ」
「くっ」
カインは、ターバンの男へ返す言葉が見つからなかった。確かにここに来るまでも、ショートソードでの戦いは苦しいものだった。もし森にいる魔物が、沼地の魔物より強いのなら確かに危険だろう。
「谷を抜ければ、大陸からきた連中が何人かいるはずだ。この島特有の品物を狙ってやって来た山師たちがな。そいつらと交渉してみるのだな」
ターバンの男がそう言った時、大きな地震が起きた。島全体を揺るがすような地震に、吊り橋は踊るように揺れ、崖からいくつもの石が落ちていく音が聞こえた。
「またいつか出会うことになる、その時まで死ぬな」
地震がおさまったのを確認するとターバンの男は踵を返して、まだ揺れる吊り橋を渡ろうとした。
「待ってくれ！　エターナルリングとは、何なんだ？　この島に潜んでいる竜や魔物の正体は？　なぜ俺は魔法を使えるのだ!?」
カインの言葉を聞いて、ターバンの男はゆっくりと振り返った。

「エターナルリングか……。それはお前たちが言う永遠の力を意味する名だ」
「永遠の力？」
「お前が、この島を訪れたのは偶然ではない」
男はカインの言葉を無視して、一方的に喋り続けた。
「この島には多くのものが眠っている。魔法の力、魔物、竜、そしてお前の過去」
「過去？　お前は俺の過去を知っているのか！」
「いずれわかる。そのためにも生き残れ」
それだけ言うと、男はそのまま吊り橋を渡って行ってしまった。

そこは時間のない場所だった。
彼は永い間、そこにいた。
かつては身じろぐこともできなかったが、今はできる。
ちょっと前、遊びにきた連中のお陰だ。
あの時は楽しかった。
それ以降、ここを訪れる者はしばらくいなかった。
彼女が訪れるようになるまで。
彼は彼女が来るようになってから、外の話を聞くのが楽しみだった。

彼女は自分に、いろんな面白い話をしてくれる。
ここにいては見ることのできない場所の話だ。
もちろん望むなら、渾身の力を込めて自らを縛めているものを打ち壊し、外に出ることはできる。
しかし、それをやれば彼女に怒られてしまう。
別に怒られて困ることはない。
だが怒ると、彼女は自分と話をしてくれなくなる。
外のいろいろな話が聞けないのは嫌だった。
実際に見るより、彼は彼女に話をしてもらいたいのだ。
だから、おとなしくしている。
しかし最近、彼女の訪れがない。
ここには時間の流れがないのだが、彼自身の時間は流れている。
彼の主観は、この場所での唯一の時間と言っていい。
だから退屈になると、ちょっと力を込めて縛めているものを震わせる。
そうすると彼女は、自分に会いにくる。
少し怒られるだろうが、いつものようにまた外の話をしてくれるはずだ。
今度も訪れるだろう。

彼は時間のない場所で彼女の訪れを心待ちにしていた。

カインは谷のなかに漂う毒の霧を、魔法の力で避けながら探索を続けていた。
この谷底は毒霧が漂い、その毒は魔物すら動けなくするようだった。
谷に迷い込んで動けなくなった、魔物の遺体や骨をあちらこちらで見かけた。
同時に毒が平気な魔物もいるようで、霧の向こう側から突然現れた魔物に襲われたりもした。
ゴツン。
用心深く進んでいたカインのつま先に、何か当たった。
「これは……」
見ると足に当たったのは腕輪だった。カインは身をかがめて、腕輪を拾った。腕輪はねじ切れていて、もはや使い物にはならないようだった。
「壊れているな。これは名前か……？」
よじれた腕輪の内側には、名前らしいものが彫られている。
不審に思い周囲を見渡すと、崖の少し上に張り出した岩に男の遺体が見えた。おそらく谷の上から落ちたのだろう、遺体はグシャグシャになっているようだった。
落ちた拍子に腕輪が外れて、ここに落ちたのだろう。
カインは遺体の回収はできないと見て、よじれた腕輪を腰に下げていた小袋に入れた。どこ

か安全な場所に行ったら、遺品しかないが墓を作ってやろうと思ったのだ。
（しかし、どこに行けば谷から出られるんだ？）
さっきから行き止まりばかりで、谷の上に出る道は見つからない。
（あそこか？）
しばらく進んだところで、カインは洞窟を見つけた。
その洞窟のなかを進んでいくと、奇妙な小部屋に出た。
小部屋はまるで飾り気がなく、中央に十センチほどの高さで、ひとが両手を広げたほどの広さの円形の台座があるだけだった。
近づいて見ると台座の表面には、複雑な記号と模様が刻みつけられている。
「魔方陣というやつか？」
カインが知っている魔方陣というのは、錬金術や占い師が好んで使う床に描く模様のことだ。
連中はこうした小道具で、自分たちの生業をもっともらしく見せている。
「なぜこんな場所に？」
カインはあまりに精緻に彫られている魔方陣の模様に見入られるように、手を触れた。
その瞬間、強烈な光がカインを包み込んだ。
「うわっ！」
次の瞬間、カインは見知らぬ場所に立っていた。

そこは空中に浮かんでいる細長い石の祭壇だった。
「ここは？」
周囲は薄暗く、ここが野外ではないことを知らせている。カインは祭壇の端から身を乗り出して下を見たが、この祭壇を支えている柱のようなものは見えない。
夢でも見ているのではないかと怪しみながら、カインはゆっくりと祭壇の前方へと歩いていった。
そこは八本の柱に囲まれており、ひとつひとつの柱の上に色の違う輝く石が浮かんでいた。浮かんでいる石のいくつかは、大きさこそ違うが魔物を倒した時に出現する水晶の色によく似ている。
『我は古の英知を伝えん！』
声と同時に、柱に囲まれた中心に人影が浮かび上がった。
人影はやがてくすんだ金色のローブをまとい、五つの突起のある奇妙な帽子を被り、細い杖を持ち、空中に浮かぶ奇妙な円盤に座っている人物の姿になった。
その姿を見たカインは、相手が生きている人物ではないと感じた。実体があるように見えるが、注意して見るとその身体は半分透きとおっている。
空中に浮かび、姿が透けて見える者が生きている人間であるはずがない。
これが大陸での出来事なら夢を見ていると思うだろうが、不帰の島では何が起きても不思議

はない。
『今は忘れられし、大いなる魔の力を求めし者よ。よくぞ訪れた』
「ここはどこだ？」
『英知と力の器たるべき場所、忘却の祭壇！』
祭壇の名を口にするのと同時に、何もなかった床が光り始め、六つの光の柱が出現した。
その光の柱を追うように、平らだった床から石柱が伸び始めた。
複雑な光を発しながら石柱は伸び続け、それぞれ高さの違う小さな窪みを持つ台座となった。
そして六本の柱の中央に、透きとおる不思議な台座が浮かび上がった。それは実体を持たない影のようにも見えた。
『我は英知の守りびと。汝、魔を秘めた石を捧げるがよい。力を宿す指輪を授けよう』
守りびとはそう言うと祭壇の背後で、浮かんだまま目を閉じた。
「どうすればいいんだ？」
『まず祭壇の中央に、魔力宿す器たる指輪を置くがいい』
カインの問いに答えて、守りびとは手にした杖で台座を指し示した。それは透きとおる台座であった。
『向かって左側の三柱が、その指輪の属性を司る。火、水、土、風、光、闇。六つの原初の力のいずれを求めるか定めよ。そして向かって右側の三柱が力を司る。汝が求める指輪、戦いの

力か守りの力を定める。火と風は戦いの力、水と土は守りの力。光と闇の力は、それぞれの独自の力なり』

守りびとが杖で指し示した場所は、淡い光を放った。

『もし汝、原初の力を宿す指輪を望むのなら我に告げよ。さすれば捧げられた石の属性に従い、生み出されし指輪は原初の力を汝にもたらす』

守りびとが語っている間、祭壇はわずかに輝きを変えた。

『魔力を秘めた石はふたつをもっとも少なき数とし、柱の数だけ捧げることができる。生み出される指輪の力は、捧げられし石の魔力により異なる。力強き指輪を求めるなら、大いなる魔力秘めし石を捧げよ』

説明と同時に柱の上の窪みが光を発し、どこに石を置けばいいのかを知らせる。

『さらに汝、もし同じ属性の大いなる魔力秘めし石を六つ捧げれば、この世ならざる力を引き出す指輪を得る』

「魔力秘めし石とは、これのことか？」

カインは、魔物を倒した時に出現する水晶を出して尋ねた。

『然り！』

守りびとは、ひと言だけそう言うと沈黙した。

「あなたは、俺の過去を知っているのか？」

カインは思い切って守りびとに尋ねてみた。
『我が語るは古の英知のみ。汝が過去は、それにあらず。汝、己(おのれ)が過去を知りたくば、生ける者に尋ねよ』
「生きている者、つまりあんたは？」
『我は、ただの記憶(きおく)。遠い昔より、ここにあるだけのもの。汝、魔力宿す指輪を必要としないのなら、ここより立ち去るがいい』
「傷(きず)を治(なお)す指輪を作れるか？」
『水か土の属性を使えば可能なり』
「わかった」
カインは今までこの島で見つけた指輪のなかから、力を宿していないものをひとつ選んで六本の台座の中央へ差(さ)し出した。手を離(はな)すと指輪は空中に浮かんだ。
次にザックのなかに入れておいた魔法の石を取り出した。今持っている魔法石の色は赤、緑、青、黄色の四色だ。目の前の守りびとは、魔法の属性は火、水、土、風、光、闇の六種類あると言っていた。
(たぶん赤が火、青が水だろう。とすれば土は黄色、風は緑か。光と闇は、たぶんもっと違(ちが)う色の石なのだろう)
自分が持っている魔法の石の属性を大雑把(おおざっぱ)だが分類して、カインは考えた。水と土の属性で

傷を治す魔法の指輪が作れるという。だが持っている水色の石は五個、黄色の石は四個しかない。

数が足りないから六本の台座に、同じ色の魔法の石を置くことはできない。だが同じ属性を使わなかった場合にどうなるのか？

「異なる属性の石を同時に置いた場合には、どうなるんだ？」

『生み出される指輪の属性が、どのようになるかは単純に確率の問題となる。より大きな力が主なる属性となり、それ以外の力はすべて指輪の力の糧となる。求める効果もまた同じ』

「わかった」

つまり属性を定める台座に同じ色の石を置けば求めた属性を得られるということだ。

カインは少し考えたあと、属性を定めるほうに水色の石を三つ、力を定める台座に黄色の石を三つ置いた。

『これが汝が望むものか？』

「そうだ」

『我は古の英知を伝えん！』

守りびとの声と同時に、台座に載せた魔法の石は実体を失って、青と黄色の光に変化する。

その光は空中に浮かんでいき、右の三つと左の三つがそれぞれひとつとなり、眩いふたつの光となった。

そのふたつの光は回転しながら大きくなり、指輪から延びてくる光の帯を伝わってひとつになっていく。
指輪にふたつの光が触れた瞬間、周囲は凄まじい閃光で何も見えなくなった。
『キュアウォーターの指輪だ。お前の傷を癒す力を秘めている』
守りびとの声に、カインは我を取り戻した。
ふと前を見るとそこには、水色の大きな結晶を中心に宿した指輪が浮かんでいた。
カインは、それを受け取ると指にはめてみた。
魔法の指輪をはめると、確かにそれが傷を癒す力を宿していると感じられた。意識を集中して、指輪の力を発揮させる。
すると全身が清い水に包まれたような感触を受け、今まであった擦り傷や打ち身が、すべて消えていた。
「すごいな……」
『大いなる魔力を秘めた石あらば、さらに大きな力の指輪を生み出せる。必要ができたなら、再びここを訪れるがいい。この島には、ここに至る魔方陣がいくつもある』
「わかった。そうしよう」
カインは踵を返すと、忘却の祭壇をあとにした。

いる。
獣の叫び声が、暗い洞窟のなかに響きわたった。洞窟のなかでひとりの男が苦しげに悶えている。
「チカラ……エイエン……オレノ！」
そう叫びながら、男は全身に起きている異変による苦痛に耐えていた。
かつてダレルと呼ばれていた男はすでに、親しい者でもわからないほど変わり果てた姿となっていた。身体中のかつての皮膚はただれて、ボロボロと剝がれ落ちている。その下からは爬虫類のようなヌメッとした新しい皮膚が露出していた。背中には一対の巨大な翼が生えており、苦しむたびにその翼は周囲に風を巻き起こしている。
「グアアアッ！」
痛みに苦しむダレルが頭を掻きむしると頭髪が皮膚ごと、ごっそりと落ちる。その下には毛髪の代わりに、たてがみのような獣毛が生えていた。
「フウッ、フーッ！」
頭部を掻きむしったあと痛みが引いたのか、ダレルは大きく肩で息をしながら自分の手を見つめていた。その手の形もすでにひとのものではなく、節くれだった長い指に鋭い爪が生えている。
「ダレにも……渡サナイ。エターナルリングハ……オレの……チカラ！」
「グオオオッ！」

そう叫ぶとダレルは力強く翼をはばたかせた。それと同時に大きな旋風が生じて、洞窟のなかを進んでいった。

「長老ニモ……誰ニモ……ジャマはサセナイ」

ダレルはそう呟きながら、暗い洞窟のなかをゆっくりと歩いていった。

「どっちでも好きなほうを持っていってください」

大陸からやってきた山師のロイスは、にこやかに笑いながらカインにふたつの剣を差し出した。

ここは巨大な樹木の内部にできた空洞のなかだ。カインは毒の谷を抜けて、ここまでやって来たのだ。ここには大陸から不帰の島特有の物品目当てにやって来た山師ロイスとデンがキャンプを張っていた。

細い洞窟以外に出口がなく、魔物が来ても狭い通路を使えば身を守りやすいため、キャンプを張るには絶好の場所である。

ふたりはカインがやってくると驚くとともに喜びもした。

毒の谷が消えて、通れるようになったと思ったのだ。

しかしカインの話を聞いて毒がまだ残っていると知り、ふたりとも落胆してしまった。ふたりが言うには、以前はあの谷に毒ガスは出ていなかったという。

彼らは三人でこの島に来たのだが、ひとりが崖から落ちて行方不明になっているということだった。行方不明といっても、彼らは仲間が生きているとは思っていない。

あの毒の谷に落ちたはずなので、もう死んでいるだろうと考えていた。

その話を聞いてカインは、谷で拾った腕輪を彼らに見せた。

するとふたりは、それが行方不明の仲間のものであると言う。

カインは毒の谷で見たことを語った。

ロイスとデンは形見の品を持ってきてくれたことを感謝し、自分たちの余っている武器のうちひとつを持っていってくれと申し出てくれた。

今持っているショートソードでは、武装が心もとないと思っていたカインにしてみれば、願ってもない話であった。

差し出された武器はレイピアとスティレットだった。

レイピアの刀身は九十センチで身幅は一センチ、重さは九百グラム程度の剣である。もともと純粋な戦闘用の武器ではなく、決闘用の武器である。リーチも長く、攻撃しやすい武器だが、鎧を着ている相手にはあまり効果がない。

刀身もあまり鋭くなく、スウェプトヒルトと呼ばれる柄の部分を見ても、あまりいい出来のものではない。おそらくは恰好をつけるために持ってきたのだろう。

一方、スティレットは棒状の刀身で四十センチほどの長さがあり、身幅は三角形で厚みは一

センチ弱、重さ四百グラム程度の短剣である。突くことを主体に作られており皮鎧程度なら簡単に貫くことができる。持ちやすく扱いも楽だが、リーチが短いのが欠点である。

　カインはふたつの武器を見比べて、しばらく考えた。

　使いやすさなら文句なくレイピアを選ぶ。

　だがここでの戦いは、ひと相手のものではない。

　相手は魔物なのだ。

　それを考えればリーチが短いのを我慢しても、より実戦的なスティレットを持ったほうがよいと思われた。

「こちらをもらおう」

　そう言ってカインは、スティレットを手に取った。

「どうぞ、どうぞ」

　ロイスは、そう言いながら残ったレイピアを木箱に戻した。

「しかし参りましたよ。いつもなら俺たち以外にも何人か、この島のお宝目当てで来てるんですけどね」

「あの谷が毒で行き来できなくなったら、もうおしまいですよ。せっかく集めた品物も、あっちに持っていけないんじゃ、宝の持ち腐れでね」

　デンは、そう言って周囲に積み上げた木箱を見て肩をすぼめた。彼らはかなりの量の品物を

集めたらしい。だが島から帰れなければ、せっかくの品物も何にもならない。
「他に砂浜に戻る道はないのか？」
「そうですね。森のほうから行けるかもしれないけど、あの森は剣呑でね。デュークの奴も、あの森にさえ行かなけりゃ、死ななかったのに」
「そんなに危険なのか？」
「年中、霧が出てて視界が悪いんですよ」
ロイスに代わってデンが森の状況を説明し始めた。
「しかも、入り組んだ地形で崖が多くて足下に注意していないと危ないしね。あとトカゲの魔物がいて、こいつがはしっこいうえに強いんですよ。デュークはそいつらに追いかけられて、崖から落ちちまった」
「そうなのか」
「もし島の奥に行くのなら、谷の南側にある鍾乳洞のほうがいいですよ」
ロイスはちょっと考えてから、カインにそう言った。
「鍾乳洞？」
「そうです。確か、ダンナより少し前に来たひとが、あの先に行くと言ってましたよ。腹に包帯巻いて、剣持った細いひとでしたよ。なんか思いつめた目をしてたな……」
「間違いないか？」

「はい。腹の傷がずいぶん辛（つら）そうなんで、いくつか薬草（やくそう）を分けてあげたんですよ。この島に生えている黄金草は噛（か）みつぶしたものを傷口に塗（ぬ）れば、下手（へた）な傷薬より効（き）きますからね」
「なんならダンナも持っていきますか？　こんな色の石と引換（ひきかえ）でいいですよ」
デンは魔法の石を取り出して、カインに示した。
「こいつは大陸に持って帰ると、そこそこ良い値で売れるんでね」
「いや、薬草は間に合っている」
カインは、ちょっと考えたあとに首を横に振（ふ）った。傷を治すだけなら、魔法の指輪がある。それよりは新しい魔法の指輪のために、魔法の石は手放すべきではないと思ったのだ。
「そうですか」
ロイスは、ちょっと残念そうだった。彼らにしてみれば外に出られない以上、カインとの取引でひとつでも多くの魔法の石を手に入れようと考えていたのだ。
「俺も鍾乳洞に行ってみる。邪魔（じゃま）したな」
カインはそう言うと、谷に戻る洞窟へ向かって歩きだした。
「ダンナ！」
歩きだしたカインを、ロイスが呼び止めた。
「もし砂浜に出る道がわかったら、教えてくださいね」
「ああ、必ず教えにくる。約束しよう」

カインは振り返ると、ロイスたちにそう言った。
「お願いしますよ！　お気をつけて！」
ロイスとデンは、カインの姿が見えなくなるまで手を振っていた。

「ここか」
カインはさほど探すこともなく、谷の南側で鍾乳洞へと下りる穴を見つけた。二十メートルほどの急な斜面の先は、平らな地面になっている。滑り下りることはできるだろうが、こっちに登ってくるのは不可能だろう。
「問題はないか……」
戻れないとしても、カインにとっては問題はない。ロイスとデンのことが気にはなったが、すべての謎を解いたあとでも、彼らを助けることはできる。おそらくふたりとも、当分はあの場所で暮らしていけるはずだ。
そう考えてカインは斜面を滑り下りた。
鍾乳洞のなかは、谷よりひんやりとしていた。カインは立ち上がると、ゆっくりと鍾乳洞の奥へと歩きだした。
二百メートルほど歩いたところで奥から、何か音が聞こえてきた。
ゴォォォォォォォォッ！

最初、風の音かと思ったが、どうやら違うらしい。鍾乳洞のなかで音をたてるほど、激しい風の流れは感じられない。

ゴォオオオオオオオッ！

それは規則正しく、鍾乳洞の奥から聞こえてくる。

「何かいるのか？」

今までの経験からカインは、この島ではいくら注意しても、注意しすぎることがないことを学んでいた。

歩く速度を落とし、前方に意識を集中しながらカインはジリジリと鍾乳洞を進んでいく。

さらに二百メートルほど進んだところで、鍾乳洞は巨大な空洞へ繋がっていた。

ゴォオオオオオオオッ！

音は間違いなく、その空洞から発せられていた。

カインは注意深く、音をたてないように空洞のなかを覗き込んだ。

「うっ！」

突如として目に入った光景に、カインは驚きの声を発するところだった。自分の右手で口を押さえて、絶叫を呑み込む。

空洞は直径五十メートルほどの円形で、岩壁が放つ淡い光によってぼんやりと明るかった。

洞窟の出口から右側に沿って狭い岩棚が通路のように続いている。その岩棚は左側に向けて急

な斜面となっている。

空洞の左側は落ち込んだ窪地になっており、そこに一匹の竜がうずくまっていた。

その竜は、規則正しい呼吸を繰り返し目を閉じていた。

(寝ているのか?)

普通の生き物なら、寝ているのだと思う。

だがカインは竜がどのような生物なのか、まったく知らないのだ。

生物のなかには寝ているように見せかけて、近づいた獲物を襲うものもいる。目の前の竜がそうした生態を持っている可能性もある。

(どうするか?)

岩棚を注意して進めば、二百メートル程度で別の洞窟へ入ることができる。その二百メートルの間に、竜に襲われたら防ぐ術はない。狭い岩棚の上では、せいぜい左右に少しよけるのが関の山だ。

かといって、ここからもとの場所に戻ることもできない。

(仕方ない)

カインは足場を確かめながら、ゆっくりと岩棚を進み始めた。

岩の破片を落としただけでも、竜は目を覚ますかもしれない。

進みながらカインは、竜の大きさに舌を巻いた。青い竜を見た時は、その半身が水中に隠れ

ていたためかあまり大きさを感じなかった。

だが地面の上でうずくまっている目の前の竜は、あまりに巨大である。

青い竜と違い、この竜は鈍い黄金色の鱗で身体が覆われていて、背中に鋭い刺を持っている。力なく折り畳まれた翼は飛行のためにあるのか、それとも別の用途があるのかわからない。

頭は大きく、大きな口から鋭い牙が覗いている。目らしいものは四つあるように見えるが、あるいはいくつかは擬態なのかもしれない。爪は鋭く、もし襲いかかられたらカインは簡単に引き裂かれてしまうだろう。

（この竜を見れば、あの破壊も理解できる）

島の各所で見かけた遺跡の多くが、ひどく破壊されていた。

だがひとが行う戦争でも、あれほど大規模な破壊は簡単にはできない。

記録によればアルダインがここに送り込んだ軍隊の数は数千人の規模でしかない。

それくらいの軍隊では、島全体にあれほどの破壊をもたらすことはできない。数万人の軍隊と、数多くの投石器などの破壊兵器を持っていなければ不可能だ。

だがもし目の前の竜のような生き物が何匹かいて、暴れたのだったら理解できる。おそらく目の前の竜は、頑丈な石壁すら土塊を崩すように破壊できるだろう。

（長老たちの狙いは、この竜なのか？）

もし仮に、目の前の竜を御する手段があるとすれば、それを手にした国は大陸を制覇するこ

とができるだろう。この竜一匹で、数万の軍隊に匹敵するはずだ。
だとすれば大陸制覇の野望を持つ長老たちが、不帰の島に目をつけたのは当然だ。
（しかし、それはひとが御せる力なのか？）
もしソルシアの民が竜を御する力を持っていたのなら、なぜ滅んだのか。わざわざ不帰の島まで逃げなくても、竜を使えばアルダインの侵略など退けられただろう。
あるいは竜には何か、カインの知らない秘密があるのかもしれない。
そんなことを考えている間に、カインは無事に岩棚を渡り終えた。
（何にしても、ダレルを見つけて問いたださなければ。こんな力を長老たちに渡すことはできない）
忠誠を誓うイアン王のためにも、カインはエターナルリングの謎を解くことを心に誓った。

3

カインは鍾乳洞を抜けて、切り立った石切り場へやってきていた。何かの鉱石を掘り出していたのだろうが、今では打ち捨てられた場所らしい。

「よう、お互い無事だったようだな」

カインが声のした先を見ると、レオが座って休んでいるのが見えた。

「傷は大丈夫か？」

「ああっ、山師たちから手に入れた薬草がよく効いた」

確かにレオは血色もよく、包帯も巻いていない。傷はすでに回復しているらしい。

「お前のことはだいたい察しがつく、調査部隊の目的を探りにきたんだろう？」

そうレオに問われても、カインは返事をしなかった。

「別に俺は、お前の邪魔をしようとは思わない。俺の今の目的はダレルを捕らえることだ。もし、それが無理なら殺す……」

殺気を帯びた言葉を発するレオを、カインは黙って見つめていた。

「お前には一度助けられたからな、ここで借りを返しておくぜ。俺が知っていることを全部、話してやるよ」

レオは、そう言うとカインの返事を待たずに先を続けた。、

「調査部隊が探していたのは、エターナルリングというものだ」

「エターナルリング？　それは何だ？」

「俺も詳しくは知らん。二十年前、ソルシアの民はこの島で滅んだ。その彼らがエターナルリングという指輪を持っていたらしい。まあ、伝説だけどな」

「らしい？」

「詳しいことは長老たちも知らない。細切れに残っている文献から、アタリをつけたんだろう。その指輪は不思議な力を持っているそうだ」

「不思議な力、魔法でも使えるのか？」

「さあな？　長老たちは永遠の力と呼んでいた」

「永遠の力か……」

「ああ。ヘインガリアの発展か、それとも自分たちの野心のためなのか、奴らが心のなかで何を企んでるのかは俺は知らん。まあ、調査部隊の連中のほとんどに、何を探しているのかを明かしていなかったことからだいたいの察しはつくだろう」

カインは黙ってレオに頷いて見せた。

「長老たちは、隊長のダレルすら信用していなかった。俺は、ダレルが余計な野心を持つようなら殺してリングを奪い取るように命令されてたんだ。長老どもは、そのために俺に大金を払って、無理やりに部隊へもぐり込ませたのさ」

「そうか」

「ずいぶんと注意していたんだが、ダレルはすでにエターナルリングを見つけていたのかもしれない」

「なぜ、そう思う？」

「お前は見ていないだろうが俺を襲った時、ダレルはひとの姿ではなかった。背中に翼を生やし、力もひとの何倍もあった」

そう語るレオの言葉のなかには、かすかに脅えがあった。厳しい戦いを生き残ってきた傭兵のレオが脅えるとなれば、やはりダレルの力は尋常のものではないのだ。

「あの姿は、リングを見つけたからなのかもしれない」

「どうやらこの島は、ひとを魔物にする何かがあるようだな」

「何か知っているのか？」

「俺はあのあと、獣の姿になったデニスと戦った。あの姿もひとではなかった」

「やがては俺もああなるのかな……」

「お互いにそうかもな」

「いや、お前は違うだろう。デニスとやりあっている時に見たが変わった力を使えるじゃないか。それが魔法と呼ばれるものならお前はソルシアの血を引いているのかもしれない」
「ああ、俺はソルシアの廃墟で養父に拾われた。たぶんソルシアで生まれたんだろう」
「たぶん？」
「俺は幼い頃の記憶がないんだ」
「ふうん。そういえば一度だけ、お前のような力を使う妙な女を見たことがある。ターバンで顔を隠した男と一緒だった。俺の姿を見たら、すぐに逃げてしまった」
「ターバンで顔を隠した男？　赤いターバンか？」
「そうだ。女のほうは確か、ライラと呼ばれていたな」
「ライラ……」
青い竜が言った名前だ。
ライラという名前の女性は、確実にこの島のなかにいるのだ。彼女を捜し出せば、竜やエターナルリングの秘密もわかるかもしれない。
「俺が知っているのは、これだけだ」
「わかった、ありがとう」
「礼を言われる筋合いはない。それから俺は先に行かせてもらう。お前はしばらく、ここで暇をつぶしていろ」

「なぜだ？　一緒にダレルを捜さないか？」
「駄目だ、俺は傭兵だ」
　レオはカインに向かって、断固とした口調でそう言った。
「傭兵が雇い主から受けた命令は絶対なんだ。お前がエターナルリングを見つけたら、面倒なことになる。これからはお互い別々、関わらないほうがいい。わかるな」
「そうか……」
　傭兵として生きてきたレオは、自分の生き方を曲げられないのだ。傭兵は雇い主の命令を、絶対に守り抜くのを信条としている。
　もちろんなかには金次第で、簡単に雇い主を裏切るような奴もいる。
　だがレオは、信念を持った傭兵なのだ。
　自分が決めたことを守り、信念とともに生きていく。だからこそ、カインとともにダレルを捜すことはできない。
　カインが騎士としての生き方を捨てられないように、レオもまた傭兵としての生き方を捨てられないのだ。
「わかった。ところで、どうやってこの先に進むつもりだ？」
　切り立った岩肌は手掛かりもなく、とても登れそうにない。
「こいつを使うんだ」

レオは自分が座っていた場所の横にある石板を指さした。
「それは？」
「こいつは、この突起を押すと浮かび上がって上まで運んでくれる。お前が来る前に確かめておいた」
この板は石切り場を作り上げた者が用意した移動手段なのだろう。おそらく魔法を原動力としているのだろうが、カインにも詳しい仕掛けはわからない。
「じゃあな、生きてろよ！」
レオはそう言って、カインの肩を叩くと石板に飛び乗った。
カインはどう返事をしていいものかわからず、黙ってレオが浮遊する板に乗って去っていくのを見送った。

その頃、遠く離れたヘインガリアで四人の長老たちは、いつも密談を行うために集う審議室にいた。
厚い扉と壁、さらに二重にした石の天井によって、なかで行われた会話を盗み聞きされる心配はまったくない。ここで前王が崩御してから四人の長老たちは王を差しおいて、この国の政を定めてきた。
部屋のなかの細長いテーブルの四辺にひとりずつ、長老たちは座っていた。

「王が派遣したカインは、不帰の島に渡ったらしい。まずくはないか？」

痩せて骨のような老人が、甲高い声で話していた。

「慌てるな。新米の親衛隊ひとり、気にすることもない」

はげ上がった頭に皺だらけの顔で目がぎろついている老人が、痩せた老人の言葉に慌てることもないという表情で応じた。

「だがハーラン。奴は、グリアムの息子だ」

長く白い顎髭を生やした老人が、忘れてはならないという口調で反論する。

「ふん、親衛隊の隊長がどうしたというのだ？　恐れる必要はない」

「確かにハーラン、ダレルも貴様の息子だしな。だが、あの男だけで大丈夫なのか？」

不健康に太った老人が、脂ぎった顔に浮き出た汗を拭きながら尋ねた。

「ふっ、あの馬鹿息子など、最初から信用しておらん」

ハーランは心底、馬鹿にした口調でそう言った。

「そのために大金を使って、レオを送り込んだのだ。あの傭兵なら、親衛隊の新米ごときに後れはとらん」

「本当に大丈夫か？　もしグリアムの息子に、エターナルリングを先に手に入れられたら、我我の計画は……」

「あせるな！　イアンは、我らの計画には気づいておらん。だから新米ひとりを送り込んだの

だ。探す物も知らずに、あの島に行ったとしても何もできん」
不遜にも王の名を呼び捨てにしてハーランは先を続けた。
「ここで浮足立ってみせれば、奴の思惑にはまる。我々はあくまで、不帰の島の遺跡調査のために調査部隊を送ったのだ。そこに親衛隊の新米が、連絡に行っても慌てる必要はない」
「そうだな。調査部隊の大部分の者は、エターナルリングのことを知らん」
「ああっ、我々はダレルとレオがエターナルリングを見つけてくるのを待てばいい」
「わかった。では、不帰の島に関しては沈黙を守るとしよう」
骨のような老人の言葉に全員が頷いた。
「昔から言うではないか。果報は寝て待てと！」
ハーランの言葉を聞いて、部屋のなかに下品な笑い声が響いた。

十分に休息を取ってから、カインはレオのあとを追った。
鉱山の切り立った崖を、魔法の力で動いているらしい浮遊する板で上っていく。もちろん途中にはさまざまな魔物がいたが、さほど恐ろしい相手はいなかった。あるいはレオが先に通ったため、手強い相手はすでに倒されていたのかもしれない。
鉱山のもっとも高い所には、ひとつの洞窟が口を開けていた。その洞窟は、巨大な建物のなかに続いていた。

用心しながらなかに入ると、ここが他の場所と違って異様な熱気を発していることに気づいた。

「なんだ？　この建物は？」

異様な熱気を疑問に思いながら、カインはさらに建物の奥へと進んだ。

「これか、熱気の正体は……」

建物の中央部分にやってきて、カインは熱気の正体を発見した。

熱気を生み出していたのは溶鉱炉であった。

だが、この島で戦いが起きたのは二十年前である。周囲の具合からみて、ここにひとが出入りしている様子はない。

だとすれば、この溶鉱炉は二十年間、誰の手も借りずに燃え続け、溶けた鉄を満たし続けていたことになる。

「これが魔法の力なのか……」

目の前の溶鉱炉を見て、カインは改めて魔法の力の凄さに驚いていた。

二十年間、誰の手も借りずに鉄を溶かし続けた溶鉱炉。

そんなものが使えるようになれば、国の産業は一気に変わる。鉄を作りだす作業は大量の樹木か石炭がなくては維持できない、大変な労力を必要とする産業なのだ。それだけに年間に製造できる鉄製の武器や鎧の数は限られており、鉄の生産量がそのまま国の力となっている。

これならかつてアルダインが魔法の力を手にしようと、ソルシアに侵攻した理由が理解できる。魔法の力が自在に使えるなら、大陸を制覇することも不可能ではない。

当然、それを知った長老たちがエターナルリングと呼ばれる魔法の指輪を求めるのも納得できる。

だが不思議なのは、これだけの魔法の力を持っていたはずのソルシアが、なぜ簡単にアルダインの攻撃に屈したのか？　自在に魔法を、いや竜さえも使いこなせたなら、そもそもソルシアが負けるはずがない。

なぜソルシアの民は、この不帰の島に逃れたのか？

さらに竜を使ってアルダインの侵略を阻止したのなら、なぜこの島にはソルシアの民が生き残っていないのか？

「エターナルリングには、何か大きな秘密があるようだな……」

長老たちはおそらく、文献に書かれたことだけを鵜呑みにして調査部隊を出したのだ。だがエターナルリングの伝説には、何か大きなものが欠けているのだ。

それがソルシアの民が滅んだ理由なのかもしれない。

「とにかく、他への出口があるか探すとするか……」

鉱山からは、この製鉄所に向かう道しかなかった。おそらく昔は鉄鉱石を掘り出して、ここに運んでいたのだろう。

さらに島の奥へ行くためには、この建物から出る道を探さなければならない。

二階へ続いているだろう浮遊する板に乗って、カインは溶鉱炉をあとにした。

製鉄所の二階にも、ひとがいるような気配はなかった。

おそらくここは作業所で、昔はここで鉄鉱石をより分けて溶鉱炉の上に落としていたのだろう。かつては魔法で動いていたのか、石人形が何体か動かないまま放置されている。

作業場からは、大きな目立つ赤い文様の描かれた扉と普通の扉が見えた。他にも扉はあるのだが、巨大な木箱が山積みになっていて通れない。

赤い文様の扉は、鍵がかかっていて開かなかった。

仕方なくカインは、普通の扉を開けて進んでいった。

燃える尻尾を持つネズミの魔物が何匹か出てきたが、なんなく倒してしまった。この程度の魔物はカインにとって、すでに敵ではなかった。

魔物の多くは行動パターンが決まっている。

相手の動きさえ見切ってしまえば、恐れることはない。燃える尻尾を持つネズミは、すでに鉱山でさんざん戦って動きを見切っていた。

「ウ……クッ……」

ネズミを倒して新たな扉を開けた時、か細いひとのうめき声が聞こえてきた。

「レオか？」
カインはレオの名を呼んでみたが、答える声はない。
しばらく耳を澄ましてみるが、もはや声は聞こえてこなかった。
意を決してカインは、部屋のなかへと進んでいった。
すると破壊された机と椅子の破片のなかに、レオが倒れていた。
「レオ、大丈夫か？」
カインはレオに駆け寄って、首筋に手を当てた。
だが脈は感じられない。
念のため呼吸も確かめてみるが、息もしていなかった。
しかし身体はまだ温かく、レオがさっきまで生きていたのは間違いなかった。
「ダレルにやられたのか？」
他に魔物の姿がないことから、カインはレオがダレルと戦ったのだろうと思った。しかしレオの剣は鞘に入ったまま放り出されている。
レオほどの男が剣も抜かずに殺られたとなれば、不意打ちを受けたのだろうか？
だが狭い部屋のなかで、不意打ちを受けるというのも納得がいかない。さらに注意深く辺りを見回すと、レオの死体のかたわらに一冊の古びた手帳が落ちていた。
「これは？　レオの手帳か？」

カインは古びた手帳を取り上げて開いた。

なかには細かな文字で、文章が記されていた。カインは何ページかパラパラとめくりながら、斜め読みしてみた。

「アルダイン……討伐隊？　アルダインの指揮官が記した日誌のようだな」

おそらくレオは、この手帳を読んでいる時に不意打ちされたのだろう。

カインは部屋のなかを見回して形を残している椅子を見つけると、扉からもっとも遠い壁の近くに置いた。ここで壁を背にして座っていれば、扉を開けて入ってくる相手を見逃すことはない。

もう一度、周囲を見回して敵の気配がないことを確認してからカインは手帳を開いた。

カインは日誌を最初から読んでいった。

日誌の最初は、アルダインの部隊が不帰の島に着いたところから始まっていた。

アルダインの部隊は、不帰の島に逃げてきたソルシアの民と、もともと島に住んでいた住民を容赦なく攻撃したようだった。

その後二週間にわたって、戦闘以外のことは書かれていない。

ソルシアの民も島の住民も、アルダインの軍隊に追われるように島の奥地へと逃げていったようだ。

我がアルダイン軍によるソルシア侵略は失敗に終わった。
竜だ。
突如として出現した竜が、我がアルダイン軍を壊滅させたのだ。
それだけではない。
軍のなかの多くの者たちが、魔物の姿へと変わっていった。
魔物と化した者たちは、容赦なく仲間に襲いかかった。成す術もなく、多くの者たちが魔物となった仲間たちに襲われて死んだ。
運良く生き残った兵士の証言では、あの竜はソルシアの民の生き残りであるという。
おそらく恐怖のために幻覚を見たのだろう。
だがひとが魔物に変わるのを私は見た。
あれは幻覚ではない。
ひょっとすると私も正気を失い始めているのだろうか？
私の身体も、徐々に魔物に変わっていっている。
ソルシアの呪いだ。
いや、あるいはこれこそが、王が求めていたエターナルリングの力なのかもしれない。
だとすれば恐ろしいことだ。
姿が魔物に変じていくに従って、私の心も変わっていく。

魔物の殺戮と破壊を求める心が、どんどん本当の私を壊していく。

この建物のなかで、私は最後まで呪いと戦うつもりだ。

しかし人間としての私が失われそうになったら、溶けた鉄に身を投げ醜い姿を葬りさる覚悟だ。

いつの日かここを訪れる者があったらどうか頼む。

リングの力を止めてくれ。

そこで日誌は終わっていた。

「やはりエターナルリングが、すべての鍵か……」

エターナルリングの呪いが竜を作りだし、ひとびとを魔物に変えているのだろうか？

だとしたらエターナルリングは、どこにあるのか？

この手記を書いた人物も、実際にエターナルリングを見てはいないようだ。

「俺も、魔物になるのか？」

今のところカインの身体に異変はない。魔法が使えるようになったのは異変のひとつだが、身体に翼や鱗が生えたりはしていない。

だが島全体に呪いが及んでいるとなれば、あるいはカインもまた魔物へと変わるかもしれないのだ。

「レオ。お前はひととして死ねたようだな」
カインは、そう言うと開いたままのレオの目を閉じてやった。
「俺は、どうなるかわからん……」
自分が魔物になると思うと恐ろしいが、このまま逃げ出すわけにはいかない。騎士としてカインは、エターナルリングの謎(なぞ)を解(と)き明かさなければならない。そして長老たちの無謀(むぼう)な計画を糾弾(きゅうだん)しなければならないのだ。

製鉄所の赤い扉から出ると、そこは峡谷(きょうこく)だった。
この扉の鍵はレオが持っていた。
なぜ、この鍵をレオが持っていたのかを知る術はもうない。
彼を溶鉱炉で火葬(かそう)にしようと遺体(いたい)を運んだとき、彼の懐(ふところ)から赤い鍵が転(ころ)がり落ちたのだ。
思ったとおり、その鍵を使うと赤い扉はすんなりと開いた。
扉から出るとカインは周囲を見渡した。
峡谷の先にはもうひとつ普通の扉があり、島の別の場所へと通じているようだ。
周囲を見渡すが、特に何かがいる気配もない。
カインは、そのまま峡谷の向こうへ進んでいった。
だが峡谷の中ほどにきたところで、カインは殺気を感じて振り返った。

するとカインが入ってきた入口近くに、何者かが立っていた。
背中に生えている大きな翼と、ひととは思えない異様な皮膚。
それを見た瞬間、カインはそれがダレルだと直感した。
「ダレルか！」
「オレを……オッテきたのか！」
名前を呼ばれてダレルは、カインを睨みつけた。
「キサマも……あいつのように……シテヤル！」
「お前がレオを！」
「長老ノ……カイイヌなど……生カシテおくものカ！」
魔物と化したダレルは、そう言うとカインに向けて魔法を放ってきた。
土埃を上げて風の刃がカインに迫る。
「風の属性魔法を使うのか！」
予想外のことに一瞬、カインは戸惑った。
だが自分が使う風魔法が直進しかしないことを思い出し、素早く左に動いて攻撃をかわした。
「ガアアアアッ！」
ダレルは狙いも定めず、やみくもに風の刃を連発してくる。

カインは冷静に左右（さゆう）に動いて飛んでくる魔法をよけながら、どうやって攻撃するべきかを考えていた。

持っているスティレットは、極端（きょくたん）にリーチが短い。

このままでは接近するまでに、風魔法の攻撃を受ける可能性がある。

（相手の動きを止める）

あのあとも何度か訪れた忘却（ぼうきゃく）の祭壇（さいだん）で作り上げた、いくつかの魔法の指輪のなかから、カインは今の戦いに使えるものがないか考えていた。

（アイスソード！）

水の属性魔法で発動させると、大地を走り敵に接近する。命中すると鋭（するど）い氷の刃と化して、わずかだが相手の動きを止める。

魔法で動きを止めて接近し、スティレットで攻撃して後退する。

このヒット・アンド・アウェイがダレルと戦う最良の方法に思えた。

カインはすぐにアイスソードの指輪をはめると、意識を集中させた。魔法の指輪は、指一本にひとつずつはめておくことができる。持てるだけの指輪をはめてみたこともあったが、ちゃんとコントロールできるのは五つまでが限界だった。

それ以上の指輪をはめていると意識の焦点が定まらず、どの魔法も使えなくなる。

あくまで意識を集中させて魔法を発動させる指輪の装備限界が五つなのだ。

使用するのに意識しない補助の力を持つ指輪は、この数には入らない。補助の指輪とは、カインが使う魔法の属性を強化する指輪のことだ。守りびとの説明では、最大で二種類の属性を強化することができるらしい。だがカインが持っているのは、火と風の属性を少しだけ強化する指輪だけだ。

魔法の指輪も、補助の指輪も強大な力を発揮するものは、より魔力の大きな魔法石を必要とする。今のカインが持っている魔法石では、それほど大きな力の指輪は作れないのだ。面倒くさいこともあってカインは左手に魔法の指輪、右手に補助指輪をはめていた。

魔法の指輪に意識を集中させると、カインの頭のなかにひとつの文様が浮かび上がる。この文様に意識を集中させて光らせると、魔法が発動されるのだ。

おそらく文様は、魔法の発動のスイッチの役割を果たしているのだろう。文様は指輪ごとに違い、指輪の効力によって頭のなかで描かれる時間も異なる。だいたいにして威力の大きな魔法ほど文様も複雑で、できあがるまでの時間も長い。

文様ができあがったのを意識のなかで確認したカインは、無造作に魔法を発動する。

大地の上に生じた冷気の固まりは、ダレルを狙ったように向かっていく。

これはカインが島のなかで偶然見つけた特殊な指輪、パワーオブシークの効力だ。この指輪は放った魔法を目標まで誘導する力がある。誘導といっても、それほど派手な動きはしない。

左右に少しずれていても、それを修正して敵に向かっていくのだ。

カインは何度か忘却の祭壇で指輪を作りだすうちに、指輪には生みだせるものと生みだせないものの二種類があることを悟っていた。

守りびとに言わせれば、パワーオブシークなどの指輪は太古の魔法知識に精通したものが、何年もの年月をかけて作りだすものらしい。この島のなかにはいくつも、そうした特殊な指輪が埋もれているという。

「ウォォッ！」

アイスソードは、ダレルの足下で鋭い氷の刃と化した。捕らえられたダレルは、一瞬だが動きを止められた。

だが氷の刃は、すぐに強度を失い砕け散る。

「オノレ！」

その一瞬の隙に、カインはダレルの背後へと回り込んでいた。

目でそれを追っていたダレルは、振り向きざまに再び風魔法を放つ！

しかし、それを予測していたカインは、すでにアイスソードを放っている。

ダレルの風魔法が生じるのと同時に、再び冷気の固まりが氷の刃となってダレルの動きを止めた。

「テヤァ！」

カインはその隙を逃さず左に回り込みながら間合いを詰めて、スティレットをダレルの左胸に向けて突(つ)き出した。
いかに魔物といえども、心臓を貫(つらぬ)かれては生きてられないと考えたのだ。スティレットなら、確実にあばらの間を貫いて心臓に達する致命傷を与えられるはずだ。
そう信じて放ったスティレットの一撃は、ダレルの皮膚に突き刺さると、まるで幾重(いくえ)にも重ねた皮を突き刺したような感触をカインの腕(うで)に伝えてきた。
「これは！」
カインは自分の考えが間違っていたことを悟った。
「シネ！」
次の瞬間、氷の刃は砕けてダレルは自由を取り戻し、鋭い爪(つめ)でカインを攻撃した。
カインは素早く身を屈(かが)めて、その一撃(いちげき)をよけた。
「皮鎧(かわよろい)以上の皮膚なのか！」
スティレットを突き刺した感触からして、ダレルの皮膚は上等の皮鎧を重ね着している以上の強度を持っている。今の一撃で、カインが持っているスティレットでは到底(とうてい)、心臓まで達する傷を与えることはできないと悟った。
となれば魔法で戦うしかない。
しかし魔法は剣と違って、使うのに限界がある。

これも魔法を使うようになってから感じたことなのだが、身体のスタミナと同じように魔法を使うスタミナのようなもの、魔力と呼ぶものがあるのだ。
魔力は自然に回復はしない。
回復させるには、魔力が形を成しているものを自分の近くで破壊する必要がある。
魔力が形を成している物とは、大きく分けてふたつある。
ひとつは石や結晶のような形で魔力が固まっている物質。
これを破壊すれば、その形が宿していた力に等しい魔力を回復できる。
もうひとつは魔物を倒した時だ。
魔物は、倒すと遺体を残さずに消えてしまう。
この時、魔力を放出するらしいのだ。
魔物によって回復できる量は異なり、強いからといって回復できる魔力の量が必ずしも、多いわけではない。
今も魔法の石と結晶をいくつか見つけて持ってはいる。だが数は少なく、次はいつ手に入れられるかわからない。
しかしここで負けてはあとがない。
「仕方ない、こいつを使うか！」
カインは魔力の消費の大きな魔法を使うため、別の指輪に意識を集中させた。

今まで浮かんでいたアイスソードの文様が消えて、新たな文様が浮かび上がる。
新たな文様ができあがるまで、カインはダレルの攻撃をよけ続けた。
ダレルはカインに接近しながら、両手の鋭い爪で襲いかかってきた。
一撃でも喰らえば、身体の骨が何本か折れてしまうだろう。もっとも魔法の指輪の力を使えば、骨折なども瞬時（しゅんじ）に癒（いや）せるのは間違いない。
だがダレルとの戦いの最中に骨を折るほどのダメージを受けて、治療（ちりょう）の指輪の文様が描かれるまで無事にいられる自信はあまりない。
（ここは逃げの一手だな……）
カインは冷静に、ダレルの攻撃を見切ってよけていく。
「オノレ……オノレ！」
ダレルは軽々と自分の攻撃をよけるカインを見て、激情（げきじょう）したまま攻撃を続けていた。
その攻撃を見て、カインはダレルの変容（へんよう）に驚いていた。ダレルは仮にもヘインガリアの騎士団長だったのだ。その男が戦術をまったく忘れたかのように、ただやみくもに両手を振り回す攻撃を繰り返すだけなのだ。
（姿だけでなく、心も魔物に変わっていっているのか？）
身も心も魔物に変じていく。製鉄所に残されていた手記の人物も、その変化に耐（た）えられずに自ら（みずか）溶鉱炉に身を投げたのだろう。

だとすれば恐ろしいことだ。
かつて騎士団長だった男の、変わり果てた姿を見ているのは忍びなかった。
ダレルはさほど卓越した騎士というわけではなかった。長老のひとりハーランの実子(じつし)であり、親の権力で団長の座についたという噂(うわさ)もあった。
だが騎士としての彼(かれ)は、少なくとも職務をきちんと果たしていた。騎士としての地位に甘んじることもなく、団長と呼ばれるのに必要な努力を怠(おこた)ることはなかった。
その男が、今目の前で変わり果てた姿となり自分を攻撃してきている。
悲しかった。
もしこれがエターナルリングの力ならば、このような力がこの世にあってはならない。
完全に魔物となる前に、自分の手でダレルを葬ってやる。カインがそう決心した時、頭のなかで文様が完成した。
「ダレル!!」
カインはダレルの名を叫(さけ)ぶのと同時に、トルネードの魔法を発動させた。
魔法の力で周囲の空気がひとつとなり竜巻(たつまき)を作りだす。
強大な風の刃の渦(うず)が、ダレルを捕らえた。
「グアアアッ!」
竜巻は容赦なくダレルの身体を切り刻(きざ)んでいく。いかに厚い皮膚で保護されていても、何度

も切り裂かれればボロボロになった。

「オオオッ！」

だがダレルは、巨大な翼を打ち震わせて竜巻を四散させた。背中の翼には、どうやら風の魔力が宿っているらしい。同じ力で、ダレルは魔法を打ち消したのだ。

「もう一度だ！」

カインは再び、魔法によって竜巻を作りだした。

「ガアアアッ！」

再び竜巻に呑み込まれ、ダレルは全身を切り刻まれて血を流し始めた。

「クウウッ……キサマ……これほどのマホウを……」

竜巻に切り刻まれて苦しみながらも、ダレルは翼を大きくはばたかせて空中へと浮かび上がる。

「ダメダ……ハヤク……エターナルリング……ミツケナイト……」

空中高くに舞い上がったダレルは、そのまま峡谷の上を目指す。

「逃がすか！」

だが今使っているトルネードは、空中には放つことはできない。カインは急いで空中に放つことができるファイアーボールの指輪に意識を集中する。

だが新たな文様が描かれる前に、ダレルは峡谷の上に消えていった。

「くっ……」

カインは、ダレルの消えていった先を睨みつけるしかできなかった。

ここで逃がしたということは次に会った時に、またダレルと戦わなければならないことを意味する。

あの様子からすると、ダレルはまだ変身していくように思える。時間が過ぎるごとに強大な魔物となっていく相手に勝てるのか？

それはわからない。

だがダレルのためにも、勝たねばならない。

仮にもヘインガリアの騎士団長が、魔物となってさまようことなどあってはならないのだ。

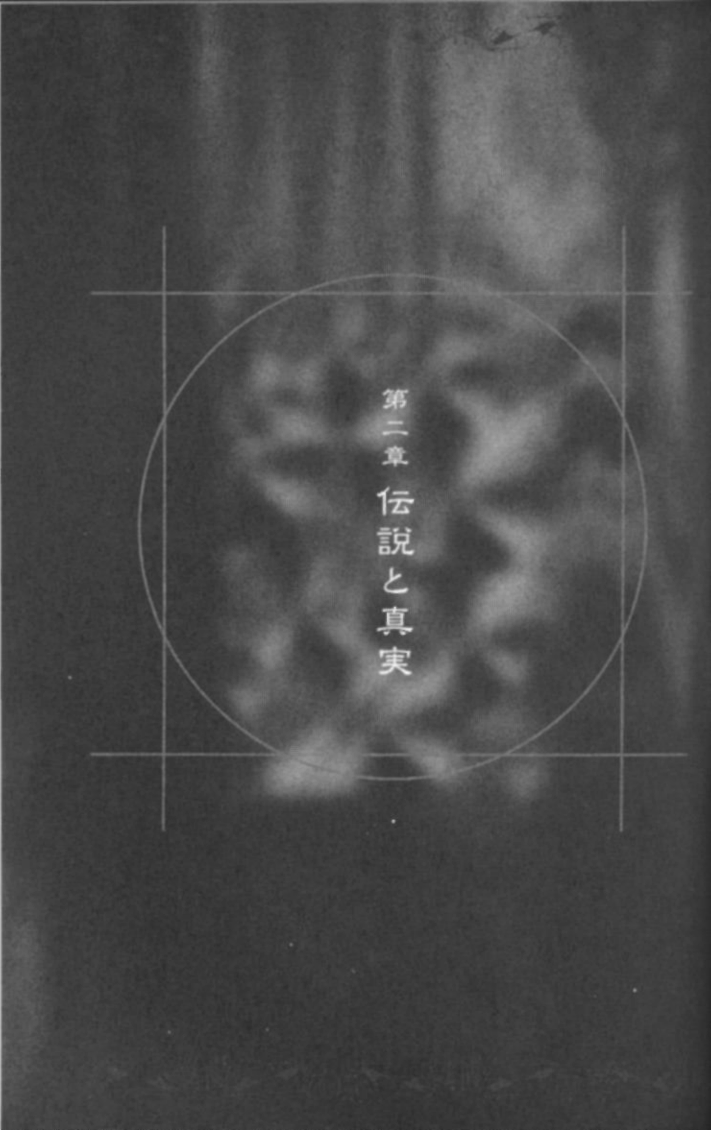
ひとつだけ希望はある。

（ダレルは、まだエターナルリングを見つけていない）

逃げていった時の言葉からそれはわかっていた。だとすればダレルは、何の力で魔物に変わっていったのか？　あるいは手記に書いてあったように、この島全体に呪いがかかっているのか？

謎ばかりが増えていき、真実はひとつとしてあきらかにならない。

それでもカインは最後に真実を手にできると信じて、先に進まなければならなかった。



第二章　伝説と真実



1

峡谷の上空に消えたダレルを追うべく、カインは峡谷の先に見えた扉を開けた。
扉の先は折れ曲がりながら下っていく洞窟だった。
おそらく、この鉱山の本当の入口はこちらなのだろう。
カインは迷わず洞窟のなかに進んでいく。
かなり急な傾斜を下りていくと、やがてひんやりしていた周囲の気温が、だんだんと蒸し暑くなってきた。
洞窟の壁に手を当てたカインは、それが日溜まりの石程度に温まっているのを感じた。何度か場所を変えて見たが、どうやら洞窟全体が温かくなっているようなのだ。
「かなり暑いな……」
今まで、こんな状況に出合ったことはない。
人工的な暑さでないことは間違いない。製鉄所のような一部から発する熱ではなく、洞窟全体が何かに温められているのだ。

そんなことが普通、あるはずがない。

しかし、ここは不帰の島だ。

何かの魔法により、こういう状態が続いているのかもしれない。

問題はこの状況が、特別な異変が起きようとしている何らかの兆候なのか、それとも驚く必要のない現象なのか判断できないことだ。

普通なら、ここから引き返して数日間、様子を見る。その間に洞窟に大きな変化がなければ、これが通常の状態と判断して探索を再開する。

だが現状では、それほどのゆとりがない。

何しろ追っている相手が、様子を見ている間じっとしているはずがない。

そういう場合は危険をかえりみず進むしかない。

洞窟のなかの温度は下りるほど上昇していき、やがて夏のような暑さになってきた。それと同時に傾斜は緩やかになり、やがて平坦になっていった。

「ふう、これはきついな……」

カインは皮のブーツを履き、皮の小手をはめている。皮と肌の間はじっとりと汗ばみ、身につけている服にも汗の染みが広がっていた。

あまり長い時間、この暑さが続くようなら小手だけでも外したほうがいい。このままでは体力を消耗して動けなくなる可能性がある。しかし、こんな洞窟のなかにも魔物がいるかもしれ

ないので、防具を外す気にはなれなかった。
「ここまできたか。うまく切り抜けているようだな……」
「誰だ？」
「私だ。また会うと言ったはずだ……」
見ると洞窟の奥から、ターバンを巻いた男がゆっくりと歩いてくる。
「この暑さはどうにかならないのか？」
「ここはそういう場所だ。火山の地下で、溶岩が露出しているために暑くなっている」
「火山か」
カインは船で不帰の島に近づいてきた時、白い煙を上げている火山があったのを思い出した。
「あの傭兵は死んだようだな」
「知っているのか？」
「お前が奴の死体を運んでいるのは見た」
ターバンの男は、どうやら製鉄所のどこかで、カインがレオを溶鉱炉で荼毘に付すのを見ていたらしい。
「愚かな奴だ。この島では剣の腕が良くとも、なんの役にも立たん。あの集落で怪我をした時に、探索をあきらめて大陸に帰っていれば良かったものを……」
「なぜ、そんなことを言う？」

「ふっ、エターナルリングの探索など無駄なことだからだ。あいつは隊長と呼んでいた男がエターナルリングを持っていると思っていたようだな」

「違うのか？」

ダレルがエターナルリングを持っていないことは、実際に戦って確かめている。だが正体不明のターバンの男が、自らエターナルリングについて語ろうとしているのだ。ここは相手に尋ねるのが得策だ。

「過去にも多くの者たちがエターナルリングを求めた。永遠の力という言葉を信じてな」

永遠の力。

必ず老い、死んでいく人間にとってあまりにも魅力的な言葉だ。

永遠の命を求める者は多く、文明が始まってから今まで数えきれないほどのひとびとがそれを求めて世界を探し回った。名君と呼ばれた王ですら、晩年に永遠の命を求めて世界中を探させたという話も残っている。

だが永遠の命など、この世には存在しない。

カインはそう思っている。

だが世のなかには、そうした力を追い求めてやまない輩もいるのだろう。

ヘインガリアの長老たちのように。

「愚かなことだ」

ターバンの男は、エターナルリングを求めた者たちを蔑んだ口調で先を続けた。
「求めた者たちは、誰ひとりとして正しい伝説を知らなかった。それ故に、彼らは皆、呪われた！　二十年前に島に逃れてきたソルシアの民も、侵略者であるアルダインの民も！」
「お前は何を知っているんだ？」
「ふふっ。お前にも、やがてわかる」
ターバンの男は、思わせぶりに言った。
「この洞窟の先は、溶岩の川に繋がっている。道なりに進んでいけば、ひとりの男に会える。その男と話すがいい」
「誰なんだ？」
「変わり果てた姿になっているが、ひとの心は失っていない。私は今でも、その男に仕えている。だからこそ、お前に会ってもらいたいのだ」
「なぜ俺とその男を会わせたがる？」
「試験のようなものだ。お前が、その男と話した後もエターナルリングを探そうとするならライラを捜せ。エターナルリングへの道は、彼女だけが知っている」
「探す気がなくなったら？」
「急いで島から去れ。長居すれば、呪いに捕らわれて醜く変容し、この島でさまよい続けることになる」

「呪いに捕らわれてか……あなたも呪いに捕らわれているのか?」
「……さあな」
カインに問われてターバンの男は動揺したようだ。答える前に一瞬、手がターバンにかかり、その手が震えていたのをカインは見逃さなかった。
「お前には関係ないことだ。早く行け……」
ターバンの男はそう言うと、カインが下りてきた方へ消えていった。
(いったい奴は、何が目的なんだ?)
カインはターバンの男を見送りながら、彼の本当の目的が何か考えていた。
男は間違いなくエターナルリングの秘密を知っている。それが何で、どのような力を持っているのかを。
だがカインにそれを語らないのは、何か理由があるからだ。
その理由がわからない。
ただ会話から得た感触では、男は何かを手に入れたいのではなく、カインに何かをやらせたいのだ。そのために情報を小出しにして、カインがエターナルリングに興味を持つように仕組んでいる。
カインとしては、相手の意図がわからないまま利用されるのは不愉快だった。だがここで探索を打ち切って、ヘインガリアに戻るわけにもいかない。

（まずは、この先にいるという男と話してみよう。そこから何か、わかるかもしれない）

とにかくエターナルリングの謎を探り、すべてを知ってから何をすべきか決めようと考えて、カインはターバンの男が言った相手に会うため歩きだした。

同じ頃。

ヘインガリアの王であるイアン・マーティンは、王城の西の塔で城下を眺めていた。

今日は月に二度の市が立つ日とあって、ヘインガリアの中央広場には活気が溢れている。このところ、情勢が安定していることもあり、近隣諸国からも物を売りに商人たちが集まってきているようだ。

こうして平和のなか、無事に暮らす民人の姿を見ると、イアンは心底、嬉しく思う。父であった前王は、この国を大きくするために戦乱のなかに生きた。

だが、かなりの領土を得て国が大きくなった今は、これまでのように武力に頼って他国を侵略していくようなことは控えるべきだ。それより工業と貿易の発展に力を注いで、他国と共存する道を探るべきなのだ。

だが国の実権を握る長老たちは、王の言うことなど取り合おうともしない。再び武力による侵攻を繰り返そうとしている。

（それを止めるためにも、カインには……）

そこまで考えを巡らしていた時、扉をノックする音が部屋に響いた。
「誰だ！」
「陛下、お呼びですか？」
「グリアムか。入るがいい」
王の許しを得て、カインの養父であるグリアム親衛隊隊長は扉を開けると部屋に入った。
「グリアム。カインから、まだ連絡はないのか？」
「はい。不帰の島に渡ったことは確認しております。しかし気になることがひとつ」
「なんだ？　申してみよ」
「カインを乗せていった船は、港に戻らなかったようです。不帰の島で何かあったのではないかと……」
「そうか、心配だな。だがカインのことだ、並大抵のことでは不覚は取るまい」
「はい」
「それから長老派の動きはどうだ？」
「長老たちのほうへも、不帰の島からの知らせはないようです」
「ふむ、そうか……」
イアンは、長老派に何も動きがないことを不思議に思った。
長老たちは強引に決議を取り、あらゆる反対を封じ込めて調査部隊を派遣したのだ。その割

には編成した人数は十二人と必要最小限に抑えていた。
だからこそイアンは、長老たちの動きを不審に思ったのだ。
これがもっと多くの人員で調査部隊を編成していたら、不帰の島の遺跡の発掘という理由に疑いを持たなかったかもしれない。
「もうひとり、連絡に送りだしますか？」
「いや。カインのことでさえ、あれほど難癖をつけてきた長老たちだ。もうひとり送り込もうとすれば、何か別の動きを起こすかもしれない」
「確かにそうですが……」
「それではカインも動きにくかろう。余はカインを信ずる」
「もったいないお言葉で」
グリアムはカインに対する王の信頼を嬉しく思った。
「無事に戻ることを祈ろう」
「はっ！」
深々と頭を垂れると、グリアムは部屋から出ていった。
溶岩溜まりがある空洞は、洞窟のなかより温度が低かった。おそらく空洞の天井のどこかが地上に通じていて、大気が循環しているからだろう。

ここはかつて何か別の用途に使われていたところらしい。

溶岩が流れている場所は、おそらく昔は地底を流れる川だったのだ。

その辺りに遊歩道のように道が作られている。今は溶岩の熱でグチャグチャになってしまった場所も多いが、かつては美しい地底運河だったのだろう。

それが地殻変動か、もっと別な理由で水が枯れて、溶岩が流れるようになったのだ。

「この島の文明は、かなり高度だったようだな……」

今まで通ってきた場所に残っている遺跡からすると、この島にかつて存在した文明は明らかに現在のヘインガリアより数段進歩していたようだ。

もっとも魔法を自在に操る文明ともなれば当然のことかもしれない。

魔法。

考えてみれば、奇妙な力だ。

魔法の効力は、指輪のなかに宿る。

宿る魔法の効力は、開放する魔法の石の魔力の大きさによって異なる。

指輪ひとつに宿る魔法の効力はひとつだけ。

その指輪さえあれば、意識を集中すれば魔法が使える。

特に魔法の理論や仕組みを知らなくても、魔力がありさえすれば力を引き出せる。

あるいは剣を持てば誰でも振り回せるのと同じように、魔力さえあれば誰でも使える力なの

かもしれない。

　この魔力と呼ばれる力も謎だ。

　カインは生まれてから、自分に魔力があるなどと考えたこともなかった。

　だが魔法の指輪を手にした時、自分のなかにそれに呼応する力があることを自覚していた。

　そして誰に聞くこともなく、使い方を理解していた。

　あのターバンの男に聞いたが、水の神殿と呼ばれていた遺跡の奥にあった水門も、どうやら魔力に呼応して作動する仕掛けだったらしい。

　あそこは調査部隊の連中が、何度も調べたらしい。何人も入れ代わりに調べたらしいが、誰ひとりとして動かせなかったという。

　つまり調査部隊のなかには、魔力を持った者がいなかったのだ。

　そういえばソルシア以外、魔法を使う文明は大陸にない。

　アルダインの侵略によりソルシアが滅んでから、魔法と呼ばれる力はおとぎ話のなかのものだったのだ。

　だとすればカインのなかのソルシアの血が、魔法を使うことを許しているのだろうか。

　しかしソルシアの血と聞いても、戸惑うだけだ。

　カインは自分がソルシアで、養父のグリアムに拾われたことを知っている。戦乱で破壊された都市のなかで、彼はひとりでさまよっていたという。そこを偵察のために訪れたグリアムの

部隊に発見されたのである。
もっともカイン自身は、その時のことを何も覚えていない。
彼の記憶は、ヘインガリアで育った間のものしかないのだ。
だから滅んでしまったソルシアが生まれ故郷と言われても、何も感じない。
自分の故郷はヘインガリアだとカインは思っている。
彼の人生は、養父のグリアムと出会った時から始まったのだ。
しかしターバンの男は、この島に彼の過去が眠っていると言った。
この先で出会うという男も、きっと自分の過去に関係しているのだろう。
過去が目覚めたとき、自分がどうなるのか？
自分のなかの何かが変わるのではないかという恐れがないわけではない。
だが魔法を使えるようになった時もカインがカインであったように、おそらく過去を知ることになっても自分は変わらないという自信もある。
何よりカインには、イアン王への騎士としての忠誠がある。
そんなことを考えている間に、溶岩の運河のかなり奥まで進んできていた。
細くなってきた溶岩の川の岸辺の先に中心に水晶を埋め込んだ石の扉が見える。
カインは風の魔法を扉の中心にある水晶に放つ。
魔法を受けた水晶は眩い光を一瞬放って、扉は音もなく開いていった。

こうした扉が、この空洞にはいくつかあった。

綺麗な石作りのトンネルを通って、カインは再び溶岩が流れる運河に出合う。どうやらこの運河は、各所で複雑に繋がっているらしい。

運河に突き当たり、道なりに進んでいくと広々とした広場に出た。

昔は公園だったのだろう。

その広場のなかに、人間らしいものが立っていた。

一応、二本の足で立っているが衣服は身につけておらず、胸に大きなペンダントを下げていた。全身が真っ赤で、両手の手首から肘に向かって突起のようなものが生えており、頭にも前頭部から角のようなものが生えている。

頭髪はなく、その代わりに鼻の下に豊かに生えている髭があまりにも奇妙だ。

カインはおそらくそれが、ターバンが言っていた男だろうと思った。

真っ赤な男は、カインが近づいてくるのをじっと待っていた。

「おヌシ、何者だ?」

声が届く場所までカインがくると、その人物は鷹揚に声をかけた。

「見慣れぬ紋章を身につけておるな?　どこの小国の者だ?」

カインは答えようとしたが、男はカインの返事を待たなかった。

「ああ、よい。こういう場合には礼儀として、自分から名乗るものであったな。久しく新たな

者と出会わなかったので忘れておった。許せ」
　自分のペースで男は喋り続ける。
「ワシは偉大なるアルダインの国王、マシュー・D・ロス三世である」
　その名を聞いてカインは、この男が不帰の島へ討伐隊を指揮して渡ったというアルダインの国王であることを知った。ターバンの男が仕えているといった言葉を聞いた時、軍の上層部の人間が生き残っているのかと考えていた。
　しかし王自身が、生き残っているとは思ってもいなかった。
「うん、怪訝な顔をしておるな？　まあ、この姿では疑うのも仕方あるまい。それにここは王宮でもない。堅苦しくする必要はない、楽にしてよいぞ。ハハッ」
　マシューは、カインの驚きを自分勝手に判断して上機嫌にそう言った。
「そうそう、おヌシ。ネルを見はせんか？　いつもターバンを顔に巻いておる」
「この溶岩の川の入口で会いました」
「そうか。あれは我が忠臣、ソルシアやこの不帰の島への侵攻を提言した者だ」
　マシューの言葉を聞いてカインは驚いた。つまりあのターバンの男がソルシアを滅ぼす計画を立てた張本人だったのだ。
「今はワシをもとの姿に戻すための手段を探らせておる。我が領土では、ワシの帰還を幾千万の民が待ちわびておるのだ」

だがマシューはカインの驚きなどに気づかず、自分が思ったことを話し続けている。
「そうだな、おヌシにも探ってもらうとしよう。もしワシを、この忌まわしい姿からもとに戻せたなら、我が国の騎士として取り立ててやってもよい」
そう言ってマシューは、カインの返事を待った。だがカインは、ターバンの男の正体に驚いていて返事どころではない。
「いや、王を助けた功績としては騎士では足りぬな。親衛隊の隊長にしてやろう。素晴らしい褒美であろう？　名も知れぬ小国の戦士では考えられぬ、優雅な生活ができるぞ？」
褒美が不足していると思い、マシューはさらなる条件をつけた。その言葉に、カインは哀れみを覚えた。
すでにアルダインという国はない。王が不在の間に弱体化し、そこを先代のヘインガリア王が攻め滅ぼしたのである。もし彼がもとの姿に戻ったとしても、帰るべき国も座るべき玉座もないのだ。
だがマシューは自分が魔物となり過ごした二十年の歳月の重さを知らないでいる。
それが哀れであった。
彼の時間は、不帰の島に渡ってきた時のまま止まっているのだ。
「いいですよ」
カインは絞り出すようにして、そう言った。本当のことを知らせるには、目の前の男はあま

りにも哀れすぎた。

「おおっ、そうか」

カインの返事に気を良くして、マシューは微笑んだ。

「ではおヌシに、こうなった経緯を話さねばならぬな。この姿を戻す手段を探すには必要だろう。二十年ほど前のことだ」

マシューは自分が、この島にやって来た時のことを話し始めた。

「ワシは幾千の兵を率いて、強大な力が封じてあるというエターナルリングを求め、この不帰の島へやってきたのだ。

怪しげな魔術を操り、襲いかかるソルシアの愚民ども相手に、我が軍の兵たちは勇敢に戦いエターナルリングを目前としたのだ。

だが愚劣なるソルシアの生き残り共は、最後に奇妙な術を使ったのだ。

その術のせいでワシも、我が兵士たちも見たこともない醜悪な魔物の姿に変わっていった。魔物になった者のなかにはひとの心を失う奴もおってな、あっという間に討伐隊は瓦解してしまった。

こうなっては撤退するしかないのだが、この姿では国に戻ることもできん。

姿さえもとに戻れば、再び取って返して必ずエターナルリングを手にしてみせるのにな。

そういうわけで、この忌ま忌ましい姿をもとに戻すための手段を探し続けておるのだ。

まったくネルの奴め、何を悠長にしておるのか……。
お陰でずいぶんと時間が経ってしまった。
あまり長い間、王が不在では民衆が不安がるだろうに……」
自分がこの姿になった経緯をマシューは、カインへ一気に話して聞かせた。
「そういうわけで、お前には期待しておるぞ。そうそう、名を聞いておらなんだ……」
そう言った瞬間、目の前の溶岩がゴボリと大きな音をたてた。
「なっ、何事だ！」
マシューがそう叫んだ瞬間、溶岩を押しのけて巨大な影が出現した。
そこには竜がいた。
真っ赤に燃える溶岩を気にすることもなく、じっとマシューとカインを見つめている。
竜は細い身体をしており、背中に小さな翼が生えている。大きさからすると空を飛ぶためのものではないように思える。
身体全体はひび割れたような土色の鱗に覆われ、溶岩の熱に焼かれている様子もない。
頭も身体と釣り合いのとれる大きさで、数本の角が見える。目は細く、口もさほど大きくないが鋭い牙が生えていた。
「こっ、こっ！」
マシューは恐怖のため身体が動かないようだった。

「これ、おまえ、これを退治せよ！」
震える声で、ようやくカインに竜と戦えと命じる。
その声を聞いた瞬間、目の前の竜の目に憎しみが点った。
あきらかに今までとは違う反応に、カインは身構えた。
竜は大きく息を吸い込むと、身体を反らす。
そして身体をもとに戻しながら、大きく口を開けた。
「危ない！　よけろ！」
カインはそう叫んで、素早く右に身体を転がした。
ゴォオオオオオオオオッ！
灼熱の炎が、マシューへ向かう。
「うわっ！」
マシューは動くことができず、炎に包まれた。
断末魔の悲鳴すらあげることなく、アルダインの王だった男は火柱となった。
炎に焼かれて倒れるとマシューは、他の魔物と同じようにゆっくりと地面に溶けるように消えていく。
グルウウウウッ！
次に火竜は唸り声をあげながら、カインを睨んでいた。

そこにいるものを攻撃するかどうか、何か迷っているようでもある。

だがカインは相手の迷いに希望を託す気はなかった。

しかし逃げ道がない。

開けた場所だけに、どこに逃げても竜の火炎を避けることができない。

「こっちに急いで！」

左手から女性の声が聞こえてきた。

声が聞こえた方向を見ると、岩の扉が開いていくところだった。

どうやら声は、そこに逃げろと言ったのだろう。

女性の声を聞いて竜は一瞬、周囲を見回した。

その瞬間を逃さずにカインは走りだした。

自分の脚力を信じて、一気に竜の前を駆け抜ける。この時に炎を吐かれたら、あきらめるしかない。

竜は目の前を走っていくカインを目で追っていた。

それはまるで、動くはずのないものが動いたことに驚いているように見える。

カインは一気に駆け抜けると、扉の奥に開いている通路に飛び込んだ。

通路は想像していたより短く、五メートルほどしかなかった。

一瞬、行き止まりかと思い恐怖が湧き上がる。

だがよく見ると通路は直角に左に曲がっていた。
カインは走りながら通路を曲がり、その一瞬だけ背後を見た。
すると竜は身を反り返して、大きく息を吸い込んでいるところであった。
火炎がくるのを確信して、カインはさらに先で右に曲がっている通路へ飛び込んだ。
ドォオオオオオオッ!
その瞬間、凄まじい火炎が通路を埋め尽くした。
しかし折れ曲がった通路は火炎を遮り、ジリジリとした熱気だけが通路を追ってきた。
「助かった……」
炎がこないのを確認して、カインは立ち止まって息を整えた。暑い場所で激しく走ったため、汗が滝のように流れている。騎士として鍛練を積んでいるカインでも、こんな場所での全力疾走は堪える。
誰かがこの先に待っているとしても、少し息を整えてからでないと話もできない。
シャツの袖で汗をぬぐいカインは暫くの間、立ったまま休息をとった。

通路の先は、マシューがいたのと同じような広場に通じていた。
ただきっきの場所より、あちらこちらが壊れている。広場の中央部分にも陥没した箇所が見えた。

「ここまでくれば大丈夫……怪我はない？」
その広場に立っていた女性が、カインににこやかに話しかけた。
年齢は十八くらい、この島で出会った人間のなかで一番若いのは間違いない。
容貌の美しい娘で、栗色の目は凛とした光を湛えていた。瞳と同じ栗色の長い髪は、両側にまとめておさげにしている。そして胸に大きな花の刺しゅうのしてある、奇妙な形の紫のワンピースのようなものを着ていた。ヘインガリアのものと違い、首と胸を隠していて逆に臍のあたりが露出している。袖の部分は肩と繋がっておらず、おそらく別々につけるのだろう。
スカートには大きなスリットが入っていて、腰に飾り布を巻いていた。
婦人の服に詳しくないカインには、彼女が正確にどんな衣装を着ているのか判断はできなかった。普段着なのか正装なのかもわからない。
「声をかけてくれて助かった」
「あの火竜はもう自我がないの。危険だから、あとで見つけても近づかないようにして」
「わかった」
「島のあちらこちらで、魔法を使うあなたを見たわ。ソルシアのひとなのでしょう？　私、ソルシアのひとは誰もいないと思っていた」
「ソルシアか……。生まれはそうらしいが、俺は自分をソルシア人と思っていない」
「どうして？」

「俺はヘインガリアで育った。自分がソルシアで拾われたことは知っていたが、魔法が使えることは知らなかった」
「そう。でもうれしいわ、魔法が使えるひとが他にもいたのが……」
若い女性は、そう言うとにっこりと笑った。
「私はライラ・ユノー。最後のエイルシア人よ」
「俺はカイン・モーガン。ちょっと待ってくれ、エイルシア？　ソルシアではなく？」
「不思議に思うのも無理ないわ。エイルシアはかつて、この島で栄えた魔法を使う一族のことよ。そしてソルシアの祖でもあるの」
「よくわからないな……」
「そんなことはあとでいいわ。ねえ、あなた大陸から来たんでしょう？」
「もちろんだ」
「ねえ、島の外の話を聞かせてよ。わたしね、この島から出たことないの。晴れた日に、ぼんやりと海の向こうに見える大陸がどんな場所か、ずっと想像していたの」
カインは無邪気に話をせがむライラを見て苦笑した。
最初に出合った竜とターバンを巻いた男ネルにライラを捜せと言われて、カインはその女性が不帰の島のすべての秘密を知っているものと思い込んでいた。
そのため老齢の女性を、ずっと想像していたのだ。



そのため老齢の女性を　ずっと想像していたのだ

だが実際に会ってみると相手は自分よりも年下の少女で、しかも大陸の話を聞きたがる始末だ。想像と現実のあまりのギャップに、カインは苦笑するしかなかった。

「待ってくれ、俺はエターナルリングを探している。ネルという男が、君に会って話を聞けば、すべてがわかると言っていた」

「エターナルリングのこと？　あなたも永遠の力が欲しいの？」

そう尋ねるライラの口調と目に、微かに軽蔑が宿っていた。

「いや。だがそれを利用して、私が敬愛する王を蔑ろにしようとする輩がいる。奴らの野望を打ち砕くためにも、本当のことが知りたいのだ」

カインはそう言って、真っ直ぐにライラの目を見つめる。

「よかった。あなたが愚かなひとたちと同じように力だけを求めるひとでなくて……。いいわ、すべてを話してあげる。でも……」

「でも？」

「長い話になるから、私の住んでいるところに行きましょう。ここは暑すぎるし、お茶も出せないわ」

「わかった」

カインも、さすがにこの辺りの暑さには辟易していた。長い話になるのなら、場所を変えるのは大賛成である。

ふたりが歩きだそうとした時、目の前の溶岩が大きく揺らいだ。
「竜か！」
カインは咄嗟に、溶岩から火竜が出てくると察して身構えようとした。
「動かないで！」
ライラの叫び声が聞こえた。
カインはその言葉に従って、動くのをやめた。おそらく彼女は、火竜についてさまざまなことを知っているのだろう。その忠告に逆らって、不用意に動くのは得策ではない。
そうしている間に、溶岩のなかから火竜が出現した。
グルゥウウ。
火竜はふたりを見つめて低い唸り声をあげている。
「私が何とかするから」
そう言うとライラは、両手を組んで意識を集中した。
するとカインの周囲に光が集まり、薄い繭のようなものを作った。
「これは……」
「大丈夫、これはあなたを守るためのもの」
カインが完全に繭に包まれているのを確認して、ライラは火竜のほうを向いた。
「お父さん！　私です、ライラです！」

その声を聞いて、火竜は唸り声をあげるのをやめた。
だが火竜はライラの声を聞いて一度は落ちついたようだが、カインの姿が気になっているようだった。
「落ちついて、このひとは何でもないの」
ライラは必死に火竜をなだめようとしていた。
カインもそれを知って、なるべく火竜を刺激しないようにじっとしていた。
だがライラの言葉を聞きながらも、火竜はカインが敵であると感じているようだった。
「ねっ、大丈夫でしょう?」
ギャアアアア!
だが火竜は怒りの声をあげて、大きく身体を反り返させた。
カインは火竜が炎を吐くと感じて、よけようとした。
だが光の繭は彼を捕らえて逃がさない。
ドオオオオオ!
凄まじい炎がカインを襲う。
だが光の繭は、炎の熱を完全に遮っていた。
「すごい!」
ライラの使った魔法の力に感動しながらカインは、自分に別の危機が迫っていることに気づ

いた。

光の繭は炎の熱を完全に遮っていたが、じりじりと炎の圧力に負けて後ろに下がっている。

その先は陥没しており、このまま押されていけば落ちるのは確実だった。

だが繭のなかのカインには成す術がない。

「うわっ！」

ついに光の繭は炎に押されて、陥没した穴に落ちた。穴の底は裂け目となっていて、カインは険しい裂け目のなかを転がるようにして落ちていった。

2

「くっ……」
カインは頬に触れる冷たい感触で目を覚ました。
「ここは？」
意識を取り戻しながらカインは、意識して両手両足を動かす。
「手、足、痛みなし」
かなりの高さから落下したはずだが、手足に異常はない。次にゆっくりと身体を起こす。背中にも頭にも、特に痛みはない。
「あの光のお陰か……」
火竜の炎に押されて、陥没した部分に落下したことまでは覚えている。落下しながら大きく何かにぶつかった瞬間、その衝撃で気を失ったのだろう。
周囲を見渡すと、カインがいるのは大きな通路のなかだった。
ただ今までの場所と違い、ここの通路は綺麗な白い石で作られている。また、たぶん魔法を

使った仕掛けなのだろうがところどころに明かりが灯されていた。
その通路の天井の一部が崩れ、そこから落ちてきたようなのだ。
「ここから、もとの場所には戻れないな」
破壊されている部分は非常に険しい崖になっていて、とてもひとが登ることはできない。
しかしライラと再び会って、詳しい話を聞かなければならない。
エターナルリングの謎を解かなければ、長老たちの企みを打ち砕くことはできないのだ。
それにダレルのことも気になる。
今も確実に奴はエターナルリングを求めて、この島を徘徊しているはずなのだ。
あの魔物がライラを襲うことも考えられる。
さっきは突然のことで、そうしたことも話していない。
カインは通路を調べるため、潰れていないほうへと歩いていった。
「扉だな」
水晶を埋め込んだ白い扉を見つけて、カインは中心の水晶に魔法を放とうとした。
だがその扉は、カインが前に立つと勝手に開いた。
「さっきの扉とは、違う仕掛けなのか……」
カインは用心しながら、開いた扉の先を窺った。
通路の先は、巨大な部屋へと繋がっていた。

今まで見たどこよりも広い部屋は、あきらかに何か重要な施設らしかった。何より壁や床の材質が、他の場所より格段に良いものを使っている。

ヘインガリアでもそうだが、公共の施設や王宮などは、民間の建物よりはるかに良い材質のものを使う。

部屋は正方形で中央に、正方形の巨大な穴が開いていた。

部屋の周囲の四辺の壁には、それぞれにひとつずつ扉があった。

その扉のひとつが、カインが落ちてきた通路に続いているのだ。

もともとあの通路はどこかに通じていたのだろうが、天井が崩れた時にその先の部分は埋まってしまっていた。

さらに中央の穴は非常に深く、奈落という言葉がぴったりくる。上から覗いても底を見ることはできない。

穴の壁の途中にひとつ入口のようなものが見える。

だが、そこにいく手段が見当たらない。

入口は空中に張り出していて、さらに張り出した部分は非常に鋭い突起がいくつも飛び出ている。

その突起にロープが擦れれば切れてしまうだろうし、当然のことながら素手で壁をつかむこともできそうにない。

つまり通常の手段では、あの入口にたどり着くことはできないのだ。
「何かあるはずだ」
カインが周囲を見回すと、穴に面した四辺のへりに石碑がひとつずつ立っている。
石碑に近づいて調べてみると、赤い色のついた鍵穴があった。
鍵をここに入れれば、何か仕掛けが動くのだろう。
「鍵か……」
カインは鍵穴の色を見て、ふと自分がふたつの鍵を持っていることを思い出した。
青い鍵と赤い鍵。
カインは赤い色の鍵を、石碑に差し込んでみる。
意を決してカインは鍵を回してみた。
カチリと鍵が音をたてた瞬間。
ゴゴゴゴッ！
静かな響きとともに穴のなかから、何かが浮かび上がってきた。
それは入口の手前で止まった。
浮き上がった石が、階段の一部のようになったのだ。
だが依然、そこまで下りる術はない。
「四つの鍵が必要なわけか……」

石碑の数を見て、カインは納得した。
おそらく何か重要な施設へ立ち入るための仕掛けで、異なる四つの鍵が揃わなければ入れないのだ。
だとすれば、今探すべき場所は別のところだ。
そのような仕掛けを施す場所が、外への出口のはずがない。
万が一、そこが出口だった場合にはカインに成す術はない。
「他の入口を、ひとつずつ開けていくか」
カインは残る三つの入口に、出口があると信じて調べることにした。

溶岩の川の辺りで、ターバンの男ネルが佇んでいた。
「この水晶は……」
アルダインのマシュー王が倒れた場所には、彼が胸に下げていたペンダントの水晶だけが落ちていた。その水晶も高熱のために表面が溶けていて、かつての輝きを失っている。
「大国の王も、ついに……。結局、私は何もできなかったようだ……」
ネルは、落ちていた水晶を拾い上げると握りしめた。
「この様子では奴も……」
焼けただれた周囲の様子を見て、男は落胆しているようだった。

「期待をしていたのだが、やはり私には運がないようだ」
ネルは、ゆっくり首を振るとその場所を離れようとした。
その時、奥の扉からライラが走ってくるのが見えた。
「うん、ライラか？　どうした？」
「大変なの！」
ライラはネルに駆け寄ると、大声で叫んだ。
「あの大陸からきたひとが！」
「死んだのか？」
「いいえ。お父さんに襲われたんだけど、私が光の守護壁を張っていたから炎では死なないはずよ。でも、あっちの裂け目から落ちてしまったの」
「なら大丈夫だろう。あの裂け目はかなり険しいが、魔法に守られているのなら生きている。あの先は、確か研究所に繋がっているはずだ」
「だけど、怪我をしているかも……」
「それはわからん。だが無事なら庭園跡を抜けて、図書館へ出てくるはずだ。あそこで待っていれば会えるだろう」
「でも、あそこにはコカトリスがいるわ」
「そうだな」

「この辺りで一番手強い魔物よ！　あれがいるために、私たちは普通の入口からは研究所に入れないのに！」

「あの男は戦士だ。しかも魔法を使う」

「でも……」

「我々と違い、奴は戦い方を知っている。あの男は大丈夫だ」

「それならいいけど……」

「お前は家に戻っているといい。私が図書館の辺りを捜してみよう」

「私も行くわ」

「いや、ライラ。お前は、やるべきことがあるのだろう？」

「それは、そうだけど……」

ネルに言われて、ライラはわずかに逡巡する。カインのことも気になるのだが、それと同じくらい気になることがあるのだ。

「どうせ奴は、お前の家に行くことになる。安心して待っていろ」

「わかったわ。それじゃ、またあとで」

「ああっ、そうだな」

ライラはネルに別れの挨拶をすると、やってきた方向へ走っていく。

「私は弔いをするとしよう……」

ネルはライラを見送りながら、溶けた水晶を握りしめそう言った。

「最後の扉だな……」

カインはすでに、三つの扉を調べていた。

最初に落ちてきた通路の先は、崩れていて通行不能。

入ってきた扉から見て左右にある扉は、行き止まりだった。ただどちらの通路も最後の部屋の床に、奇妙な石板が置かれていた。そのふたつの部屋は、たぶん魔法で移動してくる部屋なのだろうと思っていた。

同じような石板は島の各所で見ていたし、あるいは昔は不帰の島では歩くのではなく、魔法で一瞬にして別の場所に移動するのが当たり前だったのかもしれない。

そうした痕跡からカインは、かつてはこの場所に島の各所から道が通じていたのだろうと考えていた。そして他の扉が外に繋がっていなかった以上、最後に残った扉が外への出口ということになるとも考えていた。

カインは扉の前に立って、それが開くのを待った。

ゆっくりと扉が上に上がっていくと、隙間から臭いが流れ出してきた。

「これは……」

この臭いは、あきらかに獣のもの。

巨大な獣が発する臭いに間違いない。
「この先に何かいる！」
カインは扉の向こうに危険な獣がいることを予期して身構えた。
扉がすっかり開くと、その向こうはかなり広い部屋になっているのが見えた。
その床には、おそらく二十年前にこの島で戦っていたアルダインの兵たちが使っていただろうものがいくつか転がっていた。
破壊された鎧や兜、楯、洋服の切れ端などが床のあちらこちらに山を成している。
そして骨は、一か所にまとめられていた。
部屋の中央からやや左寄りのところに、白骨が積み上げられている。それは骨で作った土手のようなもので、何かの巣にも見えた。
そのなかに、何か巨大なものがうずくまっていた。
巣の向こう側には階段があり、その先から光が差し込んできている。
階段から外に出るには、どうやっても巣の近くを通らねばならない。
（こちらが風下か……）
部屋から風が流れ出ているのを感じて、カインはまだ自分の匂いが巣にうずくまっている魔物に届いていないと考えた。
それならば匂いに気づかれる前に魔物の横をすり抜ければ、階段から外に出ることもできる

かもしれない。
カインは慎重に風向きを読みながら、ゆっくりと部屋のなかを進んでいく。
部屋のなかほどまでカインが進んだ時、突然風向きが変わった。
開いた扉から穴のある部屋に流れ込んでいた風が、その扉が自動的に閉まることで部屋のなかで渦を巻いたのだ。
当然のことながらカインの匂いも、部屋のなかを巡ることになる。
「まずい！」
カインは自分の迂闊さに歯噛みした。一度自然に開いた扉が、一定の時間で再び閉まるのは何度も見て知っていたはずなのだ。
確実に魔物が自分に気づくと判断したカインは走りだした。
床に降り積もった木切れや枯れ葉が、ペキパキと音をたてる。
キキャー！
甲高い鳴き声とともに、巣にうずくまっていたものが動きだした。
巣から起き上がったのは巨大な鳥であった。
姿形だけなら、鶏によく似ている。
だが体長三メートル以上の鶏となると、魔物としか言いようがない。
魔物は全体的に灰色がかった羽に覆われていたが、首から胸にかけて明るいオレンジ色の羽

に覆われている。頭には赤い鶏冠があり、黄色く鋭い嘴を持っていた。

二本の足の爪は、普通の鳥が三本に分かれているのと違い、二本にしか分かれていない。背中には飾り羽のようなものが生えていて、長く太い鱗を生やした尻尾を持っている。

キケーッ！

鋭い鳴き声が部屋に響いた。

（伝説に聞くコカトリスという魔物に似ているな……）

雄鳥が産んだ卵をヒキガエルが温め、それが孵化するとコカトリスが生まれると信じられている。睨んだだけでひとを殺す毒を持つという魔物だが、そんな姿の魔物を見て生き残れる人物がいるはずもない。第一、雄鳥が卵を産むはずがないのだから、そんな魔物が存在するはずがないのだ。

吟遊詩人の話に出てきた時にも、そう思ってカインは馬鹿にしていた。

しかし目の前に実物がいると、そんな自信も揺らいでいく。

もっとも竜が存在する島なのだから、コカトリスがいても不思議はない。

バサバサバサ！

巨大な羽をはばたかせると、コカトリスはカインの目の前に飛んできた。

でかい図体の割には、かなり機敏な動きをする。

「くっ！」

カインは、部屋を走り抜けるのをあきらめてコカトリスの巨体を避ける。
どさりと落下したコカトリスは、カインがいる場所めがけて鋭い嘴を振り下ろしてきた。
ガチッと硬い音をたてて嘴は、床石を削り取る。
「くっ、なんて硬さだ」
岩をも砕く嘴の威力に、カインは舌を巻いた。まともに喰らったら、一撃で致命傷を受けかねない。あれでは金属の鎧を着ていても安心できない。
万が一のためにカインは、プロテクトの魔法を使っておこうと意識を集中させる。準備ができる時間を稼ぐため、コカトリスとの距離をとる。
コカトリスは間合いを離していくカインをじっと睨んでいる。そしてある程度の距離が開いた瞬間、コカトリスは口を開いて七色の光の固まりを吐き出した。
「うわっ！」
正確な放射にカインは、飛び退いて光の固まりをよけた。
床に命中した光は、霧のようなものに変化して飛び散った。
「ぐっ、これは……」
光だと思い油断していたカインは、飛び散った霧を吸い込んでしまった。
わずかに吸い込んだだけなのに、たちまち目が霞み、身体に痺れが走った。
「毒か！」

コカトリスはカインの動きが鈍ったのを見て、続けて光を吐き出した。
「くっ！」
痺れる身体では光をよけることもできず、カインの周囲で炸裂した光はたちまち毒の霧のカーテンを作りだす。
「クリアの魔法だ」
自分の身体のなかから、あらゆる毒素を消し去る水属性の魔法だ。
プロテクトの文様が頭のなかで消え、代わりにクリアの文様が描かれていく。
その間にコカトリスは勝ち誇ったように、ゆっくりとカインに近づいてくる。
ケケーッ！
勝利の雄叫びをあげたのか、コカトリスはカインに向かって嘴を振り下ろした。
その一瞬前に、カインはクリアの呪文を使って身体の毒を消し去っていた。
恰好など気にせず、転がるようにしてコカトリスの一撃を逃れた。
ケーッケーッケーッ！
予想していた獲物が自分の攻撃をよけたので、コカトリスは羽を広げてばたつかせながら、じだんだを踏んでいる。
カインは態勢を立て直すと、どうやって戦うべきかを考えていた。
遠くに届く魔法もあるが、相手の吐き出す毒の攻撃を考えると遠距離でのやり合いは避けた

ほうがいいだろう。毒の効果は思ったより強烈で、吸い込んだ量が多くなれば身動きできなくなる恐れもある。

見ればコカトリスは遠くの敵には毒を吐き、近くの敵には嘴で攻撃するらしい。

あの嘴の一撃は強烈だが、よけられないほど素早い攻撃ではない。

毒と嘴を比べれば、まだ嘴のほうがよけやすい気がする。

問題は攻撃はよけられるとして、どうやって相手を倒すかだ。

今持っているスティレットでは、あの巨大な魔物を倒すのは無理だ。

となれば頼りになるのは魔法だけだ。

火属性の魔法が有効だろうが、この種類の魔法は総じて移動速度が遅いという欠点がある。

コカトリスの素早い動きを見ると、命中させるのは至難の業だろう。

接近した状態で魔法を放つという方法もある。

だがその場合、牽制攻撃をするための武器が必要になる。魔法と剣のコンビネーションを使った攻撃なら、コカトリスを惑わすことができるだろう。

そんなことを思いながらふと部屋を見回すと、部屋の隅に長めの剣のようなものが立てかけてあるのが見えた。

ここで戦った者の遺品かもしれない。

少なくとも実戦で使った武器なら、状態にもよるがスティレットよりは数段ましだ。

カインはコカトリスとの間合いをとりながら、剣へと近づいていった。
牽制のためカインは、フローティングボムの呪文を使った。
これは炎の玉を空中に出現させ、何かが触れた瞬間に爆発させる魔法だ。
爆発は凄まじく、あまり近くで使うとカイン自身にも被害が及ぶ。
だが敵と自分の間に置いておくと、バリケードのような役割を果たさせることができる。
コカトリスは燃えながら空中に止まる火の玉を怪しみ、カインを追うのをやめた。
その間にカインは、立てかけてあった剣に近づいた。
「これは！」
カインは目の前にある剣が、ハンティングソードであると見て喜んだ。
ハンティングソードは本来、狩猟に使われていたものだ。馬上から猪や鹿などを突き刺すために作られた剣でボアソードなどと呼ぶ場合もある。
最初は狩りにだけ使われていたが、いつの頃からか戦争で、馬上の騎士が歩兵を攻撃するために使うようになった。切り裂くには向かない武器だが、突き刺すのには最適な武器だ。
「これなら十分使える」
武器のつくりがしっかりしていたのと、この部屋が乾燥していたのが幸いしたのだろう、刀身にはわずかに錆が浮いているだけだ。
拾ったハンティングソードを構えると、カインは円を描くように移動しなからコカトリスに

接近していった。
直線で接近すると、コカトリスの吐き出す毒を受ける危険がある。
だが円を描くように移動しながら接近すると、相手はこちらを視界に収めるために、常に身体の位置を動かさなければならない。
コカトリスもカインを常に視界に捕らえようと、身体の向きを変える。
このわずかな動きが、コカトリスに毒を吐くタイミングを失わせている。
部屋を一周する頃には、カインはコカトリスの目前まで迫っていた。
「おりゃ！」
もう間合いは十分と考えたカインは、コカトリスの腹に向かってハンティングソードを突き出した。
かなり重い手応えだったが、刃先はコカトリスの羽毛を突破して肉に突き刺さった。
グケーッ！
痛みを感じてコカトリスは飛び上がった。
その動きを見ながらカインは冷静に、フローティングボムを作りだして後ろに退がる。
怒り狂ったコカトリスは、退がったカインだけを見て間合いを詰めた。
ゴオッ！
次の瞬間、空中に浮かんでいた火の玉に接触して爆発が起きた。

クケケーッ！
炎に焼かれてコカトリスは暴れまわった。
その間にカインは左側に回り込む。
こうして戦ってみて、コカトリスの大きな弱点を見つけた。
頭が高い位置にあって図体がでかいため、身体の間近に死角が多いのだ。
だから暴れまわっている間に素早く左右から回り込めば、コカトリスの死角にもぐり込むことができる。
カインは相手の動きを封じるために、足のつけ根に剣の攻撃を集中させた。これだけの巨体なら、少しでも足を傷つければ動きが鈍くなるのは間違いない。
ケーッ！
暴れているコカトリスの足に向けて、カインはハンティングソードを突き出した。
再び身体に痛みを感じて、コカトリスは巨体を捻る。その間にカインは、再びフローティングボムを発生させる。
ケーッ！
怒りの声と同時に振り向いたコカトリスは素早く嘴を振り下ろすが、それは火の玉を直撃する。
ドォッ！

凄まじい爆発を受けてコカトリスは、後ろに数歩たたらを踏む。頭を左右に振って火炎(かえん)の熱を振り払っている間に、再びカインはコカトリスの背後(はいご)に回り込んだ。

「ムン！」

空中で躍(おど)り狂うような太い尻尾に注意しながら、カインは左足のつけ根に向けてハンティングソードを突き刺した。

キキャー！

悲鳴(ひめい)をあげるとコカトリスは、がっくりと地面に崩(くず)れ落ちる。おそらくハンティングソードが、足の腱(けん)を傷つけたのだろう。

ギギャーッ！

立てなくなったコカトリスは、もがきながらところかまわず毒を吐き始めた。

部屋のあちらこちらで光が炸裂(さくれつ)し、毒の霧が漂(ただよ)い始める。

いくら広い部屋といっても、これだけ毒が充満(じゅうまん)してくると安心はできない。

カインはコカトリスにとどめを刺すために、ボンバーの指輪に意識を集中させる。守りびとが言うには、この魔法は火系統(けいとう)の最強魔法であるという。

それだけに頭のなかで文様が描き終わるまでしばらくかかった。

その間にもコカトリスは、我を忘(わす)れて暴れていた。もはや敵がどこにいるのかは関係なく、ただ怒りに任(まか)せて毒を吐きまくっているだけだ。

そんなコカトリスの身体の中心を狙(ねら)って、カインはボンバーを放った。

ゴオオオオッ！

凄まじい音とともに、空中に炎の槍(やり)が出現した。

それはゆっくりとコカトリスを目指して進んでいく。

ギョケーッ！

ボンバーの直撃(ちょくげき)を受けたコカトリスの羽毛は、一瞬にして燃え上がった。そして空中を突き進む炎の槍は止まることなく、コカトリスの身体に喰い込んでいく。

その威力は凄まじく、あまりの力にうずくまっているコカトリスが前に押されていくほどである。

やがてコカトリスの身体に喰い込んだ炎の槍は、身体を突き破(やぶ)った。

ギーッ！

断末魔(だんまつま)の声をあげて、コカトリスはどさりと地面に倒れた。

その姿はいつものように、地面に溶けるように消えていってしまう。

「さて、これで表に出られるな」

カインは階段に向かって、歩いていった。

途中、コカトリスの巣の近くでカインは足を止めた。

そこに転がっている骸骨(がいこつ)を弔いたいと思ったのだ。

兵士にとって戦場で果てるのは宿命である。
だが屍をさらし弔う者もいないというのは、あまりにも悲しい。
ひとりひとり弔うのは無理でも、せめて大きな穴を掘り、まとめて葬ってやりたかった。
だが、ここで弔いを行えば確実に一日、潰れることになる。
巣にまとめられた白骨の数がそう言っている。
ライラを捜すことを考えれば、そんなことをしている暇はない。
もともとアルダインの国の兵士など、縁もゆかりもない者たちなのだから、このまま放っておいてもいいのだ。
カインは自分に、そう言い聞かせようとした。
しかし、できなかった。
さっき拾ったハンティングソードの持ち主も、おそらくこのなかにいるのだろう。
だとすれば代価を払わずにいくのは気が引ける。
「仕方ない。剣の代金だ」
カインはそう呟くと、墓穴を作るために外へ向かった。

静かな森のなかに巨大なドームを持つ建物が立っていた。
その建物の横に、ネルが佇んでいる。

「エイルシアの英知の館も、訪れる者もなく朽ち果てるのみか……」

ネルは、持っていた水晶を掘った穴のなかにそっと置いた。そして土を被せて、大きな岩をその上に置く。

「かつて王だった者の墓としては粗末だが仕方あるまい。遺体もないのだからな……」

男は膝をついて短い祈りを捧げた。

「さて、あとはあいつが生きているかどうかだが、むっ！」

男は空中の影に気づいて、素早く木陰に身を寄せた。

ゴオッ！

凄まじい風を巻き起こしながら、巨大な影が頭上を飛んでいく。

巨大な影は、あっという間に火山へ向かって飛んでいってしまった。

「闇の竜か……」

影が去っていった方向を見ながら、男がそう呟いた。

「ふふっ、仕えるべき者も死んだというのに、まだこの命、惜しいと見える。なんとも、さもしいことだ」

竜に怯えて身を隠したことを恥じるように、男は情けなさそうに肩を落とす。

「この身など、もはやいつ朽ち果ててもいいのだが。あ奴に、本当のことを話すまでは生きているとしよう」

ネルはそう言うと、建物のなかに入っていった。

森のなかをトカゲの魔物が、二本足で立ったまま尻尾を左右に振りながら歩いている。

手には見すぼらしい剣らしいものを持ち、何かを探しているようだった。

もともとはアルダインの兵士だった者だが、呪いによりトカゲのような姿の魔物になってしまったのだ。

不帰の島特有の品物を狙う山師たちは、この魔物をリザードマンと呼んでいる。

とっくにひとの心は失ってしまっていたが、なぜか軍隊的な事柄だけは覚えているらしい。

そのため二～三匹で徒党を組んで、特定の地域を巡回して縄張りを守っている。

こうした集団がいくつかいるため、森は非常に危険な場所となっている。運の悪い場所でこのリザードマンに出くわすと、数十匹に周囲を囲まれることもある。リザードマンたちは、戦うことだけが楽しみで、常に攻撃するべき相手を探しているのだ。

今日も自分たちの縄張りに侵入した者がいないかどうか、見回っている。

フン、フン。

リザードマンは、嗅いだことのない臭いに気づいて周囲を警戒した。

それは彼らとは別のものの臭いだった。

何者かが森の茂みに隠れていないかどうか、リザードマンは辺りを見回した。

その瞬間、頭上から黒い影が襲いかかった。

「ギャッ！」

凄まじい力で首を締められてリザードマンは叫び声をあげた。

襲いかかってきたのはダレルである。

木の上で待ち伏せをして、上から襲いかかったのだ。

「グアッ！」

首を締められてもがくリザードマンは、手にした剣をダレルに叩きつけようとした。

バサリ！

だがダレルは両手で首を握りしめたまま、翼の一撃で獲物の手から剣を叩き落とした。

バギリ、ゴギリ！

次の瞬間、すさまじい音が森に響いた。

「チカラ……チカラ……」

かつてダレルだった存在が、首を握りつぶしていた。リザードマンはもはや動くこともなく、ダレルの腕から力なくだらりと垂れ下がっていた。

「マ……リョク！　チカラ！」

ダレルだった存在は、そう言うとリザードマンの頭に喰らいつく。

ペキッ、バキリ！

噛みついたダレルの顔は、そのままボコボコと動いて口ごと前に伸びていき獣のような口に変化していく。それだけではなく、身体もメキメキと蠢き変化していく。
「マリョクだ……。マリョクが……アレば……えたあなる……りんぐ……」
ダレルの身体の変化が終わると、噛みつかれていたリザードマンは大気に溶けるように消えていった。
おそらくダレルだったものは直接、魔物を襲うことで魔力を吸収しているのだろう。そして吸収した力を使って身体を作り変えているのだ。
「タタリナイ……モット……マリョク……」
完全な魔物となったダレルは、より多くの魔力を求めて森のなかをさまよい続けた。

3

カインは、ようやく鬱蒼と繁った庭園跡を抜け出していた。

迷路のような庭園のなかには、大型の猫のような魔物が潜んでいた。

何度か襲われたが、ハンティングソードが役に立った。

そうして抜け出してきたところは、何か大きな建物が立っている。石造りで天井にドームを持っている学校か教会を思わせる建物だ。

ゆっくりとカインは建物に近づいていく。

石造りの建物には、大きな両開きの扉があった。

そこを開けてカインは建物のなかに入っていった。

建物のなかはひんやりとしていた。いくつもの大きな本棚が立ち並び、そこにはぎっしりと書物が詰め込まれている。なかには地震のためだろう、本棚から崩れ落ちている本もたくさんあった。

この状態を見ると、すでに管理する者はいないらしい。

住民が滅んだという不帰の島では当然のことか。

カインは落ちている本を一冊、手に取ってみた。

なかを開いて読んでみようと思ったが、なかの文章は読めなかった。書かれている言語はおそらくソルシアの言語なのだろう。

「グッ、ううっ……」

本を本棚に戻して、さらに奥へと歩いていくと男のうめき声が聞こえてきた。

「誰かいるのか？」

「ぐうっ……」

さらにうめき声が聞こえたので、カインは声のするほうへ進んでいった。

すると本棚の陰に、ターバンを巻いた男がうずくまっている。

「どうした？　傷でも負ったのか？」

「ぐうっ。ほう……生きてたか」

「ああっ、そっちこそ大丈夫か？」

「ふっ、これは怪我ではない。魔力に耐えられずに、身体が悲鳴をあげているだけだ」

「魔力に耐えられない？」

「そうだ。お前のようにソルシアの血を引いた者たちは、魔法を使うことで魔力を身体の外に放出することができる。うぐっ！」

ターバンの男は、両手で胸を押さえながら苦しそうにもがいた。
「くうっ、だがな魔法を使えない者たちは、魔力を身体にため込んでいく。その量が多くなると、身体は魔物に変化していく。今、ちょうどその時がきただけだ、ぐあっ！」
しばらく床に伏したまま、ターバンの男はうめき続けた。
「ふうっ。ようやく終わったな」
「あなたに聞きたいことがある」
「わかっている。慌てるな」
男はそう言うと、ゆっくりと自分の顔に巻いていたターバンを取っていった。
外されていくターバンの下から、ひととは思えないひび割れた土色の皮膚が現れる。その皮膚は醜くひび割れ、さらに変形した顔は蛇かトカゲのような面差しをしていた。
「この姿を見て驚いたか？」
「いや」
「そうだろうな。この不帰の島では珍しいことじゃない」
カインの返事を聞いて、男は寂しそうに笑った。
「私の名はネル・グレイ。ずっとアルダインの王に仕えていた者だ」
「なるほど。あなたがネルか」
「そうだ。二十年間、なんとか元に戻る方法がないか探し続けていた。だが王は魔物のまま死



んだ。もう、どうでもいい。私は、このまま魔物となっていくだけだ」

「もとに戻るのをあきらめたのか？」

「もとに戻っても、意味がないのだ。王がいてこそ、私があったのだ。王に仕えることは、私のすべてだった。お前にはわかるまい」

ネルは、寂しそうに首を垂れて目頭を押さえた。泣いていたのかもしれない。

「あの時に間違ったのだ。ソルシアを滅ぼしても、不帰の島へは来るべきではなかった。お前はエターナルリングを、強力な魔法を宿した指輪か何かだろうと思っているだろう？　あれはそんなもんじゃない」

「では、何なんだ？」

「檻だ。本当に危険な存在を永遠に封じ込めるための檻。二十年前の私たちは、そんなことも知らずに檻を開けようとした……」

ネルは遠い過去を思い出すように、天井を見上げた。

「その結果がこれだ……。エターナルリングは、壊れ始めている。エターナルリングが力を失い、なかのものが自由になるのは、それほど先のことじゃない。そうなれば世界は、ここと同じようになる……」

「止める方法はないのか？」

「止める方法？　ははっ！　止める方法か！」

　カインに問われて、ネルは久しぶりに面白い冗談を聞いたというように笑った。
「二十年の間、誰にも止められなかったことだ。不可能だ！　もう世界は終わるんだ。そうだ、お前がもし自分のことを知りたいなら、私が知っていることを教えておいてやろう」
「俺のこと？」
「そうだ。お前は自分がソルシアの生まれであることは知っているな？　私もそうだ。アルダイン王に仕えてはいたが、生まれはソルシアなのだよ」
「それならなぜ、故郷を侵略する計画など立てた？」
「ふふっ、慌てるな。お前にわかるように話してやる」
　ネルは皮肉を含んだ笑みを浮かべながら先を続けた。
「私はソルシアの名家に生まれた。本当なら何不自由なく暮らせるはずだった。だがな、私には魔力がまったくなかった……」
「魔力が？」
「今のお前にはわかるまい。魔力を使うことが当たり前のソルシアで、魔力がないということは呪われているに等しい」
　ネルはその当時の屈辱を思い出しているのだろう。握りしめた拳が、小刻みに震えていた。
「私は迫害された。ひとでないように扱われた！」
　知らず知らずネルのあげる声は、大きくなっていった。

「他人だけでなく、家族にさえも！　父も母も、やがて家を継いで家長となった兄も私を蔑んだ！　お前にわかるか？　家族から厄介者、ひとでなしと見られた俺の気持ちが！」
カインを見つめるネルの瞳には、憎しみと悲しみが入り交じっていた。まるでカイン自身が、かつて自分を迫害したと言わんばかりに。
「だから私はソルシアを捨てた！　アルダインへ逃れた私は、マシュー王に見いだされ出世した。思えばあの時が、私にとって一番幸せな時期だった」
「ならなぜ、ソルシアを攻める気になったのだ？」
自ら生きていく場所を得たのなら、それで満足のはず。復讐という手段を取ったネルの心情をカインは理解しかねた。
「思い知らせてやりたかったのだ」
「誰に？」
「魔法を使うことを誇っていた連中に、そんなものは何の役にも立たないと！　私を蔑んだ兄に、魔法の無力さを思い知らせたかったのだ！」
「それでソルシアを……」
「そうだ。永遠の力の話を、マシュー王はすぐに信じ込んだ。大陸制覇の野望に燃える男にとって、エターナルリングは魅力的な力だった。魔法を使うとはいえ小国のソルシアが、本気で攻め込んだアルダイン軍に勝てるはずがない」

「なぜ最初から、不帰の島へ行かなかった？　目的はエターナルリングなのだろう？」
「それは王の目的だ。私の目的は復讐、ソルシアを攻め滅ぼすことだ。破壊され、焼け落ちた一族の館を見た時は、何とも言えなかった」
「それでソルシアの民は不帰の島に逃げた……」
「そうだ。兄を含む数人のソルシアの指導者たちは、伝説を頼りに不帰の島に逃げ込んだ。兄さえいなければ、私はこの島までソルシアの連中を追わなかったろう」
「それで？」
「王と私は、兄たちを追い詰めた。その時、兄たちはエターナルリングを発見して、それを破壊した。そしてなかにいた者の力により、彼らは竜となった。同時に、この島全体に呪いが広がった。多くの兵士たちは魔物となり、無事だった兵士たちも竜に変わったソルシアの指導者たちに殺された……」
「リングのなかには、何がいたのだ？」
「わからない。私にはわからない。本当だ」
「そうか」
「ただあのなかの存在を倒すことができれば、呪いが解けるかもしれないと思っていた。だから お前に近づいたのだ。魔法の指輪を与え、力をつけさせ、エターナルリングのなかのものと戦わせようと考えていた」

自分が考えていたことをネルは、とうとうと喋り続けた。
「だが、もうどうでもいい」
「なぜだ？　最初から私がソルシアの出身とわかっていたのか？」
「ああっ、お前には兄の面影がある」
ネルはカインの顔を、醜く変形した指でさし示した。
「その金髪といい、その瞳といい。ひと目見てわかった。兄はソルシアでも、一、二を争う魔法の使い手だった。その兄の息子なのだ、お前は。だから期待した……」
カインは自分と目の前のネルが、血筋のうえでは叔父と甥に当たることに驚いた。戦乱のなか、自分の身内はひとりとして生き残っていないと考えていたからだ。
「お前が知りたいのは、そういう話だろう？」
ネルは、寂しそうにカインに笑いかけた。
「そう。だがなぜ、今になってそんな話を？」
「お前も、あの火竜を見ただろう？　あれが、かつての私の兄の成れの果てだ。昔は兄も、人間の心を持っていた」
「なぜ、そう思うんだ？」
「もちろん話したわけじゃない。だが竜になった兄は、わたしと王を見逃した。いや、私を助けてくれたのだろう。兄は、私のことを覚えていたのだ……」

「そうか」
「しかし今の火竜は、人間の心を失った脱け殻だ。私は仕えるべき者も、復讐すべき相手も、すべて失った……。ハハハッ」
ネルは自嘲気味に、力なく笑った。
「ハハッ。結局、私は何も手に入れることはできなかった……何も。ハハハッ」
笑いながらネルの目から、一筋の涙が流れ出ていた。
「ただひと言、お前を蔑んで悪かったと兄が言ってくれれば！　いや、それより前に魔力などなくとも私を愛していると言ってくれれば！　私は何もいらなかったのに……」
カインは、ただ泣き続けるネルを見て、ことの始まりの虚しさに悲しみと哀れみを覚えていた。魔力がないために何ひとつ手にすることができなかった男が、故国に憎しみをぶつけたのがすべての始まりだったのだ。
それが多くの人々を不幸にしたのだ。
「もうすぐエターナルリングの力が弱まり、封じたものが出てくる。そうなったらお前もライラも、いや、この世界の生物すべてが生きてはいられない」
ネルはそう言うと、建物の奥を指さした。
「この先にある建物の地下から、ライラの家に行ける。お前はそこに行け」
「なぜ、俺をライラに会わせたがる？」

「簡単なことだ。ライラは、お前の妹だ」
その言葉を聞いてカインは、自分の耳が信じられなかった。
「妹？　ライラが？」
「お前は幼かったから、覚えていないのだ。いや、戦乱のなか取り残された時に、不安からすべての記憶を自分で封じたのかもしれん。だが、ライラはお前の妹だ」
妹がいるとネルに言われて、カインは返す言葉が見つからなかった。まさか自分に妹がいるなど考えたこともなかったのだ。
「さあ残された肉親に会いに行け。あまり時間は残っていないぞ」
「ネル。あんたはどうするんだ？」
「私はこのまま、この島のどこかで最期の時を待つ。それが私にはふさわしい……」
そう言うとネルは、振り向かずに去っていった。

そこは小さな盆地の中央だった。
辺りはすっかり雪に覆われ、真っ白い世界が広がっている。
白い雪が、しんしんと降り続いていた。
それは二十年前からやむことのない雪である。
その雪が、黒い竜に降り積もっていた。

竜の上空には、翼持つ魔物が何匹か飛んでいる。
黒い身体のほとんどは雪に覆われ、わずかに身体のあちらこちらが雪から出ている。
うずくまる竜は目を閉じていた。
その竜の前に、ひとりの魔物が歩いてきた。竜を恐れる様子はなく、その魔物はゆっくりと竜の顔の近くに歩いてきた。
その魔物は全身に毛が生え、尻には尻尾も生えている。両手には鋭い爪があり、顔は狼と人間を足したようだった。粗末な皮のズボンを履き、胸に大きな水晶のペンダントを下げている。
「なあ、起きてるか？」
魔物は静かに竜に声をかけた。その口調は、眠っている友に語りかけるようだった。
「無理か……。もう起きられないのか？」
そう問いかけた時、黒い竜の瞼がゆっくりと開いていった。
「オ……マ……エ……カ……」
竜の喉から絞り出されるような低い声が聞こえた。
「おおっ、三年ぶりだな。目が覚めたのか？」
「ユメ……ヲミタ……」
「どんな夢を見たんだ？」
「魔力……ツヨキ者ノ……ムスコガ……戻ッテクル……」

「魔力強き者の息子？　誰だそれは？」
「ワカラヌ……ダガ……戻ッテクル……」
魔物は竜の言うことがわからないようだった。だが竜は苦しそうに、同じことを繰り返すだけだった。
「タノミ……ガアル……魔力……ツヨキ者ノ……ムスコ……ヘ……コレ……ヲ……」
竜はそう言うと軽く頭を揺する。すると角の裏側から、一本の鍵が転がり落ちてきた。
「ツチのカギ……コレヲ……渡シテ……クレ……」
「いいけど俺には、その魔力強き者が誰かわからないぜ」
「ワカル……カナラズ……ダカラ……」
「わかったよ、引き受けた」
魔物はそう言うと、鍵を拾い上げた。
「必ず、その魔力強い奴に渡してやるよ」
「タノム……」
「渡したら、知らせにくるよ」
「イヤ……オレハ……モウ……死ヌ……」
「何を言ってるんだ？」
「ツギニ……目ヲトジレバ……モウ……オレハ……二度ト……起キナイ……」

「そんな、そんな！　死ぬことはないだろう？」

魔物は慌てたように、竜の顔に触れる。

「オレハ……ヒト……トシテ……シヌ……」

「お前……」

「タノム……モウ……終ワリ……ニシタイ……」

黒い竜がそう言うと、魔物はそこにへたり込んだ。

「じゃあ、俺はひとりっきりになっちまうのか……」

「スマナイ……ダガ……オレノ……ヒトノ……ココロハ……モウ……」

「いいさ」

魔物は無理に笑みを浮かべながら、小さな声でそう言った。

「姿だけでなく、心もひとでなくなっていくのは苦しいもんな。ゆっくり眠りなよ」

「アアッ……」

竜は、魔物にそう言うと静かに瞼を閉じた。

雪だけが静かに降り積もり、どこかで翼ある魔物が鳴いている。

魔物は長い間、目を閉じた竜の前にじっと佇んでいた。

カインは地下道を歩きながら迷っていた。

それは自分に妹がいるなど、今まで考えたこともなかったからだ。

自分が拾われた子供であることは、十歳の時に知っていた。世のなかには口さがない連中がいて、カインに聞こえるように拾われっ子などと陰口を叩いたものだ。

最初は拾われた子供ということを気にした。しかし養父グリアムが、カインに対して実の息子同然に接してくれるのを見て、自分が愚かしく思えた。

グリアムは、まさしく自分の息子としてカインを育ててくれたのだ。

後にカインがグリアムの親友である剣の師匠から聞いた話では、グリアムの妻は病弱で、子供を産むことなく若くしてこの世を去ったという。

傷心のなか、何かを求めるようにグリアムはソルシア周辺の偵察部隊の隊長を志願した。

本人は言わないが、親しい友人はあの時のグリアムは死ぬ気であったという。

そして戦乱で破壊された都市のなかで、グリアムはひとり佇む幼い男の子を見つけた。

その時、グリアムは亡き妻が、自分とその子をめぐり合わせてくれたと信じた。

見つけた男の子は、名前すら覚えていなかった。おそらく戦乱の恐怖に、自分の記憶を閉ざしてしまったのだろう。

名もない男の子にグリアムは、カインという名を与えた。

この名前は妻とともに、子供を授かった時のために考えていた名前だった。

妻を失った男は、戦場で息子を得たのだ。

グリアムの心に、カインは応えようとした。
自分が拾われた子供ではなく心底から、グリアムの息子であろうとしたのだ。
カインは努力を重ね、グリアムの自慢の種となっていった。
血の繋がらない親子は、心で通じ合ったのである。
だから自分の家族が生き残っていることなど、一度も考えたことがない。
生まれてからずっと彼は、グリアムの息子カインだったのだ。
だが突然に、自分の妹が生きていると聞いて戸惑っている。
何しろ自分に妹がいたという記憶がない。
だから、どうやって接したらいいのかわからない。
演劇や物語のなかでは、よくある話のひとつではある。
芝居なら大げさに兄と名乗り、妹を抱きしめるところだろう。
だが実際に、そんなことはできない。
「困ったな……」
自分と兄妹であるということを、ライラにどう話せばいいのか。
頭のなかは、ずっとそのことで一杯であった。
「むっ、出口か……」
いつの間にか地下道は終わり、カインは外に出ていた。

海が見えた。
周囲を見渡すと、ここが島の絶壁の途中に開いた窪みのような土地だとわかった。
絶壁で囲まれていて、出入りはさっきの地下道でしかできないのだろう。
海に面した場所に、ひとつだけ風車のついた家が建っているのが見えた。かつてはいくつか家が建っていたのだろうが、ほとんどが崩れさってしまっている。
石畳の両脇には畑だった跡もあり、かつてはかなりのひとびとがここで生活していたらしい。おそらくアルダイン軍が攻めてくるまでは、島民の街だったのだろう。
ネルは、ここにライラの家があると言っていた。
ひとが住めそうなのは風車のついた家だけだから、そこがライラの家なのだろう。
カインは、ライラにどうやって話しかけるか迷いながら、その家へ近づいていった。

ライラは家のなかで、机に向かいながら母の日記を読み返していた。
やさしかった母も二年前に病気で死んでしまった。
それから、ほとんどひとりで暮らしている。この家を離れるわけにはいかなかった。
重要な役目があるから。
だがひとりではあまりにも寂しい。
ネルは島のあちらこちらで出会う時があるが、あまり自分と話そうとしない。

ひとと話すのは、島の外からきた山師（やまし）たちと話す時だけだ。
それも相手を十分に観察（かんさつ）して、危険が少ないとわかってからにしている。
なかには乱暴（らんぼう）な連中もいて、ライラの姿を見ただけで襲いかかってくる輩（やから）もいた。
それでも誰かと話したいと思うのは、島の外への憧（あこが）れである。
彼女は島の住人（じゅうにん）の最後のひとりとして、この島から出ることはできない。
だからせめて、天気の良い日に家の向こうの海に見える大陸の話が聞きたかった。
たぶんライラは一生涯（いっしょうがい）、この島を離れられないから。
（あのひと、カインと言ったっけ……。無事なのかな？）
ライラにとってカインは、間近で話した自分の年齢（ねんれい）に近い相手だった。
せっかくいろいろな話が聞けそうだったのに、火竜となった父のために行方（ゆくえ）知れずとなってしまった。
それが残念でしょうがない。
（ソルシアの生き残り。あのひと以外にもいるんだろうか？）
母から聞かされていた話では、大陸にあったソルシアの国は完全に滅んでしまったということだった。だが国が滅んでも、何人かは逃（に）げ延（の）びて生き残っているかもしれない。
あのカインのように。
ガタッ！

ライラがそんなことを考えていると、扉の外で石畳の擦れる音がした。何年も手入れをしていない石畳のひとつが浮き上がっていて、不用意に踏むと大きな音をたてるのだ。
「誰？」
ライラは立ち上がると、家の扉を開けてみた。
するとそこにはカインが立っている。
「まあ無事だったの、よかった」
「ああっ、ここが君の？」
「ええっ、そんなところに立っていないで入って。立ったまま話できないし」
カインはライラに招かれるまま、家のなかに入っていった。

島の南部に巨大な塔が聳えていた。
かつて風の塔と呼ばれ、多くの魔術師たちが技を学んだ場所である。
闇の竜は、その風の塔の屋上で翼を休めていた。
竜になったばかりの頃、彼は風景の素晴らしさからここを住処に選んだ。
だが今は風景など関係ない。
ここは飛び上がるのに苦労しない、便利な巣でしかないのだ。
もはや闇の竜には、ひとの心など残っていなかった。

今、その心にあるのは喰らうことと宝を守ること。

もう十日以上前になるが、海で喰らった人間は旨かった。

魔物と違い、温かい血が流れている温かい肉は旨い。

だがこの島では、そうした御馳走は稀にしか食べられない。島の生物のほとんどが、魔力の影響を受けて魔物と化しているからだ。

あとは彼の大切な宝を守らねばならない。

何者かが、この宝を狙っていることを闇の竜は知っていた。

風の鍵。

魔力を秘めた宝。

なんとしても、これを守る。

そして奪いにくる者は、人間なのだ。

闇の竜は再び甘美な血を味わえると信じて、略奪者がやってくるのを待ち受けていた。

家のなかは殺風景だった。

それもそのはず、生活に必要なもの以外は何もないのだ。

壁に作られた本棚と暖炉、ベッドと作業用の机に椅子がひとつ。

それ以外は何もない部屋だった。

「それに座って」
ライラはカインを椅子に座らせると、自分はベッドに座った。
「ここが私の家、かつてエイルシアのひとびとが築いた街。今はもう私ひとりだけど……」
「エイルシア？　ソルシアではなく？」
「そう。あなたはソルシアのひとだから、本当のことを知る必要があると思うの。少し長い話になるけどいい？」
「ああっ、かまわない」
カインはライラに、どのように自分との関係を話すか考える時間を得るため、彼女の話を聞くことにした。
「かつてこの地に、魔法を自在に操るエイルシアという文明が栄えていたの。その時代の魔法で、ひとが空を飛ぶこともできたらしいわ」
「ふうん」
「ある時、エイルシアの魔術師たちは究極の生命体を作りだす研究を始めたの。すごい時間と努力、いろんな犠牲をかさねて彼らは、ついに一体の人工人間ホムンクルスを作りだすことに成功したのよ」
「ホムンクルス？」
「強大な魔力を持ち、死ぬことなく永遠に生き続ける完璧な人間のこと」

「永遠に死なない？　そんなことがあるはずない！」

「魔術師たちは魔法で、それを可能にしたの。信じられないことだけど本当のことよ」

「わかった。先を続けてくれ」

「魔術師たちは喜んで、ホムンクルスを『神』と呼んで祀りあげたの。でも、ホムンクルスは有り余る魔力で魔法を使って街を破壊し、ひとを殺したの」

「なぜだ？」

「ホムンクルスには、心がなかったの」

「心が？」

「そう。だから何かを破壊しても、他人を傷つけても何も感じなかった。そして自分の力でひとびとが死んでも、死という現象そのものが理解できなかった。魔術師たちは、無邪気に街を破壊する『神』を見て、自分たちが作りだしたものの間違いに気づいたわ」

「それで、どうしたんだ？」

「どうしようもなかった。死なない相手を、殺すことはできない。だから魔術師たちは、彼を閉じ込める特別製の檻を作り上げた」

「それがエターナルリング？」

「そう。時間も空間も永遠に閉じられた無限の檻。エターナルリングは、永遠に閉じられた輪という意味なの」

「じゃあ力というのは？」

「なかに封じられているホムンクルスのことよ」

魔法を自在に使う永遠に死ぬことのない存在。

確かに絶大（ぜつだい）な力を持った存在である。

だが、ひとがそれを手にすることはできない。解放（かいほう）されれば、それは世界を破壊してしまう力なのだから。

「ホムンクルスを封じ込める戦いで、エイルシアの国は潰滅（かいめつ）的な打撃（だげき）を受けたの。この不帰の島が、かつては大陸だったって信じられる？」

「まさか？」

「本当よ。ホムンクルスの魔力で、その陸地のほとんどを海に沈（しず）められてしまったらしいの。そして生き残ったひとびとは、エターナルリングを管理するわずかな監視（かんし）の民を残して、島を出て行ったわ」

「つまり大陸に渡ったひとびとが作った国が」

「ソルシアなの」

「それって、どれくらい前の話なんだ？」

「さあ、正確（せいかく）な年月（ねんげつ）は伝わっていないの。でも最低でも千年くらい前じゃないかしら？」

「千年か……」

二十年前のアルダインとソルシアの戦乱ですら、もはや昔話でしかない。千年以上前の話となれば、伝説としてしか残ってなかったのだろう。

「長い年月の間に一族の名前も変わり、正しい歴史も次第に忘れ去られていったのよ。そして二十年前、ソルシアの民が突然、島に戻ってきたの」

アルダイン軍に追われていたソルシアの民は、伝説に望みを託して不帰の島へと渡ってきたのだ。

「彼らはエターナルリングに、救いの神が封じられていると信じていたの。正しい伝承を知っていた管理者の民は、ソルシアの指導者たちに間違いを説明してエターナルリングを開けることを阻止しようと努力したわ。でもアルダイン軍に追い詰められて、ソルシアの指導者たちは管理者たちを振り払って、無理やりにエターナルリングをこじ開けたの」

「それでホムンクルスは？」

「無理やりこじ開けたエターナルリングは、ホムンクルスを完全に自由にはしなかった。でも彼に魔法を使わせる自由は与えたの。そして面白がった彼は、アルダイン軍と戦う力を欲したソルシアの指導者たちを竜に変えたの」

ホムンクルスにとって、ひとを別の生き物に変化させるなど簡単なことだった。だが、その術は乱暴なもので無理やり変えられた姿は、やがて心も魔物へと変えていくことになった。多くの者たちが、ひとでなくなる恐怖に耐えられずに自ら死を選んだ。

「その時に使われた魔力は凄(すさ)まじく、島中に呪いとなって広がったの」
たった一度の魔法が、この島全体に呪いをかけたのだ。
その魔力の強さは、想像(そうぞう)を絶するものだったに違いない。以来二十年の間、不帰の島は魔物の住む場所と化したのである。
「あの子は、まだ小さいからやって良いことと悪いことの区別がつかないのよ」
「あの子？」
「ホムンクルスのことよ。まだ幼いから、よく考えずに何かをしてしまうの。でも、きちんと教えてやれば正しい心を持つことができるわ」
ライラは辛抱(しんぼう)強く教えていけば、やがてホムンクルスが正しい心を持つと信じていた。
「それで監視の民はどうなったんだ？」
「魔力を持つ者は、この島の呪いに耐えることができたの。身体に余分に蓄積(ちくせき)された魔力を、魔法を使うことで減らせたから。ホムンクルスの力で、ソルシアの指導者たちは結果はどうあれアルダイン軍を退(しりぞ)けることができたわ」
カインは竜に襲われるアルダイン軍の姿を想像してみた。兵の多くが魔物と化し、見たこともない竜に襲われた者たちは成(な)す術(すべ)もなかったに違いない。どれほど強力な軍隊も、持ちこたえることはできなかったはずだ。
「監視の民たちは、そのあとで何とかエターナルリングを修復(しゅうふく)したわ。でも昔ほど力のある魔

術師はいなかったので、完全な修復はできなかった。修復のために犠牲も多く出て、生き残ったのは母と赤ん坊だった私のふたりだけ」

「母親は生きているのか？」

カインは思い切って尋ねてみた。ライラの母親ということは、カインの母親でもある。

「二年前に死んだわ……」

「そうか……」

その返事を聞いて、カインは少しほっとした。妹だけでなく、このうえ母親にまで出てこられたら、どうしていいのかわからない。だがそうした気持ちとは別に、会えなくて残念な気持ちも心にある。

「それでエターナルリングの、あっ！」

突如として島全体が大きく揺れた。

家はガタガタと軋み、本棚から本が落ちていく。

カインもライラも、あまりの揺れに床にへたり込む。

数分間、島は激しく揺れ続けた。

第三章　エターナルリング



1

彼は自分を封じ込めているものを、軽く押していた。
その力は空間に作用して、島を揺るがしているはずだ。
もっとも彼は十分に注意していた。
あまり力を入れすぎて、リングを破壊してしまっては彼女に叱られてしまう。
もちろん叱られたところで何も問題はないのだが、彼女の怒った顔は見たくない。
どちらかというと、笑っている顔のほうが好きだ。
だから注意を呼び覚まし、ここに来る程度の揺れに収める。
それそろ限界と感じて、彼は力を抜いた。
これで空間への圧力は消え、揺れも収まる。
彼女はすぐに来るだろう。
そうしたら海鳥の雛の話が聞ける。
彼は、それを楽しみに待つことにした。

地震は、始まった時と同じように唐突に終わった。
「大丈夫か？」
カインは立ち上がると、へたり込んでいたライラを助け起こす。
「ええっ、あの揺れ……。もう時間がないわ！」
「時間がない？　なんのことだ？」
「あの子のところに行かなくちゃ」
ライラは、カインを残したまま家の外に飛び出した。
「おい、どこに行くんだ？」
「あなたはここにいて、またあとで！」
ライラはカインにそう叫ぶと、今まで岩で塞がれていた洞窟のなかに消えていった。
そのあとを追うかどうか、カインは迷った。
正直な話、兄妹という関係の話をしないですんだことにホッとしている。
だがこのまま、あとを追わないのも気になる。
（妹か……。そうだ確か、母親は二年前まで生きていたと言ったな）
カインはライラが言った言葉を思い出した。
（母親と一緒に育ったんだ、幸せだったんだろう……）

母の記憶というものはカインには一切ない。
なぜならグリアムに拾われた時には、養父の妻はすでに死んでいた。グリアムは再婚しなかったため、カインは母と呼ぶべき人物を得たことがない。
そういう意味では、母親という存在に憧れていたところはある。
幼い頃は、母親とともにいる同じ年頃の少年を見ては羨ましく思った。
それだけに母親の話がでた時、わずかだが会えることを期待していた。
だが、それも幻となった。
(二年前か……。少し遅かったな)
もっとも二年前では、カインは騎士見習いでしかない。そんな身分では、今回のような任務を与えられることはなかったろう。
出会えない運命だった。
そう思ってあきらめようとカインは思った。
その時、ふと床に落ちている小さな本に気づいた。それは他の本と違って、紙を皮の紙縒りで綴じているものだった。
「これは……」
手に取って開いてみると、丁寧な文字が綴られている。どうやら大陸で広く使われている言語と同じものらしい。

何気なく目をとおすと、どうやらそれはライラの母親の遺言らしかった。
読んではいけないと思いながら、カインはその文章を目で追うのをやめられなかった。
あるいは自分のことが書いてあるのではないか？
そんなことを期待している自分を止めることはできなかった。

（母親の遺言……）

親愛なる娘、ライラへ。
これは私の遺言です。
昔話をしながらですが、最後まで読んでくれればうれしいです。
もう知っているように、あなたはソルシアの民の最後のひとりです。
あなたと出会ったのは二十年前のこと。
ソルシアの民が島に渡ってきてエターナルリングを破壊したため、監視の民の多くが死に、生き残ったのは年老いた私ひとりでした。
もはやリングを監視する役目も虚しく、私は生きる希望を失っていました。
そんな時、ソルシアのひとびとの集落で私はあなたと出会ったのです。
あなたの笑顔が、私に生きる活力をくれたのです。
私はあなたを娘として育て、あなたもすくすくと育ってくれました。

覚えていますか？
あなたが十歳になった日、あなたの本当の母親がすでに他界していること、父が火竜になったことを話しましたね。
あなたはそのあとでも、わたしのことを母と呼んで慕ってくれました。
そのやさしさが、どんなに嬉しかったことか……。
そしてあなたは監視の民が皆恐れていた、ホムンクルスとも仲よく話をしていましたね。
四季折々の島の変化、動物たちの話、花や樹の話。
いろいろな話をホムンクルスに教えているのを知っています。
忌まわしい存在と呼ばれる彼を、あなたは何とか救おうと努力しているのですね。
本当にやさしい心を持つあなたなら、何時かあのホムンクルスにも心を教えることができるような気がします。
だから私がいなくなっても、やさしいライラでいてください。
そうすれば、あなたの願いは叶うはずです。
あなたに良き魔法の導きがありますように。
ソルシアの末裔の娘へ、エイルシアの末裔の母より

カインは、その遺言の内容に驚いていた。

ライラは本当の母親に育てられたのではない。自分と同じように、養母に育てられていたのだ。

その事実にカインは愕然とした。

兄と妹は、離れ離れのまま同じような境遇にあったのだ。

いやカインのほうが養父と友に囲まれて育った分、はるかに幸せだった。

ライラは何もないこの島で、養母とふたりきりで育ったのだから。

養母が亡くなってから二年、彼女はこの小屋でひとり暮らしていたのだ。

(どれほど寂しかったろう……)

カインはライラの養母の遺言を、そっと机の上に戻す。

「彼女ひとりに、すべてを任せるわけにはいかない」

カインはライラのあとを追うべく、彼女が消えた洞窟へ入っていった。

その洞窟は急激に傾斜すると、巨大な空洞のなかへ出た。

空洞は水に覆われていて、その合間を縫うように石の道が続いている。

巨大な地底湖の上に、石の橋が架かっているような状態だ。

水は恐ろしいほどに澄んでいて、覗き込めばかなり深いところまで見える。

カインは、その石の道を注意しながら渡り始めた。

この水のなかに、何か魔物が潜んでいるかもしれない。

だが魔物が襲ってくることはなく、カインは石の橋を無事に渡り終えようとしていた。
出口と思える洞窟まであと少しという時に、突如として澄んでいた水面がざわざわと波立ち、何かが水中から浮かび上がってきた。
カインは魔物が襲ってきた場合を考えて、油断なく身構えた。
水中から現れたのは、一番最初に出会った水竜であった。
水竜は、カインを見つめたまま何かを訴えていた。
……
だが相変わらず、水竜が発する声は聞き取りにくい。
……ライラ……
……ホムンクルス……
……ジカン……
数分かけて、カインが理解できたのはわずかにこの三つの言葉だけだった。
「悪いが、俺にはあんたが言いたいことがわからん！」
水竜はカインの言葉を聞いて、頷いたようだった。
「悪いが時間がない！　俺は先に行くぞ！」
カインはそう言って、出口である洞窟へ行こうとした。
だが水竜は、首を左右に振った。

「どうしろというんだ？」

水竜は、そのまま目を閉じて何か唸り声をあげ続けた。

次の瞬間、周囲に凄まじい閃光が迸る。

「何だ？」

『聞こえるか？　久しぶりだな』

その声は、空洞全体から聞こえるようだった。

「誰だ？」

『私だ』

水竜は、自分が喋っていることを示すように口を開いた。

『今、魔法の力を使って声をだせるようにした。少し騒がしいだろうが、これで普通に話ができる』

声は地底湖の空洞に響き渡っていたが、確かに最初の唸り声よりはるかに聞きやすい。

『もうずいぶんと竜化が進んでしまって、人間の言葉を発するのも困難になってしまった』

「やはり、あなたもソルシアの指導者だったのか？」

『そうだ。私はソルシアの長、ロード・オエイル。もはや意識をもつ竜は、私だけになってしまった』

「他の竜は？」

『他の者は、そう魔力強き者キル・グレイですら、ただの火竜に成り下がった。日々、失われていく意識に耐えかねて、自ら命を絶つ者も大勢いた』

水竜の声には、深い悲しみがあった。自らが治めていた国のひとびとが、人間の心を失って死んでいくのを眺めてきたのだ。

『結局、ライラが最後のソルシア人になってしまった。だが、もうすぐ私も、あの娘を残したまま、すべてを忘れてしまうだろう』

「何か方法はないのか？」

『ない、これは報いなのだよ。監視の民の言葉を信じず、伝説を頼りにエターナルリングを破壊したことのな』

水竜は、悲しげに首を左右に振った。

『我々が破壊してしまったエターナルリングは、今も少しずつ機能を低下させている。古の魔法技術の多くを失っていた我々には、完全な修復は不可能だった』

「それでは、どうなるんだ？」

『ホムンクルスは縛めが緩んでいるのを知って、それを打ち砕こうとしている。彼が外に出ようとするたびに、島全体が揺れ動く。縛めの緩みを示すように、その揺れはだんだんと大きくなってきている。もはやエターナルリングが機能を停止するのも、時間の問題だ』

「エターナルリングを修復する方法は、本当にないのか？」

『魔法を使える者がほとんどいなくなった今では、成す術はない。ライラには、この島から逃げるように言っているのだが、彼女はホムンクルスを救えると信じている。ひととしての心、他を思いやる心を教えようとしている』
「ホムンクルスが、ひとの心を知ることはないのか？」
『不可能だ。心の存在しない者に、ひとの痛みが理解できるはずがない。無は、何も生み出さないのだから』
水竜は絶望的な口調で、カインにそう言った。
「それでライラは、どこに行ったのだ？」
『彼女はエターナルリングに行った』
「そこへは、どうやって行けばいい？」
『管理者でない者は、四つの鍵を持たねばエターナルリングに赴くことはできない。お前はすでに、ふたつの鍵を持っているはず』
「残りふたつか、鍵はどこにある？」
『ひとつは風の塔にあるはずだ。風の塔へは、そこの洞窟から行ける』
水竜はカインの右手に見える洞窟を顔で指し示した。
『たぶん最上階にいるだろうが、注意しろ。そこに住むものは完全に闇の竜と成り果て、ひとの心を失っている。鍵は彼を倒さなければ手に入るまい』

「もうひとつは？」
『雪原に眠る黒竜が知っている』
「そこへはどうやって行く？」
『風の塔に魔法の移動石がある、それを使うがいい。だが黒竜の意識は途絶えて久しい』
「どういうことだ？」
『もはや黒竜は生きておらぬかもしれぬ。だがその身体のどこかに、鍵があるはずだ。探してみるがいい』
「わかった。何とかする」
『四つの鍵が揃えば、古代の実験場からエターナルリングに至る道を見いだすことができる。何とかして悪しき遺産に縛られる彼女を救って欲しい』
「できるかぎりのことはする」
『私が知っている幼い頃のお前は、やさしいが強い心の持ち主だった。それはライラと同じく、お前たちの母の血を引いたのだろう』
「俺のことを知っているのか？」
『ああっ、お前の姿は若き頃の父にそっくりだ。その金髪も、固い意思を持った瞳も。お前ならきっとライラを救うことができる。頼むぞ、魔力強き者の長子、リン・グレイよ！』

リン・グレイ。

その名を呼ばれた時、カインは忘れていた過去を思い出した。
そう、かつてカインはリンと呼ばれていたのだ。
父と母の顔、そして生まれたばかりの幼い妹の顔、祖国を襲った戦乱の恐怖、すべてがカインの心に蘇ってきた。
それと同時に、目から涙が溢れ出てくる。今まで忘れていた悲しみが、カインの目から涙を流させているのだった。
『どうした?』
「思い出した。そう俺はリン・グレイと呼ばれていた」
『そうだ。だからこそ、お前ならより良い結果を導くことができるだろう」
「だが俺はもうリン・グレイじゃない」
カインは、涙を拭うと水竜に向かってはっきりとそう言った。
「俺はカイン・モーガン。グリアム・モーガンの息子だ」
『そうだな。お前には、ソルシアの民として暮らした時間より、今の自分として暮らした時間のほうが長いのだな……。無理強いして悪かった、忘れてくれ』
「いや、忘れはしない。さっきまで俺は、ライラが妹と聞いても何の感慨も湧かなかった。正直な話、自分の妹だとは思えなかった。だが今、昔の名前を思い出して、生まれたばかりの彼女の姿を思い出した」

カインは、今の自分が思っていることを水竜に静かに語った。
「だが今の俺はカインなんだ。同時にライラは、俺の妹だ。ソルシアのためには何もできないが、俺の故国と妹のためにできるかぎりのことをしよう。それでいいか？」
『それでよい、ありがとう』
「これから、あんたはどうするんだ？」
『私はこの水面の底で、静かに朽ち果てる。さらばだ！』
水竜はそう言うと、身を翻して水中に消えていく。
カインは、その姿が完全に消えるまで見送っていた。

その頃、ライラは早くも忘却の祭壇へやってきていた。
守護者たる資格を持つ者は、移動の魔方陣を使っていつでもエターナルリングに出入りすることができるのだ。
『ライラ』
英知の守りびとは、ライラを呼び止めた。
『やはり行くのか？』
「ええっ、あの子が自由になる前に、ちゃんと心を教えないと」
『作られし神の子の成長は、短き時間には成しえぬこと。それは神の子を作りし我がもっとも

よく知ること。汝が行いは尊いが、無駄なこと。今ならまだ間に合う。逃げるがいい』
「いえ、無駄じゃないわ！」
ライラは英知の守りびとを見つめて、しっかりとした声でそう言った。
「あの子は私が言うことを理解している。あとはきっかけなの。自分が覚えた知識を、現実と結び付けるきっかけがあれば、あの子は心を理解するわ。私は信じている！」
『そうか。もう何も言うまい……』
英知の守りびとはライラの決意を聞いて、彼女が決して心変わりしないことを知った。
『最後の管理者たる娘よ、汝に良き魔法の導きがあらんことを！』
「あなたにも、良き魔法の導きがあらんことを」
ライラは守りびとに挨拶を返すと、魔方陣からエターナルリングへと消えていった。

「くっ！　何匹いるんだ！」
カインは風の塔のなかで苦戦していた。
この塔は部分的に吹き抜けになった奇妙な造りになっている。痕跡からすると、かつては魔法を習得するのに使われていた塔のようだ。だがその空間には今や翼ある魔物たちが巣くっており、最上階を目指すカインに襲いかかってくる。
何より厄介なのが、上の階から吹き抜け部分を使って攻撃している魔物がいることだ。

最初は吹き抜けを通ってくる攻撃に気づかず、危うく命を落とすところだった。
今では死角を利用しながら、注意して進んでいる。
「この角度だな……」
カインは攻撃された方向から角度を計算して、死角から飛び出すと上空に向かってボンバーの魔法を放つ。
ギギャア！
計算どおり、カインが出てくるのを待ち伏せしていた魔物にボンバーが直撃した。
炎に包まれた翼ある魔物は、空中で消え失せた。
魔物を倒したのを確認して、カインは通路の先に進んだ。
さっきから階段を上るたびに魔物と戦っている。
空中の敵は狙いが難しく、何度か攻撃をしくじっている。ボンバーは強力な魔法だけに、魔力の消耗も激しい。
「弓が欲しいところだな……」
カインは空中の敵相手に、魔法以外の攻撃手段が欲しいと思っていた。だが不帰の島で弓を手に入れるのは不可能に近い。それに弓があったとしても、矢には限りがある。どっちにしても長くは使えないだろう。
階段を上った踊り場の扉を開けると、外の風景が目に飛び込んできた。

「外か……」
注意してカインは、扉の外を窺う。
見ると塔の外側を翼ある魔物が飛んでいるのが見えた。
だが魔物が飛んでいる距離は塔から意外と遠い。
「走れば相手にしないですむか？」
この塔の造りからして階段は、おそらく対角線上の位置にあるだろう。塔はさほど大きくないから、全力疾走すれば魔物に襲われる前に階段までたどり着けるはずだ。
階段に魔物がいた場合は仕方ない。
だがいなければ魔力を温存して、最上階を目指すことができる。
カインは意を決して、回廊に飛び出すと走りだした。
案の定、魔物たちはカインに気づいたが、距離が遠いので攻撃できる位置に来るまで時間がかかる。
その間にカインは早くも、回廊の最初の角を曲がっていた。
キヒヤア！
魔物の叫び声が、カインの背後から聞こえる。追ってくる気配がないところをみると、魔物たちにも何か縄張りのようなものがあるのだろう。
カインは回廊の先を見たが扉は見えない。おそらく次の角を曲がった場所に、扉があるのだ

ろう。

扉をすぐに開けるつもりで角を曲がったカインは、目の前に魔物がいるのを見てたたらを踏んだ。勢いがつきすぎていて魔物にぶつかりそうになるが、辛うじて壁に張りつくようにして止まった。

曲がり角の先には、鷹の顔に馬の身体、背中に翼を持つ伝説のグリフォンによく似た魔物が、扉を守るようにうずくまっていたのだ。

キキイ！

グリフォンはカインに気づくと、叫び声をあげて飛び上がった。

ハンティングソードを構えたカインは、飛び上がろうとしているグリフォンの胴体めがけて剣を繰り出した。

ギャアッ！

グリフォンは痛みを感じて、後ろに飛びすさった。

その間にカインは扉を開けて塔のなかに逃げ込んだ。

いったん、扉を閉めてしまえば魔物はなかに入ってこれない。

「ふうっ」

ガチリと扉を閉めて、カインは一息ついた。

階段には魔物はいないようなので、乱れた息を整えた。

外壁がなく回廊が直接、外に面してきたのは最上階が近い証拠だ。

「もうそろそろ最上階のはずなんだが？」

今までの塔の感じからして、そろそろ最上階が近いと思う。外壁がなく回廊が直接、外に面してきたのは最上階が近い証拠だ。

あと少しと自分に言い聞かせてカインは、再び階段を上っていった。

階段を上った先は、小さな部屋になっていた。

その一角には丸い石板が置かれていた。石板の上の天井は、同じ形にくり抜かれている。

それを見てカインは、丸い石板は鉱山にあった崖を上下するための仕掛けと同じものだろうと判断した。だとすれば、これに乗れば天井の上まで運んでくれるのだろう。

この上が風の塔の最上階なのだ。

「この先に闇の竜がいるのか……」

激しい戦いが待っているだろうが、これに勝たねばライラを助けることはできない。

カインは意を決して、円盤の上に乗った。

円盤はカインの重みを感じると、ゆっくりと空中に浮かんだ。

狭い穴のなかから、カインは風の塔の最上部へと上がっていった。

闇の竜は微かに振動する円盤の音で、自分の宝を狙う者がやってきたことを知った。

大きな翼を広げて闇の竜は巣から飛び立った。

しなやかで大きな翼が、しっかりと風を捕らえていく。
襲いかかるのに十分な距離まで上昇した時、目標が最上部に姿を現したのが見えた。
闇の竜は翼を広げたまま、音もなく侵入者へ迫っていった。

カインは最上部に出た瞬間、眩しい太陽の光に一瞬、目が眩んだ。
強い風が塔の周囲を流れている音がする。
周囲を見渡したが、竜らしいものの姿はなかった。
風の塔の最上部は、塔の外に面した部分にちょっとした出っ張りがある以外は何もない場所だった。
カインは闇の竜の姿を探したが見当たらない。
と、その時。
風を切る翼の音が背後から聞こえてきた。
危険を感じたカインは、瞬時にその場で身を伏せた。
バサアッ！
次の瞬間、鋭い爪がカインが立っていた場所を襲った。
「上にいたのか！」
ギャアアア！

最初の一撃をよけられて、闇の竜は怒りの声をあげた。
カインは闇の竜が通りすぎたのを確認して立ち上がると、ハンティングソードを構えた。
今の動きを見ると、動きが速すぎて炎の魔法では狙うことができないと感じた。
相手が直接攻撃してくるのなら、まずはハンティングソードで、どれくらい敵が頑丈なのか試してみようと思ったのだ。
闇の竜は上空で態勢を立て直すと、再びカインに向かって襲いかかる。
今度は不意打ちではないので翼をはためかせながら、前よりもきつい角度で降下した。
ほぼ真上に近いところからの急降下を、カインはタイミングよく動いてかわす。速度が速いだけに、直前に動かれると闇の竜はカインの動きに追従できない。
自分がいたところに落ちてきた闇の竜に、カインはハンティングソードを突き出した。
落下速度も加わって、ハンティングソードは予想以上に深く闇の竜に突き刺さった。
ギャアアアアッ！
痛みを感じて闇の竜は、大きくはばたいて逃げようとする。
深く突き刺さったハンティングソードを持っていかれないように、カインはソードをひねって抜く。
ソードが抜けるのと同時に、緑色の液体が周囲に飛び散った。おそらく竜の血なのだろう。



(意外と深く刺さったな)

ソードを抜いてカインは闇の竜の身体が想像していたより、かなり柔らかいことに気づいた。

今までの竜の印象から、鎧のように硬い身体を想像していた。だが闇の竜は空を飛ぶために、身体が柔らかいのかもしれない。

(これなら剣だけで倒せるかもしれないな)

カインは再び上空に舞い上がった闇の竜が、自分に襲いかかってくるのを待った。

闇の竜は、相手が思った以上に手強いことに気づいた。

長い間、剣で攻撃されたことがなかった。だから無防備に接近してしまったのだ。

今までの餌なら、あの攻撃で倒せていた。

かなり昔、あのように剣を持った連中と戦ったことがある。

だがそれ以降、剣を持った相手と戦わなかったので、すっかり忘れていたのだ。

剣を持った相手には接近してはならない。

この身体は他の竜たちと違い、剣に弱い。

剣を持った餌を相手にするなら、別の方法で戦わなければならない。

本能がそう告げている。

闇の竜は本能が命じるまま、急上昇を始めた。

「なにっ？」
カインは闇の竜が上空高く舞い上がるのを見て驚いた。
急降下して襲ってくるにしては高度が高すぎる。
だが闇の竜は高く舞い上がったところから、急降下を始めた。
「どうするつもりだ？」
あれほどの高さから急降下したら、風の塔の床に激突してしまうだろう。
しかし闇の竜は、カインを襲わずに塔の下に向かって消えていった。
「なんだ？」
カインは思わず竜が消えていった場所に走り寄り、下を覗いた。
だが塔の下に竜がいる気配はない。
と、その時、背後から翼のはためく音が聞こえてきた。
続いて凄まじい風が、カインを塔から放り出そうと襲いかかる。
身を低くしてカインは、襲いかかる風に耐えた。
背後を見ると塔の反対側から闇の竜が翼を激しく動かして風を送り込んでいる。
「くっ！」
風は激しさを増して、カインを吹き飛ばそうとする。

だがカインは辛うじて、その風に耐えた。

ギャアアアア！

闇の竜は悔しそうに一声鳴くと、再び上空に向かって上昇していく。

そして再び、塔の下に向かって急降下して消えていった。

カインは、その間に塔の中央に戻っていく。

塔の端であの風を受けたら、そのうち落ちてしまう。この高さから落ちたら、どんなに幸運が味方していても助からないだろう。

「なかなかやるな」

やはり他の魔物と違い、竜は手強い。おそらく、ひとであった頃の知識や知恵だけは残っているに違いない。油断ならない相手だ。

カインは周囲を見回して、どこから竜が上がってくるのか警戒していた。

油断なく見張っていたお陰で、竜の翼が塔の上に出てくるところを見つけた。

だが距離は遠く、塔の端ぎりぎりまで行っても剣は届きそうにない。

あきらかに闇の竜は、剣を恐れている。

「魔法で戦うしかないか？」

カインは意識を集中させてボンバーを放った。

それと同時に、闇の竜から竜巻がカインへ放たれた。

「ぐあっ！」
竜巻が通りすぎる瞬間、鋭い風の刃に襲われてカインは悲鳴をあげる。
一方、闇の竜はボンバーが放たれた瞬間、上昇を始めていた。直進するしかないボンバーは、虚しく闇の竜がいた場所を通り抜けていく。
「くそっ、ボンバーじゃ駄目か……」
闇の竜の速度が速いため、やはり火の属性魔法では倒せそうにない。
仕方なくカインは皮の小手を外して、ボンバーの指輪を外して、新しい指輪をはめた。
意識を集中させて、頭のなかに新たな文様が描かれるのを待つ。
その間にも闇の竜は塔の下から出現し、竜巻を放っていく。
カインは、素早く左に動いて竜巻をよける。
竜巻もボンバーと同じように直進しかない。相手が放つタイミングがわかれば、よけるのはさほど難しいものではない。
闇の竜は再び、急降下して塔の下に隠れた。
こうしてカインを惑わし、魔法と翼の風でカインを倒すつもりなのだろう。
確かに塔の外側から魔法と風で攻撃されては、剣で攻撃することはできない。
だが闇の竜は肝心なことを見落としていた。
カインもまた魔法を使えるのだ。

塔の下から聞こえてくる翼の音を頼りに、カインは新たな魔法を発動した。

闇の竜は上機嫌だった。
剣を持った餌は、思ったとおり魔法と風に翻弄されている。
何度か繰り返せば、あの餌は魔法で倒されるか、塔から落ちて死ぬ。
そうすれば温かな肉を味わうことができる。
勝利を確信して、闇の竜は塔の上に顔を出した。
その目前に、眩い光の玉が輝いている。
本能はそれを危険と知らせている。
すぐさま上昇してよけようとしたが、それより早く目前の光の玉が弾けた。
弾けた光の玉は、無数の矢となって闇の竜に襲いかかる。
光の魔法は、闇の竜のもっとも恐れるものだった。
身体を貫く激痛に、闇の竜は身悶えた。

光の属性魔法、フラッシュは闇の竜の目前で弾けた。
出現した無数の光の矢は、容赦なく闇の竜の身体を貫いた。
ギャアアアアアッ！

身体のあちらこちらから緑色の血を吹き出し、しなやかな翼も穴だらけにされ、闇の竜は怒り狂ったように大きな叫び声をあげながら上昇していく。
カインは、次にフラッシュを放つタイミングを計っていた。
塔の下に隠れるのなら、さっきと同じタイミングでいい。
だが闇の竜は直接、カインを倒すべく急降下してきた。
そのタイミングを見計らって、カインはフラッシュを放つ。
凝縮された光の玉は、カインと闇の竜の間で弾けた。
再び無数の光の矢に貫かれた闇の竜は、急降下の速度を殺せずに風の塔の床に激突した。
ワンバウンドした闇の竜の身体から、緑色の光が弾け出た。
跳ねて塔から落ちそうになったその光を、カインは慌てて受け止めた。
一方、激突した闇の竜は塔の端に引っかかるように止まったが、もはや動く力はなくずるずると下に落ちていった。
「これが風の鍵か……。あとひとつだな」
カインは手にした鍵を見て、そう呟いた。

2

強力な魔法の波動を感じて、ダレルは風の塔へやってきていた。
そして塔の下に横たわる竜の姿を発見した。
「チカラ……ダ……」
ダレルは、大地に横たわる竜の死骸を見つけて狂喜した。それには有り余るほどの魔力が宿っている。
「オレノ……チカラ……」
竜の軀にダレルはむしゃぶりついた。
噛みつき、むしり取り、全身で竜の身体に宿っている魔力を吸収していく。
茶色い翼は漆黒に染まり、大きくなっていった。皮膚は竜の特性を受け継ぎ硬くなり、爪はより大きく鋭くなっていった。
「ムテキ……オレ……チカラ……負ケナイ……」
顔もすでにひとのものではなく、獣の顔になっている。声もひとの言葉というより、獣の唸

り声がひとの言葉のように聞こえるといった状態だ。

「エターナルリング……手ニ……入レル……」

新しくなった漆黒の翼を広げて、ダレルはエターナルリングを求めて飛び立った。

すでにエターナルリングが隠されている空間に、侵入する場所は見つけてある。

島全体を揺るがした力は、閉鎖された空間の一部も破壊していた。ダレルはそこからエターナルリングに接近できることを知っていた。

だが空間のなかの敵は強力で、自分の力が不足していることを知ったダレルは、自らの力を増すことを優先していたのである。

「モウ……オレノ……モノダ……」

エターナルリングを手にする欲望だけを胸に抱き、ダレルだった存在は空間の裂け目へ消えていった。

闇の竜と戦った風の塔の地下にあった魔方陣を抜けると、そこは雪が降っていた。

「どこだ、ここは?」

カインは、ここが不帰の島のどこにあたるのかわからなかった。

だいたい不帰の島は寒冷な地方にあるが、今の時季に雪など降るはずがない。

しかし出現した場所は、一面の銀世界。

魔方陣を使った移動は一瞬で遠くまで行けるのだが、自分がどの程度の距離を移動したのかわからないのが欠点だ。

戸惑うのも当然だった。

あるいはエターナルリングから漏れ出ている魔力が、島の天候にまで干渉して、一部の地域に雪を降らしているのかもしれない。

もっともそれはカインにとって、どうでもいいことであった。

ただ探し物をするのに、この雪は邪魔になる。

魔方陣は、廃屋のなかにあった。

崩れた壁から見える外の様子からすると、ここもかつては集落だったに違いない。

「とにかく最後の鍵を探さないとな……」

寒さに耐えながら、廃屋から出てカインは雪の降り積もった道を歩き始めた。

ザクザクと音をたてて、膝近くまである雪をかき分けて進む。

「おい、あんた！」

しばらく歩いていると、廃屋のなかから声が聞こえた。

カインは注意しながら、声がした方向を見る。

すると廃屋のなかから、魔物が顔を出しているのが見えた。

全身が灰色の毛で覆われ、尻尾が生えていた。顔も擬人化された狼のように変形し、両手に

は鋭い爪が生えている。見すぼらしい短い皮のズボンを履き、胸には大きな水晶のペンダントを下げている。

　カインは相手が魔物と見て、剣を構えた。

「俺は魔物じゃない！　頼む攻撃しないでくれ！」

　魔物はカインが剣を構えたのを見ると、両手を挙げて叫んだ。

「その姿でか？」

「そうだ。姿は魔物かもしれないが、俺はまだ人間だ！」

　魔物の姿の男はそう言うと両手を挙げたまま、ゆっくりとカインに近づいてきた。その動きを見て、相手に攻撃の意思がないと判断し、カインは剣を収めた。

「ああっ、わかってくれたか。俺はこう見えても、元アルダインの兵士なんだ。知ってるだろう、アルダインを？　大陸で一番大きな国だよ」

「ああっ」

「あんた知らない国の紋章を付けてるな。まあ、あんなことがあってずいぶんと経つしな、大陸も結構、変わったんだろう？」

「俺はヘインガリアから来た。今では大陸で一番大きな国だ」

「そうか。アルダインは没落したわけだ……。仕方ないよな。あんた、ソルシアとアルダインのいざこざは知ってるんだろう？」

「この島に攻め込んだ理由も、何が起きたかも知っている」
「そうか。それなら何にも話すことはないな。俺はこんな姿になってから、ずっとここに隠れてる。少し前には、この奥に竜もいたんだ。他の竜と違って暴れたりしない、やさしい奴だった……」
カインは竜の話が出たので、男の話を遮らずに黙って聞いていた。
「俺の友達でね。本当は敵同士なんだけどよ、いつの間にかね。お互いこんな身体になってまで戦ってもしょうがないって……」
魔物の男はそう言って寂しそうに笑った。
「その竜は、今はどうしている?」
「死んじまった。ずいぶん前から、眠っている時のほうが多くなってね。つい数日前、目を覚ましたのが最後だった。寂しくなったよ」
「そうか……」
「仲間も大勢、死んでいった。こんな姿になると、だんだんとひとの心が壊れていくんだ。俺はこのペンダントのお陰で、ひとの心を失わないでいられた。おふくろにもらったお守りでね、こんな役に立つとは思わなかった……」
「その竜のところに案内してくれないか」
「何でだ？」

「俺が探している物を、その竜が持っているはずなんだ」
カインは正直に理由を話した。
「そうか、あんたが魔力強き者か？」
「なぜ、それを？」
「頼まれたんだ、竜の奴に……。こいつを魔力強き者に渡してくれと」
魔物の男は、見すぼらしいズボンのポケットから黄色く輝く鍵を取り出した。
「そうだ、それを探してたんだ」
「待ちなよ。こいつを渡してもいい。だが、その前にひとつ頼みがある」
手を伸ばしたカインから逃げるようにして、魔物の男はすがるような目でそう言った。
「頼み？　どんなことだ？」
「俺には国に、年老いたお袋がいた。あの討伐隊に志願したのも、出世してお袋に楽させてやりたかったからなんだ。しかしあれから、もう二十年も経ってしまった。たぶん、お袋はもう生きていないだろう……」
昔を思い出したのか、魔物の男の目に涙が浮かんでいた。
「あんたは、ここでやることが終われば、大陸に戻るんだろう？　その時でいいから、俺のお袋の墓に花を手向けてくれないか？　そしてお袋に、俺は静かに暮らしているって伝えてくれよ。それだけでいい、頼む！」

「わかった。必ずお前のお袋の墓を訪ねよう」
　カインは魔物の男の真剣（しんけん）な願いを聞いて、引き受けることにした。ホムンクルスとの戦いを控（ひか）えて、生き残れるとはかぎらない。だが二十年間ひとでない姿のまま島に隠れ住み、年老いた母親のことを気にしていた男が哀（あわ）れだった。
　自分が代わりに墓参（はかまい）りをすることで、この男の心が安らぐなら、引き受けてもいいとカインは思った。
「約束してくれるか？」
「ああっ、必ず行く。ところで墓は、どこにあるんだ？」
「アルダインの西の外（はず）れにあるラングリーという街（まち）だ。そこに弓（ゆみ）隊隊長ディブルの母親の墓があるに違いない。そこを訪ねてくれ、頼む」
　魔物の男はそう言うと拝（おが）むようにして、カインに鍵を手渡した。
「ちょっと待っててくれ。まだ渡したいものがあるんだ」
　カインに鍵を手渡した魔物の男は、急いで廃屋のなかへ戻っていった。
　そして、すぐに手に小さな袋を持って出てきた。
「これだ。もう俺には必要ないものだ。墓参りの礼に、受け取ってくれ」
「何だ？」
「魔物が死んだ時に残す水晶のような石だ。いつか、もとの姿に戻れたら大陸に持って帰って

金にしようと思ってたんだ。あんたが代わりに墓参りしてくれるなら、俺には必要ない。持っていってくれ」

なかを見ると、かなり大きな魔法石がいくつも入っていた。

「いいのか？」

「ああ、俺はここで静かに暮らしていく。ここじゃ、そんな石は必要ないさ」

「わかった。ありがとう」

カインは感謝して、魔法石を受けとった。これだけあればホムンクルスと戦う前に、新たな魔法の指輪をいくつか作りだせるだろう。

「あんたが何するのか知らんが、頑張れよ。じゃあ、お袋のことよろしくな」

「ああ」

魔物の男は静かに雪のなかを歩いて去っていく。

「どこに行くんだ？」

その後ろ姿があまりに寂しそうなので、カインはつい声をかけた。

「友達といるよ。ひとりのままじゃ、あいつも寂しいだろうから……」

振り返って静かにそう言うと、魔物の男は二度と振り返らずに雪のなかに消えていった。おそらく友だった黒竜の傍らで、死ぬまで暮らすつもりなのだろう。

カインも踵を返して、魔方陣から風の塔へと戻っていった。

雪はその後も降り続け、ふたりの足跡をすべて消し去っていった。

カインはようやく四つの鍵を揃えて、実験場へと戻ってきた。
ライラが消えてから、まる二日が過ぎている。
果たしてエターナルリングが壊れるまでに、彼女に追いつけるかどうかわからない。だが急げば、まだ間に合うとカインは信じていた。
穴を囲む四つの石板の鍵穴に、それぞれ対応する色の鍵を差し込んでいく。
四つの鍵すべてが石板に差し込まれると、奈落の穴のなかに石の階段が出現した。それは真っ直ぐに穴の途中に口を開けた入口へ向かっている。
迷うことなくカインは、その石段を下りて入口へ入っていった。
入口のなかは暗く、ひんやりとしていた。
しばらく進むと、その先は広い空間になっていた。奈落の穴と同じような底なしの闇が、無限に広がっている。
出口から伸びたわずかな出っ張りの先に、一枚の石板が浮かんでいた。
「これに乗るのか」
石板は魔法の仕掛けで、前に進むに違いない。カインはゆっくりと石板の上に乗って、動き出すのを待った。

石板はゆっくりと前に進んでいった。
しばらくすると後ろの入口は闇に消え、無限の闇のなかにカインひとりが浮かんでいた。
どれくらいの時間が過ぎたのか。
やがて目の前に、ぼんやりと目的地が見えてきた。
それは空中に浮かぶ忘却の祭壇だった。
石板は忘却の祭壇へ接触すると、動きを止めた。
ついにカインは、自らの足で忘却の祭壇を訪れたのだ。
カインは魔方陣を避けて、ゆっくりと英知の守りびとに近づいていった。
『よくぞ訪れた。滅びし魔法文明の血を引く者よ！　我は古の魔道師たちにより、エイルシアに残された忘れられし思念なり。忘却の祭壇に石を捧げよ、汝に最後の英知を授けよう』
「その前に聞きたいことがある。エターナルリングは、まだ大丈夫なのか？」
『これより汝が向かいし場所は、我等の手により作られた永遠の檻。その力は、すでに弱まりつつある』
「どれくらい保つ？」
『わからぬ。それはなかに封じられし神の子の意思による。神の子が自由を欲すれば、今にもエターナルリングは砕け散る』
「なんとか神の子をエターナルリングに封じたままにすることはできないのか？」

『不可能だ。力強き魔術師たちが失われた今、エターナルリングを完全に修復する力は失われた……。もはや我等の悲願は果たされぬ』

英知の守りびとは、カインに向かって無念そうに首を左右に振った。

『誠、無念なるは永遠の時間を得られぬこと。幼き神の子は、永遠の時間のなかで成長する道が残されていた。しかし永遠の時間はすでになく、ほどなくエターナルリングは時間を取り戻し、自然の摂理に従いて役目を終える……』

「永遠の時間か……」

カインは古代エイルシアの魔術師たちが目指した、途方もない考えにあきれていた。彼らはホムンクルスに永遠の時間を与えることで、成長の機会を与えたつもりなのだろう。だが、それは間違っているとカインは感じていた。

永遠の時間がある者は努力をしない。

限られた時間、限られた力しかないから、ひとびとは努力する。限りある間に、自分が望む場所に到達しようとするのだ。ただ永遠の時間があっても、自ら成長する気持ちがなければ何もならない。

『神の子は縛めを解かれ、世界は今一度滅びの危機を迎えるだろう。だが、まだ我等の前には一筋の光明が残っておる』

「それはどういうことだ？」

『時の縛めを解かれた者は、卵より孵り し雛と同じ。力取り戻す時を得なければ、その力を存分に振るえず。その間なら魔の血を受け継ぐ最後のひとりたる汝の力をもって、神の子の動き止めることも可能なり』

「つまりエターナルリングから出てすぐなら、俺でも勝てるということか?」

『その可能性は残されている。汝だけが、世界を破滅から救う力を持っているのだ』

「全部、俺次第ということか……」

カインは、自分が背負わされた使命の大きさに驚いていた。

「わかった。それでは魔法の指輪を作ろう。この先の強敵と戦える指輪は、どうやったら作れる?　どの石が魔力が強い?」

カインは持っている魔法の石を取り出して、守りびとに尋ねた。

『我がさし示す魔力強き石を祭壇に捧げよ。汝が望むものを授けよう』

英知の守りびとの指示に従って、カインは強力な魔法の指輪を作り始めた。

エターナルリングの中心部には本来、誰ひとりとして入ることはできなかった。

だが二十年前にソルシアの民がエターナルリングをこじ開けた時、それを修復する形で扉が作られていた。なぜなら監視の民たちは、すでに古の時代のような強力な魔力を扱う術を失っていたのだ。

そのため空間全体を修復することはできず、一時的に裂けた空間を封じるために扉という形をとった結界を作り上げたのだ。だがこれだけのことをするのに、監視の民の主な魔術師たちは力を使い果たして死んでしまった。せめて竜に変じたソルシアの指導者たちが無事であったなら、もっときちんとした修復を行う術もあったかもしれない。だが結果としてエターナルリングは不完全な力しか取り戻さず、ホムンクルスが力を振るう余地を残してしまった。

その中心部でライラは辛抱強く、ホムンクルスに心の大切さを説いていた。

ホムンクルスは魔力によって作られたふたつの輪のなかに封じられていた。激しく回転する輪は時間と空間を表している。本来、ふたつの輪は同じ角度で交わって、しっかりとホムンクルスを封じているはずだった。

だが不完全になったふたつの輪は常時、その軌道を変えている。ふたつの輪が接する角度が小さくなる時がホムンクルスを封じている力が弱まる時だ。

ふたつの輪の動きはだんだんと遅くなってきていて、やがて停止すればホムンクルスを封じる力を失う。

そうなる前にライラは、何とかホムンクルスに心を理解させようと必死だった。

〈何度、同じ話を聞いてもわからないことは、わからないよ〉

リングのなかに封じられているホムンクルスは、同じ話を何度も聞かされて不機嫌そうだっ

た。リングが作りだす空間のなかに封じられたホムンクルスの姿は、まさしく赤ん坊だった。しかし見かけは無防備な赤子のように見えるが、その内部には無限の魔力を秘めている。一度自由になれば、大陸を一晩で破壊できるほどの力を持っている。

〈そんな退屈な話は、また明日にしてさ。他の話をしてよ、海鳥の雛の様子とか〉

「駄目よ、今日はわかるまで聞きなさい、いい？」

ライラはホムンクルスの目を見て、真剣な顔で話を続けた。

「海鳥の雛だって、傷つけたら死んでいなくなってしまう。それは悲しいでしょう？」

〈そうだけど。海鳥はたくさんあるから、雛の代わりもたくさんあるよ〉

「でも、それは違う雛でしょう？」

〈ライラの言いたいことはわかるよ。でも、それがどうだっていうのさ？　代わりがあるなら問題ないじゃん〉

「そうじゃないの、ひとにも雛にも代わりはないのよ」

ライラは何とかして誰にも命はひとつしかなく、かけがえがないことを教えようとホムンクルスに語りかけた。

「心があれば、それがわかるわ」

〈ふーん。でも、心なんて必要ないよ〉

ホムンクルスは、ライラの言葉にはまったく興味を覚えなかった。彼にとって他者の命など、

まったく意味のないものなのだ。まして、それを思いやる心などホムンクルスにとって無用の長物でしかない。
〈そんなものがあっても、ライラや他の人間みたいに不安定になっちゃうだけだよ〉
ホムンクルスから見れば、ライラや他の人間は不安定だ。いつも同じじゃないし、何かあると感情に負けて訳のわからない行動をしたりする。
それが心のせいだとするならないほうが余程いい。何より能率的だ。
「そうじゃないわ。心があれば、いろいろなことを感じることができる。楽しいことも悲しいことも、それは素晴らしいことなのよ」
〈そうかな？　あれ？〉
「どうしたの？」
〈誰かここに入ってきたみたいだ〉
ホムンクルスはエターナルリングの空間のなかに動くものを見つけて、ライラに知らせた。
このなかに入ってくるのは、今までライラしかいなかった。
別の存在が、ここを訪れるのは二十年ぶりである。
また少し、遊べるかもしれない。
ホムンクルスは侵入者が、ここに来るのが楽しみだった。
「えっ？　もしかして、あのひとかな？」

ホムンクルスの言葉を聞いて、ライラの脳裏にカインの姿が浮かぶ。あのひとなら、ここまでやってくることもできるだろう。あるいはふたり揃ってなら、この子に心の大切さを理解させることができるかもしれない。

「いい？　私はちょっと見てくるけど、そこから出ようとしちゃ駄目だからね。何かすれば揺れるから、すぐにわかるよ」

〈えーっ！〉

ホムンクルスは、じっとしているようライラに言われて不満顔だった。せっかく退屈凌ぎの相手が来たのに、何もしないでいるなんて冗談ではない。

だがここは少し我慢してみるのも、ライラの話を聞くのに有効な手段であることをホムンクルスはわかっていた。

〈じゃあさ。じっとしてたら、すぐ雛の話をしてくれる？〉

ホムンクルスは、ライラに交換条件を出した。今日は命とか心とかの話ばかりで、雛の様子を話してもらっていない。

「そうね」

ライラはしばらく考えた。ここで駄目だと言えば、ホムンクルスは駄々をこねて無茶をしかねない。ここは相手の機嫌を取っておくべきだと考えた。

「いいわよ。だから、おとなしくしていてね」

〈うん〉

ホムンクルスは、自分の願いが聞き届けられて嬉しかった。いつもこんなふうにライラが自分の言うことを聞いてくれればいいのに。

〈すぐに戻ってきてねライラ。ここは何もないから退屈だよ〉

「ええっ、待っててね」

ライラはホムンクルスにやさしく声をかけると、中心部の扉を開けて外に出た。

カインは、真っ暗な空間のなかに続く石の道を歩いていた。

エターナルリングまでの空間も、魔法によって作られた擬似空間である。

これは本来は存在しない空間なのだ。英知の守りびとによれば、魔力によって時間と空間の狭間を広げて作り上げたものであるという。あり得ない空間で包み込むことによって、エターナルリングは時間と空間を封じることが可能になったのだ。

これを作りだすために、古代エイルシアの魔術師たちの七割が力を使い果たして死んだという。だがそうして作り上げた擬似空間も、ホムンクルスが縛めを解けば崩れさってしまう。

そうなった場合、なかにいた者は空間とともに消滅してしまう。だから英知の守りびとは、カインがホムンクルスを倒せた場合には、なるべく早く脱出しろと告げていた。

だがこうして歩いてみると、転送の魔方陣がある場所からエターナルリングまでは、かなり

長い道のりである。
守りびとから聞いた話では四重の扉が、エターナルリングの中心までの空間を守っているという。
つまり四つの扉を開けなければ、中心にはたどり着けないのだ。
「早くライラに追いつかないと……」
カインは先にエターナルリングに行っているライラが心配だった。
自然と歩みは小走りになっていく。
全身が少し汗（あせ）ばんできたころ、ようやくカインの前に最初の扉が見えてきた。

エターナルリングのある中心部はふたつの扉で守られている。
どちらの扉も魔力を使えない者には開けることができない。
つまりエイルシアかソルシアの血を引くもの以外、なかに入ることはできないのである。
「あら、変だわ？」
ライラはホムンクルスの部屋へ通じるふたつ目の扉の前で、周囲を見渡して首を傾（かし）げた。
「なかに入って来たのは、カインじゃないのかしら？」
もし侵入者がカインなら、普通に岩の道を歩いてくるはずだった。忘却の祭壇から、ここまでは一本道である。

迷いようがないのだ。
だが岩の道には人影がない。
エターナルリングのなかに出入りできる人物は限られている。
最後の管理者たる自分を除けば、正当な四つの鍵を持った者以外は入れないはずだ。
カインは確か、すでにふたつの鍵を持っていた。ならば残りふたつの鍵を見つけて、エターナルリングのなかに入ってきてもおかしくはない。
ライラは扉を開けたまま、カインの姿が見えないか捜していた。
その時、頭上から黒い影がライラに襲いかかった。
バサバササバサ！
凄まじい翼のはばたきとともに、頭上から黒い影が落ちてきた。
「あっ！」
よける暇もなく、ライラはダレルの手に首をつかまれてしまった。
「うっ！」
「リング……ドコダ！」
ダレルはライラの首をつかんで、つるし上げると振り回した。
「かっ、くうっ！」
ライラは息ができず、苦しそうな顔でうめく。だがダレルはそんなことを気にもせず、ライ

ラを振り回し続けた。
「イエ……リング……ドコダ！」
「あっ、ああっ！」
もがき苦しむライラの手が、偶然にも扉をさし示す。
「ソコカ！」
ダレルは扉を見ると、つかんでいたライラをゴミのように地面に叩きつける。
ライラは凄まじい力で石に叩きつけられ、力なく倒れ伏した。
「リング……オレノ……モノダ！」
ダレルは扉を抜けて、エターナルリングへ向かっていった。

数分後、カインはようやく三枚目の扉が見えるところまでやってきていた。
「あれが三枚目の扉だな」
一刻も早くライラと合流するため、カインは走りだしていた。
だが第三の扉が近づいてくるのと同時に、その前に倒れている人物がいるのが見えた。
「ライラ！」
倒れている人物がライラだと確認したカインは、急いで彼女のもとに駆け寄った。
「しっかりしろライラ！」

カインは倒れているライラを抱き起こす。だがその傷の酷さに、カインは絶句した。おそらく力任せに地面に叩きつけられたのだろう、手足や身体のあちらこちらの骨が何か所も折れてしまっている。

何より後頭部に受けた傷がひどく、カインが抱き起こすと彼の手はライラから流れた血で真っ赤に染まった。

「まだ、だめ……」

「ライラ、大丈夫か？」

カインに抱き起こされたライラは、小さな声でうわ言を漏らす。

「あの子は……まだ……」

「喋るな！　今、手当てするから」

「これから……教えなきゃ……いけないことが……」

そこまで喋ると、ライラの身体から力が抜けていった。

「オイ、ライラ！　ライラ！」

ライラの名を呼びながらカインは、彼女の身体を揺さぶった。

だがライラはそれに応えることはなく、二度と動くことはなかった。

「ライラ……」

妹の亡骸を抱きしめて、カインは静かに涙を流した。



妹の亡骸を抱きしめて、カインは静かに涙を流した。

妹を失った悲しみと、彼女を守れなかった自分の不甲斐なさが心のなかで激しい怒りの渦を作りだしている。
「ライラ。最後まで言えなかったけど、俺たちは兄妹だったんだ」
カインはライラを抱きしめたまま、その耳にそっと囁いた。
「こんな島でひとりで寂しかったろう。やっと会えたのに、何もできなくてすまん。そうだ。大陸の話もしてやれなかったな……」
見たこともない大陸の話を聞きたがったライラ。
そんな簡単な願いひとつ、叶えてやることができなかった。
涙が止まらなかった。
あまりにも悲しかったから。
だが、その悲しみに沈んでいる時間はない。
今も刻々とエターナルリングは力を失い、またライラを殺した奴はエターナルリングを求めて最後の扉を破壊しようとしているのだ。
カインはライラをそっと横たえると、衣服の乱れを直してやった。そして顔についた血を、綺麗な布で拭ってやる。
今カインにできるのは、その程度のことしかない。
「また、あとでな……」

そう言って、そっとライラの頬に触れてからカインは立ち上がった。

「リング！　リング！　リング！」

ダレルは開かない第四の扉へ、拳を叩きつけていた。あと一枚、この扉を破壊すればエターナルリングが手に入る。

今のダレルの心には、それしかなかった。

ひとである心は微塵に砕かれ、もはや醜い欲望だけがダレルを突き動かしていた。

「ウォォォッ！」

怒りに任せて扉を叩いた瞬間、ダレルは自分が入ってきた扉が再び開くのを感じた。

「ジャマモノ！」

ダレルは振り返ると、その扉から入ってくるカインを睨みつけた。

その姿には見覚えがある。

こいつは人間だった頃から、ダレルの野望を阻止しようとする邪魔者だ。

「オマエ！　シネ！」

ダレルはそう叫ぶと、カインに向かって襲いかかった。

3

カインは妙に落ちついていた。
いや実際には落ちついていたのではない。
ひとつの感情が高ぶりすぎて、他のことを感じることができないでいたのだ。
それが証拠に、彼は魔法が使える状態ではなかった。
指輪に意識を集中することができず、頭のなかはダレルに対する怒りでいっぱいだった。
怒りに我を忘れ、ただ幼い頃から習い覚えた剣で憎い仇を倒すことしか考えていない。
剣がダレルに通用するかどうかなど、今のカインにはどうでもよかった。
ハンティングソードを構えたカインは、ダレルの左側に回り込む。
人間だったダレルは右利きだった。
相手の利き腕の反対側に回り込むのは、戦闘のセオリーだ。
ダレルは翼をはためかせて、カインへと迫ってくる。
見るとダレルの足はよじれてひとつになり、まるで蛇のようになっていた。これでは普通に

歩くことはもはやできない。ダレルは翼のはばたきで上半身を支え、ひとつになった足を蛇のようにくねらせて移動している。
両腕は以前に見た時より太くなり、顔は前に大きく迫り出し、犬か狼のような獣の頭のようになっていた。皮膚も人間のものというより、爬虫類や魚のような鱗を持った硬い表皮のようになっている。
もはや実の父親であるハーランが見ても、それがダレルであるとは思わないだろう。
ズリズリと近づいてくるダレルは、ある程度の距離になると魔法を放ってきた。
地をすべるように風の刃がカインに迫る。
だがカインは慌てずに風の軌道を予測して、素早くそれをよけた。
しばらくの間、互いに間合いを保ったまま相手の出方を探り合う。
(奴は基本的に魔法に頼っている)
カインがある一定の距離に接近すると、ダレルは魔法を放って牽制してきた。動きを見ていると、どうやらダレルは後方に回り込まれることを恐れているようだ。
蛇のようになった足と巨大な翼が、ダレルの背後に大きな死角を作りだしている。
思い切ってカインは、ダレルとの間合いを詰めて背後に回り込んだ。
身体の移動を翼のはばたきの力に頼っているダレルは、急激に横方向へ動いたカインに追いつけないでいた。

「いやぁ!!」
気合とともに、カインはダレルの背中にハンティングソードを突き刺した。
「ぐあああっ！」
痛みを感じたダレルは、ひとしきり大きく翼をはためかせて大きく身体を前進させた。その動きに突き刺さったハンティングソードを持っていかれそうになるが、カインは踏ん張って無理やりソードを引き抜いた。
「オノレ！」
痛みで怒り狂ったダレルは、無理やり方向転換するとカインへ詰め寄った。
態勢を崩していたカインは、そのままハンティングソードを突き出した。
ソードは吸い込まれるように、ダレルの胸に突き刺さる。
「グオオッ！」
深々と突き刺さったソードに、ダレルは悲鳴をあげた。
「うおおおっ！」
カインは一気にダレルに止めを刺すべく、渾身の力を込めてハンティングソードを胸に深く突き刺していった。
ズズッ。
音をたててハンティングソードは、ダレルの胸のなかに沈んでいく。

「グアアアッ！」
鋭い痛みを感じて、ダレルは両手でハンティングソードをつかんでよじる。
「くっ！」
バキッと音をたてて、ハンティングソードは刀身の半ばから折れてしまった。やはり二十数年間、放置されていたために剣が傷んでいたのかもしれない。あるいはダレルが、想像以上の怪力を持っているかだ。
剣を折られてカインは、手にしていた握りの部分を捨てて退いた。
武器がなくなった以上、接近戦をするのは無謀すぎる。
（落ちつけカイン！）
武器を失ってようやく、カインは冷静さを取り戻した。
同時にライラを失った悲しみで、我を失っていたことを恥じた。どんな時にも冷静に戦える訓練を自分では積んできたつもりだった。だが妹の死に動揺して、カインは無理やりにダレルと剣で戦っていた。
これは冷静な戦士のすることではない。
（未熟だな……）
カインは心を落ちつけて、魔法の指輪に意識を集中する。
すると脳裏に文様が浮かび上がってくる。

（剣がない以上、あとは魔法で戦うしかない）
心を落ちつけて、カインはどのように戦うべきかを考えた。
今のところ一番、威力が大きい魔法はボンバーである。
ダレルの動きはさほど速くなく、十分に狙えばボンバーの直撃を喰らわせることができるだろう。
カインは側面に回り込みながら、ボンバーを放った。
ダレルはその時、胸に突き刺さったハンティングソードの折れた部分を抜き取っていた。刀身を抜くと、赤黒い血のようなものが胸から吹き出した。
「ぐあああっ！」
痛みに怒り狂いながら、ダレルは横に回り込んだカインを睨みつけた。
その瞬間、炎の矢が唸りをあげてダレルに向かってきた。
ドンドンドンという、高熱で熱せられた空気の爆発音とともにボンバーはダレルに迫っていく。
「グオオオッ！」
だがダレルは、唸り声とともに振り上げた右手でボンバーを弾き飛ばした。右手はボンバーの熱で焼けただれたが、炎の矢は弾かれてあらぬ方向へと飛んでいってしまった。
「そんな馬鹿な！」

魔法を手で払いのけられるなど、カインは想像もしていなかった。

「グウウッ……ユルサン！」

怒りに燃えるダレルは、歯を剥き出しにしてカインへ迫ってきた。もはやその手で、カインを握りつぶさないと気がすまないようだ。

「くそっ！」

迫ってくるダレルの腕をよけながら、カインはもうひとつの指輪に意識を集中させた。

フラッシュの魔法の文様が頭のなかに描かれ、カインはそれを発動させた。

眩い光の玉が、ダレルとカインの間に出現した。

「ヌウッ！」

ダレルは光の玉が危険なものだと感じて、両手で顔をガードした。同時に翼を閉じて、身体を保護するように巻き付ける。

光の玉は弾けると、無数の光の矢となってダレルを襲った。

だが渾身の力で堪えるダレルの身体に、光の矢は弾かれてしまった。

「そんな、フラッシュまで！」

光の属性魔法は、他の属性よりはるかに強力なものだ。それを防ぐダレルの力は、カインの想像を超えている。

ダレルの力の秘密は、彼の体内にため込んだ魔力にあった。軍人として強固な身体を持つダ

レルは、他のものより多くの魔力を体内にため込むことができた。さらにダレルは本能的に、同じ属性の魔力を体内にため込んでいた。
今、ダレルの身体のなかには闇の魔力が満ちている。光に相反する闇の魔力が強いため、フラッシュすら弾き返したのだ。
しかし、そのことをカインは知らない。
「くそっ、どうしたらいいんだ？」
考えている間にも、ダレルはカインめがけて迫ってきた。
いかにカインでも、そう長くはこの攻撃をよけ続けることはできない。
今自分が身につけている魔法の指輪は、ダレルに対してあまり有効ではない。
つまり別の魔法でしか、ダレルを倒すことはできないのだ。
となれば方法はひとつしかない。
ホムンクルス用に温存しておくつもりだった指輪を使うしかない。
カインは左手の皮の小手を外すと、次々とはめている指輪を外した。
そしてたったひとつ、新たに作り上げた指輪をはめる。
英知の守りびとは、この指輪は使わないほうがいいと助言していた。
なぜなら、あまりに多くの魔力を消費するためだ。
もしカインが自分の持っている魔力以上の魔力を使おうとした場合、普通なら魔法が使えな

いだけだ。だがこの指輪は発動させようとした時に、無理やりにでも必要な魔力を装備している者から奪い取っていく。

その魔力の量が多ければ、カインは命を失ってしまう。エターナルリングの修復の時も、同じようにして多くの魔道師が命を落とした。

強力な魔法は、時に使用者の命を奪ってしまうのだ。

だから英知の守りびとは、使うにしても一度だけにしろと言っていた。

このあとのことを考えるなら、この指輪は温存しておきたい。だがダレルに勝てなければ、ホムンクルスと戦うこともできないのだ。

カインは心を落ちつけて、指輪の文様が描き終わるのを待った。

同時にポケットに入れておいた魔力の結晶から、魔力を補給する。自分の許容量以上の魔力を蓄えることはできないが、さっき使った魔法で消費した魔力は補給できる。

どれだけ魔力を使うのかわからない魔法を使うのだ。ほんのわずかでも魔力を補充しておきたかった。

ダレルは逃げ回っているカインを追いかけている間に、少し冷静さを取り戻した。いつまでもやみくもにつかみかかっていては、敵を捕らえることはできない。

カインとの間合いを測りながら、ダレルはチャンスを待った。

そしてこの瞬間こそ、カインが待ち望んだものだった。

「これでも喰らえ！」
そう叫ぶとカインは、魔法を発動させた。
次の瞬間、光の檻がダレルを包み込んだ。
「ウオオオッ！」
檻はダレルを完全に包み込み、その動きを封じた。
そして別の光が、檻の頭上でひとつに集まり始めた。
「グアアアッ！」
ダレルはなんとかして、自分を縛めている光の檻を破壊しようとするが、それはびくともしない。
やがて頭上に集まった光は、真っ白に輝く竜の姿となった。
カインが使ったのはホワイトドラゴンの召還。魔力を凝縮し、一時的に竜を作りだす魔法であった。
白い竜は頭上からダレルに襲いかかった。
光の檻は白い竜とひとつとなり、ダレルをズタズタにしていく。
「オオオオッ！」
光の魔力は、ダレルの身体を完全に焼き尽くした。
やがて白い竜とともに、ダレルも消滅していった。

と同時に、カインは力を出し尽くして倒れた。
「危なかった……」
ホワイトドラゴンの魔法は、カインの魔力をほぼ根こそぎ持っていった。
今、カインが生きていられるのは、ダレルの死によって放出された魔力が身体に戻ってきたからだ。もし相手が十分な魔力を持っていなかったらカインは死んでいただろう。
カインは呼吸を整えると、ゆっくりと立ち上がった。
「まだホムンクルスがいるな……」
もう一度、ホワイトドラゴンの魔法を使って生き残れる自信はない。だがホムンクルスを野放しにすれば、敬愛するイアン王も危険になる。
祖国のために、命を捨てる覚悟はすでにできている。
カインは最後の戦いを始めるために、最後の扉を開けた。

最後の扉を開けると、そこにホムンクルスが封じられていた。
彼を封じるふたつのリングは、ゆっくりと回転している。ホムンクルスはそれが作りだす力場のなかに閉じ込められていた。
その空間の周囲では、強大な魔力が渦を巻いている。
〈あっ、お前！〉

　ホムンクルスは部屋のなかに入ってきたカインを見ると、大きな声で叫んだ。
〈僕は見てたぞ、ライラに何をした！　お前と話していたら動かなくなった！〉
「わからないのか？」
〈何でだ！　ライラは、どうなったんだ！〉
　カインはわめき散らすホムンクルスを見て、本当に相手が死を理解できないことを知った。
生と死の違いが、まったくわからないのだ。
〈なんとか言え！　ちっくしょう！　ここから出せ！〉
　ホムンクルスは怒りに任せて、自分の力を解放した。
　凄まじい魔力が、内側からエターナルリングを押し開こうとする。
〈があああああっ！〉
　エターナルリングの魔力が、押し開こうとするホムンクルスの魔力に対抗しようと輝きを増していた。
　だが完全に修復されていないエターナルリングは、内部から発する力に負けて徐々に力を失っていった。
　複雑な光が紡がれてでき上がっていたふたつの輪は、今や力に引き延ばされて千切れる寸前だった。
〈邪魔だーっ！〉

ホムンクルスの叫び声とともに、エターナルリングは砕け散った。
ついに作られし神の子は、自由になったのだ。

カインは、ホムンクルスに敵わぬまでも戦うと決めていた。
それが祖国へインガリアを救う唯一の方法なのだ。
意識を集中し、ホムンクルスに向けて魔法を放つ準備をする。
〈ライラ……〉
だがホムンクルスは目の前のカインなど気にもかけずに、ライラの倒れているところに飛んでいく。
〈ねえ、ライラ。いつまで倒れているの?〉
倒れているライラの頰にそっと触れて、ホムンクルスは静かに語りかけた。
〈僕、勝手に出ちゃったけど、雛の話はしてくれるよね〉
ライラを微かに揺らしながら、ホムンクルスは話し続けた。
〈そうか、もう外にいるんだから一緒に見にいこうよ〉
自分が自由になったことを思い出し、ホムンクルスはライラに一緒に海鳥の雛を見にいくようにせがんだ。
〈もしかして、怒ってる?〉

いつまでも自分の言葉に応えてくれないライラが、怒っているのではないかと思いホムンクルスは恐る恐る尋ねた。確かに勝手にエターナルリングを壊して、外に出てしまった。それをライラは怒っているのかもしれない。

ライラは怒ると、何も話してくれないことがあった。

〈ライラ。外に出たのは謝るよ、許してよ。ねえ、ライラ……〉

死んでしまったライラに、必死に謝っているホムンクルスはまったく無防備だった。

カインは背後から、ホムンクルスに魔法を放とうとした。

（奴を倒すのは今しかない！）

——あの子は幼いだけ——

ふと脳裏にライラの言葉が蘇ってきた。

——ちゃんと教えれば、きっと正しい心を持つわ——

彼女が笑顔で、そう言っていたことが思い出される。

（くっ、そんなことは不可能だ。心ない者は倒すしかないんだ！）

水竜が言っていたとおり、心ない者に心を芽生えさせることはできないのだ。

そう信じてカインは魔法を放とうとした。

だがホムンクルスを見るのと同時に、横たわっているライラの顔が目に入る。その死に顔は、カインに何かを訴えているようであった。

〈わかったよ……ライラ〉

一度も願いを叶えてやれなかった妹が、死の間際まで気にしていたことを成すべく、カインはゆっくりとホムンクルスに近づいていった。

〈ねえ、ライラ。雛を見にいこう〉

「もうライラは起きない」

〈なんでだ！　そんなことがあるか！〉

　カインの言葉を聞いて、ホムンクルスはカインを見上げて怒鳴った。

「ライラは死んでしまったんだ」

〈ライラが死んだ？　なんで？　だって命なんか、いくらでもあるのに！〉

「そうだ。命はいくつもある。だけど海鳥も魚も、人間もひとつしか命を持っていない。それを失ってしまえば、死んでしまうんだ」

〈そんな海鳥だって、雛だって、人間だって、たくさん代わりがいるのに！〉

　ホムンクルスは信じられないというように叫んだ。

「そうだ。だけどライラはひとりしかいない……。その命もひとつしかない」

〈えっ！〉

「ライラに代わりはいない。ひとりだけなんだ……」

〈あっ！〉

今ホムンクルスのなかで、ライラが与えたやさしさ、知識、すべてのものがひとつとなろうとしていた。
雛鳥は死んでしまえばいなくなってしまう。
でも海鳥も雛鳥もたくさんいる。
だけど命は、ひとつずつしかない。
命は、どれひとつとして同じものはない。
だからひとつの命が消えるというのは、とても悲しいことなのだ。
ライラが与えたものがひとつとなり、今ホムンクルスのなかに心を作りだしていた。
今ならやさしさも、怒りも、悲しみも理解できる。
〈あっ、あっ、あああああっ！〉
慟哭しながらホムンクルスは成長していた。
幼児の姿から子供になり、そして青年の姿に変わっていく。
芽生えた心が、ホムンクルスを一気に成長させたのだ。
『そうか、ライラは死んでしまった。そして今、僕の心にあるのが悲しみ。そして目から流れ出ているのが……』
「涙だ」
そう言うカインの目からも、涙が流れていた。妹が求めてやまなかったことが成された。そ

れなのに一番、それを楽しみにしていたライラはもういない。カインの言葉を聞いて、ホムンクルスは頷いた。
『あなたもライラが死んでしまって、悲しいのですか？』
「そうだ。とても悲しい」
その時、周囲の空間が激しく振動を始めた。
『ここはもう消えてしまう。さあ、ライラと一緒に時間のある場所に戻りましょう』
「だが、ここから出口は遠い」
『今の僕なら、ここから外に出られます。さあ肩に触れて』
ホムンクルスはライラの亡骸を抱き上げると、カインに自分の肩に触れるように言った。
そしてカインが肩に触れた瞬間、三人の姿はそこから瞬時にして消えてしまった。

数週間後。
ヘインガリアの王宮では定例の議会が開かれていた。
大会議室にはイアン王と親衛隊隊長のグリアム、それに長老たちと議会の主だった大臣たちが揃っている。
「長老ハーラン！」
イアン王は玉座から、ハーランに語りかけた。

「余から、尋ねたきことがある」
「どのようなことでしょうか？」
公の議会では、さすがのハーランも王に敬意を表していた。いかに権力の実権を握っているといっても、公の場で王を蔑ろにする勇気はないようだ。
「不帰の島への調査部隊は、どのようにしておる？」
すでに不帰の島へ調査部隊が発ってから三か月が過ぎている。予定ではもう帰還しているはずだった。
「はっ、遺跡の調査は順調に進んでいるようであります。ですが予想より調べることが多いので、今暫く時間が必要になるとのこと。あとひと月もすれば調査を終えて、帰還してくるはずです」
ハーランは王に尋ねられて、虚偽の報告をした。実際のところは調査部隊とは連絡が取れず、予定している報告もされていない。だがここで調査部隊が行方不明となれば、無理やりに派遣したハーランが責任を問われてしまう。
自分の責任を肩代わりする身代わりを用意するまで、何としても調査部隊の音信不通は秘密にしておかなければならない。
「ほう、調査部隊の仕事は順調だと申すのだな？」
「はい」

「なるほどな」
イアンは一応、ハーランの言葉に納得したように頷いた。
「ハーラン。よもや余に、虚偽を申しておるようなことはないな？」
イアンはハーランに、念を押すように尋ねた。
「王はわたくしが、嘘偽りを申しておると仰るのですか？」
ここは強く出るべきだと考えたハーランは、激昂したふりをした。
「いやいや。そちから、しっかりした言葉を聞きたいがため尋ねたまで。今申した言葉、間違いないな？」
「もちろんでございます」
ハーランはそう言って、力強く頷いた。
「うむ、わかった。カイン、これへ！」
イアンは自分の控室で待っているカインへ声をかけた。
王の言葉を受けて、カインは王の控室へ通じる扉を開けて大会議室へと入ってきた。
その姿を見て、ハーランの顔色はみるみる青くなっていく。
「ハーラン、カインを知っておろうな？」
「はっ、はあっ」
「カインには余の親書を持って、不帰の島の調査部隊まで行ってもらった。そのカインの報告

と、そちの言葉は食い違っておる。なぜだ？」
王の言葉を受けて、議会の面々はざわめいた。いかに長老であろうとも公の議会で、王に虚偽の報告を行うことは許されない。
ハーランは自分が、一気にまずい立場に追い込まれているのがわかった。どれだけ権力を持っていても、十分な根回しなしに王を蔑ろにはできない。
長老派の他の三人も、動揺していた。
こんなことがないようにヘインガリアに通じる関所のすべてには、カインが現れた場合に数日間足止めするように命じてあったはずなのだ。
もっともカインのほうも、長老派が何らかの妨害をすることはわかっていた。だからホムンクルスの魔力の助けを借りて、姿を変えて帰ってきたのだ。
魔法の力で商人の恰好をしたカインを、関所の役人が素通りさせたのは言うまでもない。
「カイン。余に報告したことを、ここでもう一度述べよ」
「はっ。不帰の島への調査部隊は事故により壊滅。ダレル隊長も死亡。原因は、無謀な探索によるものです。すべては長老ハーラン殿の命令により行われたとのことです」
「馬鹿な！　そんなことはない！」
「ハーラン！」
イアン王は、立ち上がってわめいているハーランを一喝した。

「そちは、余の派遣した者の言葉を疑うのか？」
「いや、しかし！　これは……」
「そちは先ほど、報告に嘘偽りはないと申したな。いいだろう、ひと月待とうではないか？　さすれば、そちの言うとおりに調査部隊は帰ってくるのだろうな？」
「うっ……」
王に問い詰められて、ハーランは返す言葉がなかった。
「ハーラン。ことの次第がハッキリするまで謹慎しておれ！」
「はっ……」
真っ青な顔のハーランは、衛兵に付き添われて大会議場から連れ出されていった。
「では閣議に入るとしよう」
イアンは凛とした声で、ざわめく臣下たちを鎮め閣議を再開させた。

ハーランの不在は、長老派たちを動揺させた。
四人の長老たちの実権は、すべてが同じというわけではない。長老派のなかでも権力争いがあり、そのトップに立っていたのがハーランだった。
そのトップが、王に対する虚言により謹慎させられたのである。
残る三人は、互いに自分の権力を増やそうと暗躍した。

これこそイアンが待っていたことだ。

十分に網を張って、イアンは次々と長老たちの陰謀を暴きだしていった。

王自らに陰謀を暴かれた長老たちは、次々と失脚した。

謹慎させられているハーランは、黙ってこれを見ているしかなかった。なぜなら彼を監視していたのは王直属の親衛隊で、彼の権力の及ばぬ者たちだったのだ。

一か月後、王の派遣した調査隊により、カインの報告が正しいことが実証された。

これによりハーランは、ダレル騎士団長を死亡させた責任をとって議会から引退することとなった。

こうして王は、長老たちから実権を取り戻したのである。

「カイン、実によくやってくれた。お陰で余は、自分が考えるとおりに近隣諸国と和平の道を歩める。これからも余の力となってくれ」

春も近づいたある日、イアンはグリアムとカインを庭園に招いて今回の労をねぎらっていた。

「もったいないお言葉です」

「そうだ、褒美を遣わそう。何か望みはないか？」

「褒美ですか？」

「うむ、できるかぎりのことをしよう。申してみよ」

「ではひとつお願いがあります」
「何だ？」
「数年の間、暇をいただきたく思います」
「暇となど？」
「はい」
イアン王は、カインの瞳をじっと見つめていた。
「何を馬鹿な！　お前は自分が言っていることがわかっているのか！」
グリアムはカインの言葉が信じられず、思わず怒鳴り声をあげた。イアンは、それを片手を挙げて止めた。
「わかった、カイン。望みどおり暇を出そう。だがひとつ、約束してくれぬか？」
「何でしょうか？」
「お前がやるべきことが終わったら、必ず余のもとに戻ってきてくれるな？」
「もちろんです」
「よし。ならば今よりお前は自由だ。どこへなりと行くがよい」
「はい。では失礼します」
カインはそう言うと、王と養父に一礼してその場を去った。
「王よ、よろしいのですか？」

「よい。不帰の島で何があったのかわからぬが、カインの目には深い悲しみがある。その悲しみから立ち直る時間がいるのだろう」

イアンはカインの瞳から、不帰の島で何かあったことを察していた。だが尋ねなかったのは、その悲しみがあまりに深いことがわかっていたからだ。尋ね知ったところで、カインの心を癒すことはできない。

だからこそカインが、望むものを与えたのだ。

「息子はソルシアの生まれですからな。何か過去のことを知ったのかもしれません」

「ふふっ、グリアム。心配するな。カインは、ちゃんと戻ってくる」

「それは心配しておりません」

「ほう。そうか？」

「はい。カインは私の自慢の息子でございますから」

「そうであったな、ははははっ！」

王とグリアムの笑い声が庭園のなかに響いていた。

エピローグ

王より暇をもらったカインは、不帰の島に戻っていた。

今ホムンクルスはこの島で、己の魔力の使い道を学んでいる。バランスを大きく崩した島の姿を慎重に修復して、自然と調和させようとしていた。

今ではもう溢れ出る魔力により生物が魔物化することもない。

残念なことに魔物となった多くの者たちは、元の姿に戻すことはできなかった。

一度竜や魔物の身体になってしまうと、再び人間の身体に戻すことはできないのだ。無理に戻そうとすると、身体が変化に耐えられず死んでしまう。

島に溢れ出る魔力がなくなった今、魔物たちはだんだんと動きが鈍くなり、やがて消えていく運命だという。

ホムンクルスは島に残っていたエイルシアの英知を、すべて吸収していた。膨大な書物を蓄えていた図書館の蔵書もすでに、残らず読破してしまっている。また魔法に関しても、忘却の祭壇に宿る英知の守りびとより必要な知識はすべて学んでいた。

残るは、知識を実践し経験を得ることだけだった。
あと数年あればホムンクルスは、自然のバランスを崩すことなく、自在に魔力を使いこなすことができるようになる。そうしてライラから学んだように、すべての命を大切にして、ひとびとを助けるために自分の力を使うつもりだった。
そのホムンクルスがただひとつ、ライラの教えを破って、自然を無視したことがある。
ライラが眠る塚の周囲は、季節に関係なく常に花で囲まれていた。
それは失ってしまったかけがえのないひとに対する、ホムンクルスのささやかな贈り物だった。

後の伝説はヘインガリアの物語を、こう伝えている。
長老派の陰謀を暴いたあとに姿を消したカイン・モーガンは、数年後にひとりの男を伴ってヘインガリアに帰還したという。
帰還を歓迎したイアンはカインを親衛隊長の座につけると、彼の勧めにしたがって、その男を家臣に迎え入れた。
カインとともに、その男は王によく仕えた。
男の英知は素晴らしかった。
武力を伴わない大陸の統一をヘインガリアが成し遂げたのも男の功績である。

そしてカインは常に王とあり、あらゆる危機から王を守った。

ふたりの働きによりイアンは、希代の名君として後世に名を残したと言っていい。

イアンの没後、男はヘインガリアを去ったという。

その姿は数十年を経ても、何ひとつ変わっていなかったという。

男がその後、どこで何をしたのか詳しいことは伝わっていない。

だが疫病や飢饉、戦乱が起きそうになると、どこからか現れる永遠の男の伝説は大陸に広く伝わっていた。

そして永遠の男の姿の描写は、ヘインガリアにいた男と酷似していたという。

あとがき

どうも、電撃文庫は久しぶりの竹内(たけうち)です。
この『エターナルリング』のノベライズ、楽しんでいただけたでしょうか？
実はこの小説、一か所だけゲームの内容と大きく異なる部分があります。
風の塔で戦う竜はゲームのなかでは風の竜なんですが、小説のなかでは闇の竜に変えています。小説的にそうすると面白くなると思い、恐る恐るフロム・ソフトウェアさんにお願いしたら、「面白いからいいです」と快諾していただきました。
ありがとうございます。

この本が出る頃は、梅雨(つゆ)の真っ最中なんでしょうね。
ジメジメして蒸し暑い季節はどうも苦手です。
でも梅雨が過ぎないと夏がこないのが日本の季節の決まり？　なので、仕方ないですね。
さて夏というと、やはり冷し中華ですね。

いいですね冷し中華、夏限定のスペシャルメニュー。
暑くなると三日に一度は、冷し中華を食べております。
五月末頃から、そろそろ冷し中華を始めている店も多くなってきました。
嬉しいかぎりです。
さらに夏になると趣味のダイビングの季節。
ダイビングに行った場所で、美味しい冷し中華に出合えたりすると最高です。
でも残念なことにダイビングスポットの近くって、あんまり美味しいお店がなかったりするんだよね。
むう、どこかに冷し中華の美味しい店のあるダイビングスポットはないのだろうか？
何か良い情報を知っていたら教えてくださいね。
まあくだらない話は、これぐらいにしておきましょう。
それではまた、別の作品でお会いしましょう。

平成十二年五月二十六日　竹内　誠

解説

誤解を承知の上で言いますと、実際のところ私は、ゲームというものの中においてストーリーにさほど重きをおかない人間なのです（いいかげんにやってるわけじゃないですよ）。

もちろんそのゲームの性格によるとは思いますが、ストーリーというものは、ゲームというものを形作るための味つけのひとつであると考えています。

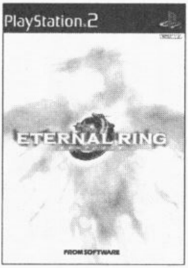
小説にしても映画にしても、たとえそれがどんなに優れたストーリーでも、それを紡ぎだす文章の美しさや、映像の素晴らしさがあって初めて成り立つものではないかと思います。あるいは上質の文章や映像といったものは、ただそれだけで多くの人を魅了する力を持つものだと私は思います。ゲームの場合はそこにさらに、遊びとしてのルールであったり、システムといったものが加味されるわけです。

たとえばスポーツにストーリーはありません。そこにはただ設定されたルールと、参加する人間が存在するだけです。それでも時にそれはどんなストーリーをも上回る最上の瞬間を提示してくれたり、あらゆる思索に勝る物語を垣間見せてくれる場合があります。それは偶然と人

の意思が作りだす、ある意味で奇跡的な瞬間だと思います。
　ルールがあって、システムがあって、映像があって、音楽があって、ストーリーがあって、ひとつのゲームは形作られます。システムのためにストーリーがあったり、映像のためにルールがあったり、大切なものは常にひとつではないと思います。少なくとも私はそう考えていて、そして『エターナルリング』というゲームと、そのストーリーはできました。
　そうした目的のために作られたストーリーを、単体で魅力ある本にするという作業は、非常に困難なことだと思います。正直私だったらやりたくないです。
　ゲームにしかできないことがあるように、小説にしかできないことがあります。
　私は自分の手掛けたゲームのノベライズを読むとき、いつもそれを楽しみにしています。
　そこにはもう私の知っているものではない、違う姿があると思えるからです。
　自分の携（たずさ）わった世界がまた違う形として皆さんに楽しんでいただけることになれば幸いです。

平成十二年五月
株式会社フロム・ソフトウェア
『エターナルリング』プロデューサー　鍋島俊文（なべしまとしふみ）

エターナルリング



対応機種●	プレイステーション2
メーカー●	フロム・ソフトウェア
ジャンル●	RPG
定価●	6,800円(税抜)
発売日●	2000年3月4日発売

伝説の秘宝エターナルリングとは、いったい何なのか？　プレイヤーは主人公カインとなり、魔力を宿す指輪の力を駆使して伝説の謎と自分の過去を探っていく。舞台となるのは、竜、そして多くの魔物が棲む絶海の孤島「不帰の島」。壮絶な3Dアクションバトルに加え、ミステリアスなストーリーが独特な雰囲気を醸しだす大作RPG。PS2本体と同時発売で唯一のRPGとしても話題を呼んだ。

◉竹内　誠著作リスト

「ウィーザドリィ異聞　リルガミン冒険奇譚」（ログアウト文庫）
「ウィーザドリィ異聞　続リルガミン冒険奇譚」（同）
「ウィーザドリィ異聞　続々リルガミン冒険奇譚」（同）
「ウィザードリィ・ベイン・オブ・ザ・コズミック・フォージ　呪われし聖筆」（同）
「真・魔韻の書　上　魔影の巻」（同）
「真・魔韻の書　下　魔韻の巻」（同）
「真珠湾強襲占領」（コスモノベル）
「台湾絶対防衛線」（同）
「高高度帝都防空戦」（同）
「太平洋砲雷決戦」（同）
「航空戦艦打逆襲1　激闘のミッドウェイ」（同）
「航空戦艦打逆襲2　第二次ミッドウェイ海戦」（同）
「ヴァンパイアハンター〈上〉」（電撃文庫）
「ヴァンパイアハンター〈下〉」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先
〒101-8305 東京都千代田区神田駿河台1-8 東京YWCA会館
メディアワークス電撃ゲーム文庫編集部
「竹内 誠先生」係
「RURU先生」係

■

電撃文庫

エターナルリング

竹内 誠（たけうち まさる）

発行 二〇〇〇年七月十五日 初版発行

発行者 佐藤辰男
発行所 株式会社メディアワークス
〒一〇一-八三〇五 東京都千代田区神田駿河台一-八
東京YWCA会館
電話〇三-五二八一-五二〇八（編集）
発売元 株式会社角川書店
〒一〇二-八一七七 東京都千代田区富士見二-十三-三
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）
装丁者 荻窪裕司（META+MANIERA）
印刷・製本 あかつきBP株式会社
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-8402-1482-4 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Time, Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦


ジーズ
電撃G's文庫
ルームメイトノベル
佐藤由香の場合
早見裕司
Illustration 丸藤広貴
(Nest Corp.)
夏はやっぱりお姉さん!
(でしょ?)
突然の同居人は、ナント3つ年上の女子大生!
はてさて……
発行◎メディアワークス

DENGEKI BUNKO